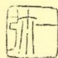
隠れ簑

剣客商売

池波正太郎





新潮文庫

新潮社のハードカバー

剣客商売庖丁ごよみ

池波正太郎

「剣客商売」シリーズに登場する四季折々の食物に、練達の料理人が挑み、"江戸の味"を再現する。著者から読者への最後の贈物=本。



カバー 装画 中一弥

カバー レイアウト 多田進

剣客商売

隠れ簑



池波正太郎

剣客商売 隠れ簑

池波正太郎

新潮文庫

い 16 61

新潮文庫 480





9784101156613

1910193004800

定価480円（本体466円）

盲目の武士をやさしくいたわる托鉢僧——旅の途中で出会った、年老いた二人連れが何故か秋山大治郎の心に残った。江戸に帰った大治郎は、偶然試し斬りされかかった件の老僧を助け、二人が二十八年におよぶ仇討ちの敵同士であることを知る。人知をこえたその絆の不思議さを描く「隠れ簑」。小兵衛が小金持ちの隠居と見られて盗賊に狙われる「徳どん、逃げろ」など、シリーズ第7弾。



ISBN4-10-115661-1

C0193 P480E

新潮文庫

池波正太郎の本

忍者丹波大介
男(おとこぶり)振
侠客
剣の天地
食卓の情景
闇の狩人(上・下)
上意討ち*
散歩のとき何か食べたくなって
闇は知っている
雲霧仁左衛門(前・後)
さむらい劇場
おとこの秘図(上・中・下)
忍びの旗
日曜日の万年筆
真田騒動
男の作法
あほうがらす
おせん
男の系譜
味と映画の歳時記
剣客商売
剣客商売② 辻斬り
剣客商売③ 陽炎の男
剣客商売④ 天魔
剣客商売⑤ 白い鬼
剣客商売⑥ 新妻
剣客商売⑦ 隠れ簑
剣客商売⑧ 狂乱
黒白(上・下)
映画を見ると得をする
真田太平記(一)—天魔の夏—
真田太平記(二)—秘密—
真田太平記(三)—上田攻め—
真田太平記(四)—甲賀問答—
真田太平記(五)—秀頼誕生—
真田太平記(六)—家康東下—
真田太平記(七)—関ヶ原—
真田太平記(八)—紀州九度山—
真田太平記(九)—二条城—
真田太平記(十)—大坂入城—
真田太平記(十一)—大坂夏の陣—
真田太平記(十二)—雲の峰—
(全十二冊)
編笠十兵衛(上・下)
フランス映画旅行
むかしの味
あばれ狼
ドンレミイの雨
谷中・首ふり坂
まんぞく まんぞく
秘伝の声(上・下)
池波正太郎の銀座日記〔全〕
黒幕
原っぱ
ないしょ ないしょ

*の巻には、「新潮カセットブック」収録の作品が入っています。

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

剣客商売 隠れ簑

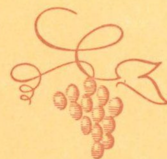
池波正太郎著



新潮社

剣客商売 隠れ簑

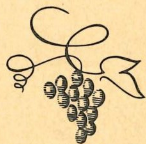
池波正太郎著



新潮文庫

剣客商売 隠れ簑

池波正太郎著



新潮社版

4712

目次

春愁……七
徳どん、逃げろ……五〇
隠れ簑……九八
梅雨の柚の花……一四八
大江戸ゆばり組……一九七
越後屋騒ぎ……二四七
決闘・高田の馬場……二九七

解説　常盤新平

剣客商売

隠れ簑(みの)

春愁

桜花（はな）もさかりのころになると、鐘ケ淵（かねがふち）の、秋山小兵衛（あきやまこへえ）の隠宅へも、大川（おおかわ）（隅田川（すみだがわ））辺（べ）りの其処此処（そここここ）へ行楽に出て来る人びとのざわめきが、つたわってくるかのようだ。

「いまごろは、何処（どこ）へ出て行っても、さわがしくて気疲れするばかりじゃわえ」

小兵衛は、このところ、隠宅へ引きこもり、一足も外へ出なかった。

今日も、小兵衛は居間に寝そべり、昼下りの一時（ひととき）を、うつらうつらとすごしている。

おはるは、朝から関屋村の実家（さと）へ野菜を取りに行き、まだ帰って来ない。

開けはなった障子の向うの庭先へ、人影がさした。

小兵衛は背中を向けたままで、

「どなた？」

「嶋屋孫助（しまやまごすけ）でございます」

「おお……」
振り向き、半身を起して、
「久しぶりだのう」
「ごぶさたをいたしまして……」
「ま、あがりなさい」
「はい、はい」
「あいにくと今日は女の手がないのじゃが、ともかく、いっぱいやろう」
嶋屋孫助は、芝の増上寺中門前二丁目に店舗がある刀屋である。
〔御刀脇差 拵所〕
の看板を掲げ、刀の鞘から柄、鐔や笄などに至るまで、いっさいの刀装をあつかい、よい職人を抱えているので、大身旗本の屋敷への出入りもすくなくない。
いま、小兵衛が差料にしている藤原国助の銘刀も、小兵衛の好みを知りつくした嶋屋孫助が苦心の刀装であった。
鞘は呂色鞘。柄は白鮫黒糸の菱巻き。名工・林又七作の秋草をあしらった鐔。むらさきの畝織りの下緒という上品な拵えで、
「さすがに、嶋屋じゃ」
去年の秋に、国助の銘刀を研ぎにやったのち、すっかり拵えも変えてみたいと、嶋屋にたのみ、刀装が出来あがってきたときは、

「ふうむ。さすがに……」
何日も何日も、その刀装をながめて飽くことを知らぬ秋山小兵衛だったのである。
「すっかり、あたたかくなりましてございますな」
「わしも、あと幾度、桜花を見ることができるかなあ」
嶋屋は、小兵衛が出した茶碗の冷酒を一口のんで、ふくみ笑いをした。
「おかしいかえ?」
「大先生は、おいくつになられました?」
「六十をこえたことは、たしかじゃよ」
「ならば、あと三十度は、桜花をごらんになれましょう」
「ばかをいうなよ」
「いえいえ、私のほうが、先へ、あの世へまいっておりますよ」
五十六歳の嶋屋孫助は、血色もよく、体格も立派なものだが、
「さよう、私なぞは、あと十年も生きればよいほうかと存じます」
嶋屋は、どこでまなんだか知らぬが、人相手相を看る。
それがまた、よくあたることを、嶋屋とのつきあいが二十年におよぶ小兵衛は何度も見聞きしていた。
しかし、自分が九十余歳まで生きるといわれたのは、今日がはじめてであった。
「嶋屋。そんなに生きていたのでは、たまらないな」

「何をおっしゃいます。御新造さまが、まだ、お若いのに……」

「それをいうな。はずかしいではないか」

小兵衛は、のみほした冷酒の茶碗を置き、

「さて、嶋屋。何か今日は、特別の用事があってのことらしいな」

ずばりといわれて、

「はい」

こうした小兵衛の、常人には計り知れぬ感能のはたらきを、よくわきまえている嶋屋孫助は、さして、おどろきもせず、

「一昨日のことでございましたが……」

「ふむ……?」

「愛宕下の通りで、後藤角之助を……」

「角之助を、見かけたと?」

「はい」

小兵衛の両眼が、きらりと光った。

このごろ、おはるが餌をあたえるものだから、いい気になってあらわれる三毛猫が庭へ入って来て、遠くから小兵衛をながめている。

沈黙の後に、小兵衛が、

「おぬしのことじゃ、後藤角之助の居所を、つきとめておいてくれたろうな」

「はい」

「お前さんが、後をつけたのかえ?」

「愛宕さまの門前にある知り合いの茶店の亭主に、後をつけてもらいましたので」

「そうか。それで角之助は、どのような……?」

「むかしにくらべると、こぎれいな姿をしておりましてございますよ」

「ほう……」

「したが、大先生……」

「む?」

「どうなさいます?」

「どうもこうもないわえ。きゃつめを見出したとあれば、斬って捨てずばなるまいよ」

秋山小兵衛は、しずかにそういって、煙管を取りあげた。

一

その事件が起ったのは……。

小兵衛の息・秋山大治郎が父の手もとをはなれ、山城の国愛宕郡大原の里へ隠棲していた辻平右衛門のもとへ修行に出た翌年であった。

ちょうど十二年前のことになる。

そのころ……。

秋山小兵衛は、四谷仲町にあった道場の主であった。

おはるは、まだ、十一歳の少女にすぎず、関屋村の父母のところにいて、弟の子守をしていたものだ。おはるが小兵衛の道場へ女中に出たのは、それから六年ほどのちのことになる。

当時、四谷の秋山道場といえば、小さな構えながら、

「知る人ぞ知る……」

実力をそなえた門人たちがいて、修行の激烈さに堪えかね、新しく入門する者で、十人のうち一人か二人ほど残ればよいほうであった。

したがって、門人の数が多いとはいえなかった。

恩師・辻平右衛門の許をはなれ、独立したときの秋山小兵衛は、わが道場を拡張し、将軍ひざもとの大江戸に於ける名門に仕立てあげようという野心もないではなかったが、

「そのためには、ただ、おのれの剣を磨くだけではすまなくなる」

諸家の庇護をうけ、援助を受けるためには、自分自身と門人たちを鍛えることに劣らぬ精力をもって、諸家へはたらきかけねばならぬ。

世辞もいわねばならぬし、汚濁のふるまいもあえて仕てのけなくては、大金を得ることはできぬ。

金がなければ、道場の拡張はのぞめない。

「やってやれぬことはなかったが……どうも、日々に道場へ出て、おもいきり稽古をせぬことには、生きている甲斐がなかった。おのれの芸へ打ち込めば打ち込むほど、名利とは遠くなる。ま、たとえば、わしが、世の中を巧みに泳ぎまわり、わが道場を押しひろげたとする。そうなれば、また、その大きくひろがった道場を持ちこたえるために、芸をそっちのけにして世の中を泳いでまわらねばならぬ。そうしたら、十年二十年は、またたく間にすぎてしまい、あっとおもうたときは、わしの剣術がつかいものにならなくなっていよう。よほどに強い奴があらわれたりして、勝負をいどまれたとき、なまくらになったわしの体も、手足もいうことをきいてはくれぬというわけじゃ。これでは何のために道場をひろげたのか、わけがわからなくなってしまう。

いっそ、金がほしいのなら、剣術にかぎらず、別の商売をしたほうが、どれだけましなことかと……まあ、そう考えたわけさ。

いずれにせよ、わしは生得、剣術が好きだったのだ。そこで、立身出世のほうはあきらめたのじゃ」

このようなことを、息子の大治郎にも洩らしたことはない小兵衛が、ほかならぬ刀屋の嶋屋孫助へ苦笑まじりに語ったことがある。

そのくせ大治郎には、

「お前の剣術は、いつになったら商売になるのじゃ?」

などといったりする小兵衛なのだ。

もしやすると小兵衛は、そうした自分の言葉へ対する息子の反応を、凝と見まもっている

のやも知れぬ。

はなしを、もどそう。

その、十二年前の秋に……。

小兵衛の門人で、笠井駒太郎という若者が殺害された。

笠井駒太郎は、大和・高取二万五千石・植村駿河守の江戸藩邸にいる身分の軽い家来の一人息子であった。

入門したのは、十六歳のころで、剣の筋もよろしく、性格もひたむきで、師の小兵衛にはあくまでも素直に接しながら、他の門人たちとの稽古になると、先輩の剣士たちを相手に、外見はむしろ傲岸とも感じられるほどの堂々たる立ち合いをする。

叩きつけられ、突きまくられ、血だらけになって打ち倒されても、その態度はどこまでも対等の位をとり、稽古以外のときもへり下ったり、頭を下げたりはしなかった。

したがって、

「礼儀をわきまえぬやつ」

だと、ずいぶん憎まれたらしい。

ところが小兵衛は、内心に、

(若いうちは、あれくらいでないと、ものにならぬわ)

と看て、駒太郎の成長をたのしみにしていた。

ほとんど、口をきかない駒太郎を、あるとき小兵衛が、そっと居間へよび、茶と菓子を出

してやり、

「さ、すこしはしゃべってごらん」

こういうと、駒太郎は、

「道場へ来て口をききますと、気合いが逃げてしまいます」

と、こたえた。

その返答も、小兵衛は気に入った。

果して、三年後の笠井駒太郎は、秋山道場でも十指の内へ入るほどの剣士になったのである。入門当時は、眼ばかりぎょろりと大きくて、痩せこけた体だったのが、見ちがえるほどの体格となり、挙動も落ちついてきた。

(いよいよ、たのしみになってきた……)

一人息子の大治郎を他国へ修行に出していた小兵衛だけに、駒太郎がひとしお可愛かったのであろう。

笠井駒太郎は、月のうち何日かを道場へ泊り込み、師の小兵衛の身のまわりの世話をするようにもなった。

もっとも、小兵衛が駒太郎へつける稽古は、その可愛さと対照的にきびしかった。

それだけに、彼が突然、殺害されたことを知ったときの、小兵衛がうけた衝撃は烈しく、悲しみは深かった。

笠井駒太郎を殺したのは、十二年後のいま、嶋屋孫助が居所をつきとめたという後藤角之

助であった。
角之助は、小兵衛の道場からも近い四谷千日谷に住んでいた浪人で、当時二十七歳。
剣術も相応につかうし、人柄も気さくで、時折、秋山道場へあらわれ、
「ちょいと、汗をかかせてもらいましょうかな」
と、小肥りの体を、それこそ汗みずくにして、ころあいの門人を相手に稽古をしていたものだ。
小兵衛は、角之助に、あまり関心がなかった。
なぜなら、小兵衛が道場に出ているときは、めったにあらわれぬ角之助だったからである。
嶋屋孫助は、小兵衛が不在の折に道場へ来て、二度ほど、角之助を見ている。
刀屋だけに、剣術の稽古を見るのが好きな孫助は、道場で見物をしていて、ほかならぬ笠井駒太郎から後藤角之助を紹介されたという。
そのとき、角之助は、
「いや、とてもとても……おれの差料の拵えをたのむような相手ではない。いずれ、ふところが暖かくなったら、たのむとしよう」
と、いったそうな。
それで、嶋屋孫助は、角之助を見おぼえているのだ。
その後藤角之助が、なんのわけあって駒太郎を殺害したかは、いまもって、小兵衛にもわからぬ。

ただ、秋山小兵衛が、
(角之助を見つけたなら、斬って捨てる!!)
おもいきわめているのは、千駄ケ谷の松平肥前守・下屋敷裏の林の中で殺されていた駒太郎の死体の上に、
「この者、笠井駒太郎を討ったるものは、四谷仲町在住の秋山小兵衛なり」
と、したためられた紙が、小柄で刺しとめられていたからだ。
このため小兵衛は、町奉行所の取調べをうけ、大いに迷惑をした。
そのうちに……。
同日の夕暮れ近い時刻に、千駄ケ谷八幡宮の境内で、笠井駒太郎と後藤角之助が立ちばなしをしているのを、
「見かけましたよ」
と、いい出た者がいる。
これは、いつも秋山道場へ野菜を売りに来ていた千駄ケ谷の百姓・為吉であった。
為吉は、道場の武者窓から、門人たちの稽古をのぞき見するのが好きで、駒太郎と角之助が立ち合っているのを何度も見ている。
為吉の証言を得たのは、現場の近辺の聞き込みを根気よくつづけていた四谷の御用聞き・弥七の手柄であった。
すでにそのころ、弥七は小兵衛の道場へ稽古に通っていたのだから、必死だったにちがい

ない。

「それっ!!」

というので、捕手が後藤角之助の浪宅へ駆け向ったけれども、一足おそかった。

浪宅は「蛻の殻……」で、以来、角之助は行方知れずになっていたのだ。

死体と共にあった件の紙の筆跡を照合すべきものは何一つ無い。

門人たちも、また、駒太郎の家族たちも、角之助が彼を殺害するような事情を何も知らぬ。

ただ、道場における二人は、よく稽古をしていたようだが、いわば角之助は正式の門人ではない。

事件の半年ほど前から、ふらりとあらわれ、寛大な小兵衛の黙認を得て、

「体が、鈍ってはいけぬから……」

と、稽古をさせてもらっていたにすぎない。そして、それは事実だったのであろう。後藤角之助もまた、剣術が好きだったのである。

したがって、角之助と深いつきあいをしていた門人はなかったし、おそらく、笠井駒太郎とても同様だったのではあるまいか……と、看るよりほかはない。

だが、駒太郎は殺された。

してみると、二人の間には、小兵衛や他の門人たちが知らぬ何らかの事情があったのではないか……。

二

翌朝も、まだ、暗いうちに、

「ちょいと、出かけて来るぞ」

秋山小兵衛が、まだ、ぐっすりとねむっているおはるへ声をかけた。

「あれ……」

目ざめたおはるが、目をみはった。

いつもの外出の仕度ではなく、軽衫ふうの袴をつけ、藤原国助の大刀を手にしている小兵衛なのである。

「こんなに早く、どこへ行きなさるんですよう」

「いや、ちょいとな、刀屋の嶋屋のところへ行って来る」

「朝御飯もあがらないでかね?」

「嶋屋で食べさせてもらうつもりじゃよ」

「まあ……あきれた大先生だこと」

「日暮れまでには帰る。では、行って来るぞ」

態度と声音は、いつもとすこしも変らぬ小兵衛なので、おはるは、いくらか安心をしたらしい。

昨日、自分の留守中に、嶋屋孫助が来訪したことは、小兵衛から聞いていることだったし、

（嶋屋さんと、どこかへ遠出をしなさるのだろうか……？）

と、おもい、せめて、お茶だけをと起きあがったときには、すでに小兵衛、裏口から外へ出てしまっている。

「あれまあ、何を、あわてていなさるのかねえ……？」

出がけに小兵衛が、塗笠を手にしたのを見て、そのことが何となく、おはるには気がかりであった。

小兵衛は、嶋屋孫助方へ立ち寄るつもりはない。

目ざす後藤角之助の居所は、嶋屋からくわしく聞き取った上、そのあたりを簡単に写した絵図のようなものまで書かせておいた。

隠宅を出てからの、秋山小兵衛の足取りは速かった。

芝口の薪河岸にある飯屋へ入り、熱い味噌汁で朝餉をすませたとき、まだ五ツ（午前八時）前であったろう。

飯屋を出てからは、ゆっくりと歩み、目ざす場所へ到着した。

そこは、麻布桜田町にある霞山稲荷の門前であった。

すなわち、現在の港区元麻布三丁目にあたる地点で、つい数年前まで、霞山稲荷の名にちなみ、この近辺を〔霞町〕とよんでいたものだ。

霞山稲荷明神は往古、桜田の霞が関にあったのを、江戸が徳川将軍の城下となってのち、

麻布へ移された。

本尊は吒枳尼天像で、明神社の縁起はまことに古い。

境内は、さしてひろくないが、石造りの大鳥居前に茶店が七軒ほどたちならび、桜田通りに面していることもあって、参詣の人びとも多く、茶店も繁昌していた。

小兵衛が目ざす茶店は、大鳥居に向って右の端にある〔猿屋〕という茶店なのだ。

藁ぶき屋根の茶店は、いずれも戸を開けており、朝詣での人びとが茶をのんだり、団子を食べたりしている。

花曇りの、妙に蒸し暑い朝で、小兵衛の老体は汗ばんでいた。

先ず、霞山稲荷の境内へ入り、本堂、地蔵堂、観音堂を拝した小兵衛は、絵馬堂の絵馬をながめつつ、猿屋の裏側を見やった。

裏側は、霞山稲荷南面の木立に接している。

それはつまり、茶店の猿屋の裏口から、境内へも抜けられるということだ。

小兵衛は境内を出て、猿屋の真向いにある茶店へ入り、茶をのみながら、猿屋を見まもった。

年のころは三十二、三に見える大年増が小女ひとりと共に客をもてなしていた。白粉の気もない顔の血色があざやかで、いかにも健康そうな女だ。これが、猿屋の女あるじなのであろう。

嶋屋孫助からたのまれ、後藤角之助が猿屋へ入るのを見とどけた愛宕下の茶店の亭主・嘉

六は、そこは商売柄で、近辺の茶店に休み、猿屋のことも、いささかは聞き出してくれた。

猿屋の女あるじは、名をお金といい、五年前に亭主と死別をしたそうな。

ひとりむすめも病死してしまったお金は、以後、亭主の茶店を女手ひとつに切りまわしているという。

嘉六は、嶋屋孫助に、こういったそうだ。

「ともかく、日が暮れて、猿屋が戸じまりをするまで、あの浪人は入ったきり出て来ませんでしたよ」

浪人……すなわち後藤角之助については、嘉六も、聞きこみをさしひかえた。くわしい事情は知らぬし、うっかり深入りをして、相手にさとられても困る。ともかく自分は、嶋屋の旦那に居所をつきとめてくれとたのまれただけなのだから、と、あたりの茶店も戸を閉めはじめたので、引きあげて来たとのことだ。

（さて……どうしてくれようか、な……？）

茶をのみながら、小兵衛は思案をした。

十五年も前の小兵衛なら、いきなり、猿屋へ入って行き、探りを入れたことだろうが、そこは年の功というやつで、もしも、角之助以外の、何も事情を知らぬ人びとへ迷惑がかかってはと、先ず、そのことを考えてしまう。

（ともかく、今日は、この目で、角之助が猿屋にいることをたしかめればよい。その上で、きゃつめを一人きりで、どこかへさそい出さねばならぬ）

このことであった。

そこで、小兵衛は茶の御代りをたのみ、近寄って来た茶店の老爺へこころづけをわたし、猿屋への探りをはじめようとした。

そのときだ。

霞山稲荷の境内から、ふらりと、後藤角之助があらわれたのである。

「さ、これを……」

と、心付だけをわたし、小兵衛は塗笠をかぶりつつ、傍を向いた。

その前の路上を、角之助が北へ向って通りすぎて行く。

すかさず、秋山小兵衛は茶店を出て、後をつけた。

昼どきも近くなっていることとて、人通りも多い。

（さて、どこで、よびとめてくれようか……？）

路上での剣戟は避けたい。

いや、避けねばならぬ。

なるほど、後藤角之助は、十二年前にくらべて身なりがよくなっている。着物も袴も折目がついているし、総髪にも手入れがゆきとどいていた。

ただし、十二年の歳月はあらそえぬ。

いまの角之助は三十九歳になっているはずだ。

小肥りの体軀には、さらに肉がつき、髪の毛が、いくらか薄くなっている。

角之助は材木町へ出ると右へ折れて、六本木の方へ、ゆっくりと歩む。

そして、芋洗坂へ出て、左へ曲った。

左側に、教善寺という寺院がある。

その境内へ、角之助が入って行くではないか。

(この寺に、何用あってのことか……?)

角之助の後から惣門を入り、松の木蔭へ身を寄せた小兵衛は、彼方の鐘楼の下で、後藤角之助が中年の侍と出合い、何やら語りはじめているのを見た。

塗笠の内から目を凝らした秋山小兵衛が、

(や……?)

はっとなった。

その中年の侍を、たしかに見おぼえている。

「ふうむ……」

微かに、小兵衛は唸った。

談合をしているらしい二人の顔、その姿が、一種の緊迫をたたえていた。

しばらくして、中年の侍から何やら受け取って、これをふところに入れた後藤角之助がにやりと笑い、肩をそびやかし、惣門の方へもどって来るのを見て、小兵衛は木蔭の位置を移し、これをやりすごした。

中年の侍は、舌打ちをしかねぬ様子で角之助を見送っていたが、このほうは教善寺の裏門から町屋をぬけ、六本木の大通りへ出て行った。

小兵衛は、惣門の外へ出て、後藤角之助が霞山稲荷の方へ引き返して行くのを見とどけるや、反転して境内を横切り、かの中年の侍の姿を追ったのである。

侍は、大通りを東へすすみ、飯倉の榎坂へかかる手前を左へ折れた。

その右側の一角に、剣術の道場があった。

門構えも相当なもので、

〔小野派一刀流・飯田平八郎〕

と、したためた道場看板が掲げられている。

「さてこそ……」

と、笠の内から小兵衛のつぶやきが洩れた。

飯田平八郎の名も顔も、小兵衛は知悉しており、数年前から、彼が麻布飯倉に道場を構えていることも耳にしていた。

ただし、その道場を、わが目にたしかめたのは、いまがはじめてであった。

三

飯田平八郎直行という剣客は、はじめ、四谷表町に道場を構えていたのだ。

そこは、四谷仲町の秋山小兵衛道場とは、それこそ、

「目と鼻の先……」

の、近間であった。

むかし、光昌寺という小さな寺があり、それが淀橋へ移ったのち、荒れほうだいの草地になっていたところへ、堂々たる門構えの飯田道場が建った。

目の前は、道をへだてて紀伊家の宏大な上屋敷。江戸城の外濠にも近い。

坂道を曲りのぼったところの、寺と寺とにはさまれた小さな秋山道場とは、構えも地の利も雲泥の差があったといえよう。

飯田平八郎には、下谷・御徒町に屋敷がある八千石の大身旗本・室賀大和守が後楯になっているとかで、道場開きの当日には、大身旗本の家来たちもつめかけ、門人も四十名ほどいて、これらはいずれも、旗本の子弟たちであった。

道場は、いかめしい門と塀に鎧われてい、秋山道場のように、通りかかった物売りが武者窓から気楽に稽古の見物をするというわけにはまいらぬ。

当の飯田平八郎は、三十二、三歳であったろうか。

六尺に近い立派な体軀のもちぬしで、これが総髪を肩までたらし、土地の人びとにいわせると、

「ぴかぴかと光るような……」

贅沢な衣裳に身を包み、門人たちを従え、肩で風を切り、あたりを睥睨しつつ歩む態は、たちまちに土地の名物となった。

そして、一年ほどのちに、飯田平八郎から、秋山小兵衛へ、

「一手の御指南をうけたい」

という申し込みがあった。

いかに、土地の名物になったとはいえ、仲町の秋山道場の実力は、江戸の剣術界において、

「知る人ぞ知る……」

ものなのである。

これが、遠い場所にあるならば何のことはない。

しかし、目と鼻の先にある。

これは、なんとしても、

「秋山小兵衛を打ち破らねばなるまい」

と、飯田平八郎が決意したものらしい。

名人・秋山小兵衛を打ち倒せば、飯田道場に貫禄もそなわり、光彩は、さらに輝くことになる。

小兵衛は、すぐに、

「よいとも」

と、応じた。

後年の小兵衛なら「他流との試合は、おことわりいたす」と、身を避けたろうが、当時はまだまだ、五十になるやならずで、血気もさかんであった。

飯田平八郎は、門人十人をつれて、秋山道場へ乗り込んで来た。

双方の門人たちが道場の内外へつめかけて、凄まじいばかりの熱気が充満する中で、いよいよ、二人が木太刀をひっさげてあらわれた。

平八郎は襷・鉢巻も物ものしい仕度であったが、小兵衛は短袖の着物の裾を高々と端折り、襷も鉢巻もせぬ姿となり、気楽な調子で、

「さあ、おいで」

と、声をかけたものである。

これで、先ず、平八郎が激怒してしまった。

われを忘れた激怒は、試合に禁物である。

怒り狂った飯田平八郎の猛烈な打ち込みに対して、

「先生は、これも、まるで弦をはなれた矢のように、相手のふところへ飛び込んで行ったよ」

と、試合を見ていた四谷の弥七が女房に語った。

「それで、どうなったんですよ?」

「それっきりさ」

「それっきりって、お前さん……?」

「だって、お前。飯田の平公が打っ倒れてしまったのだもの。それっきりさ」

「まあ……」

「いや、うちの先生の強いのなんの……見物はみんな、ぽかんとしていたぜ。平公は秋山先生の突きを喉元へ喰って、しばらくは起きあがることもできなかったよ」

と、まず、こうしたわけで、飯田平八郎の惨敗は、たちまちのうちに四谷一帯にひろまってしまった。

小兵衛は、のちに、

「あの飯田平八郎は、かなりの遣い手だ」

と、洩らしたそうだし、その言葉に嘘はなかったろうが、あまりにもあざやかな勝ち振り、負け振りだったものだから、どうにもならない。

何しろ、門人たちのみか、土地の人びとも窓の外から試合を見ていたのだ。

十日後に、飯田道場は閉鎖されてしまい、平八郎直行は何処かへ姿を隠してしまった。

いま、その道場跡は、たしか、喜撰堂という茶問屋になっているはずだ。

後藤角之助が、笠井駒太郎を殺害し、行方知れずとなった事件は、それから半年後のことであった。

そして、十二年後のいま、六本木の教善寺の境内で、角之助と密談をかわしていた中年の侍が、飯倉へ移っている飯田道場へ入って行った。

これは、いったい、何を意味するのか?

ただし、秋山小兵衛は、中年の侍に見おぼえがあった。

この侍は試合の当日も、飯田平八郎へ付きそって来て、身仕度の世話をしたりしていた式場某である。平八郎の門人というよりも、むしろ、家来のような物腰であった。

当時の式場は、もっと若かったが、小兵衛の目にあやまちはない。そういえば飯田平八郎も、すでに四十をこえているはずだ。

（ふうむ……後藤角之助は、飯田道場と関わり合いがあるのか……そして、それは、近ごろのことなのか、または、十二年前のあのときからのものなのか？）

小兵衛の脳裡で、事態は、さらに押しひろげられてゆくかのようだ。

（はて……？）

これは、事を急いだとて、はじまらぬことになってきた。

秋山小兵衛は、間もなく、飯田道場の門前をはなれ、四谷の伝馬町に住む御用聞きの弥七の家へ向ったのである。

歩みつつ、小兵衛は、笠井駒太郎の死体の刀痕をおもい起していた。

一カ所は背中の深い突き疵である。

そして、致命的な刀痕は、駒太郎の右の頸部から喉元、胸へかけて切り割られたものであった。

四

「もう、だめですよ。近所の目もござんすし、こんなことをしていたら、きっと、人の目にもとまり、口にものぼるし、困ってしまいますから……」

とか、さらに強く、

「この家を、わがもの顔にしていなさるのか。あつかましい」

とか、

「さあ、帰って下さい。帰らないと、大声を出しますよ」

などと、猿屋の女あるじ・お金は血相を変え、追い立てんばかりにしたのだけれども、後藤角之助は一言もこたえぬ。

抵抗し、もがきぬくお金の豊満な体を捩じ伏せるように押し倒し、抱きすくめて、女の体の急所を手指で突き、脚をからめ膝をつかって、たちまちに、身うごきもならぬようにしてしまった。

「よ、よして下さい。やめて……」

もはや、お金の声にはちからが失せ、うったえかけるようにいいつづけるうち、急に、ぐったりとなって呼吸も荒く、

「……どうして、こんな……私は、もう、いけない……」

しどろもどろに、何をいっているのだか、自分でもわからなくなってきはじめた。

角之助の右手が、お金の襟もとを押しひろげ、ふっくりとこぼれ出た乳房へ顔を押しつけるや、

「ああ……」

お金の双腕が、角之助のくびすじを巻きしめてきたではないか。

(ふん……こいつも、やはり女だのう……)

心得きった角之助は得意満面で、お金の唇を吸いながら、腕を伸ばし、蹴出しを割って女の秘所へぴたりと手の腹をつけた。

お金の鼻息は火のように熱し、のしかかってくる男を拒もうともせぬ。

そこは猿屋の奥の小部屋で、寝床も敷いてなく、お金は日中、店ではたらく姿のままであった。

そもそも……。

半月ほど前、ぶらりと霞山稲荷の前へ来かかった後藤角之助は、足休めに、偶然、猿屋へ立ち寄り、お金を見た。

そのとき、お金が竜土町にある遠州屋という油屋の隠居と語り合っているのを、角之助は耳にはさんだ。

隠居は、よく霞山稲荷へ参詣に来るらしく、お金とは顔なじみの間柄である。

「ときに、御亭主が亡くなって、何年になるね?」

と、隠居が尋いたのへ、お金が、

「早いもので……もう、五年になります」

「そうなるかねえ。お前さんも、子供がひとりでもいてくれると、さびしさもまぎれようが……」

「いえ、御隠居さん。こうして、一所懸命にはたらいておりますと、別に、さびしくもございませんよ」

これを聞くともなしに聞いたとき、

(この女なら、大丈夫……)

と、見きわめをつけた。

放浪の暮しが長い角之助は、こうした機会を逃すものではなかった。

で、そのときは大様にこころづけをはずみ、自分の印象をお金に植えつけておいてから外へ出て、猿屋の裏手をたしかめておき、夜に入ってから立ちもどり、裏口から猿屋へ押し込んだ。手つだいの小女は、店をしまうと広尾の家へ帰ることも、お金と隠居の会話で知っていた。

そのときは、もっとも抵抗が激しかったが、剣客でもあり、こうしたことの経験が数えきれぬ角之助にとって、女体の自由を奪うことなど、わけもないことなのだ。

いざとなると、久しく男の肌に接していず、必死に忘れようとして忘れきれぬ大年増のお金だけに、その反応もまた激しく、

(こいつはいい。当分、この女にきめておこうか……)

角之助を、大いによろこばせた。

いまの角之助は、きまった居所がない。

今度は、江戸へもどってから一月半ほどになるが、この十二年間に、四度ほど、江戸へもどっている角之助であった。

江戸にいないときは、大坂か京都にいて、好き勝手なことをして暮し、いよいよ金に詰ってくると江戸へもどる。

もどって来ては、相手を強請(ゆすり)にかけ、金を引き出すのである。

その相手こそ、ほかならぬ飯田平八郎なのだ。

十二年前の、あのとき……。

後藤角之助は、飯田平八郎から金五十両で、秋山小兵衛殺害のことを引き受けた。

むろん、剣を把(と)って立ち向えるものではない。

毒殺しようというのだ。

平八郎は、門人というよりも、わが家来の式場勘右衛門(かんえもん)を通じ、角之助の金ずくのさそいに乗った。

小兵衛に惨敗を喫した口惜(くや)しさは、自負心の強烈な飯田平八郎にとって堪えがたく、忘れきれるものではなかったらしい。

そうかといって、これまた、ふたたび剣をまじえて勝てるとはおもえぬ。

そこで、角之助の挑唆(ちょうさ)に乗ったのである。

角之助には、それなりの考えがあった。

秋山道場の笠井駒太郎が借銀に苦しんでいるのを知っており、先(ま)ず、二十両を貸しあたえておき、さらに三十両をあたえよう。これはむろん、貸すのではない。

「さしあげよう」

そのかわりに、道場へ泊った夜、秋山小兵衛の酒へ毒薬(どくぐすり)を入れてのませてもらいたい、と、もちかけた。

むろん、駒太郎は、これをはねつけた。

「では、二十両をすぐさま返してもらいたい」

これが、角之助の切札であった。

あきらかに、笠井駒太郎の面上に、苦悩が疾(はし)った。

このときの、千駄ケ谷(せんだがや)八幡宮(はちまんぐう)における二人の談合を、百姓の為吉が目撃したことになる。

そして……。

しばらくしてから、笠井駒太郎が、近くの木立の中で殺害されたのであった。

下手人を秋山小兵衛にしたのは、後藤角之助が咄嗟(とっさ)のおもいつきである。

ところが、百姓為吉という証人があらわれ、わが身が危うくなったので、角之助は一散に江戸から離れた。

この間に、飯田平八郎が角之助へあたえた金は、笠井駒太郎への二十両と、角之助へ半金二十五両。合わせて四十五両ということになる。

それで結局は秋山小兵衛を殺害できずに、後難を慮(おもんぱか)って道場をたたみ、五年後に、飯田平八郎は麻布(あざぶ)飯倉(いいぐら)へ道場をひらいたのだ。

さて……。

お金は、ほとんど、身につけたものをむしりとられ、うつ伏せになったまま、身うごきもせぬ。

背骨が、両側の肉置(ししお)きに埋めこまれてしまったかのような、ひろびろとしたお金の背中と、大きくもりあがった臀部(でんぶ)とが汗に濡(ぬ)れ光っていた。

「ほうれ、見ろ。もう、おれとは、はなれられないだろうな」

「…………」

「おれのような男を手ばなすことはないぞ。ちがうか、おい……」

「およしがいるときは、困ります」

と、お金が弱よわしくこたえた。

およしは、通いの小女である。

「ふうん……」

「よ、夜ならば……」

「かまわぬか？」

「日中に、おいでになって、ここで、昼寝なぞしなさるから、困るんですよ」

「よし。せぬよ。わかった。夜に来よう。な、な……」

角之助は、お金の背中を抱きしめ、

「今夜、泊るぞ」

「朝は、およしが来るまでに、帰っておくんなさいますかえ？」

「ああ、帰る。帰るとも」

立ちあがった角之助が下帯ひとつの裸体のままで、台所へ出て、水瓶(みずがめ)の水を柄杓(ひしゃく)に汲(く)み、口へあてようとした、その瞬間であった。

いきなり、裏の戸が外から叩(たた)き破られ、黒い影が飛び込んで来て、小部屋へ逃げかけた後藤角之助の背中を、物もいわずに斬(き)った。

「うわ……」

のめりこむように、小部屋へころげこみ、大刀をつかみかけた角之助の頭を、追いせまった覆面の曲者(くせもの)の一刀が、ざっくりと割りつけた。

「むうん……」

仰向けに倒れ、角之助は即死した。

曲者は、一人ではなかった。

「助けてえ……」

悲鳴をあげ、逃げ惑うお金を、別の曲者が躍り込んで来て、斬りつけ、突き刺した。

お金の悲鳴で目をさまして、となりの茶屋の亭主が駆けつけて来たときには、すでに曲者どもの姿が消え失せていた。

となりの亭主の呼びかけにも介抱にも、お金はこたえることができず、間もなく息が絶えた。

五

それから三日後のことだが……。

下谷御徒町にある室賀大和守屋敷の裏門から、飯田平八郎の家来・式場勘右衛門があらわれた。

これを、裏門の外に待ちうけていた屈強の侍が二人、式場をまもるように寄り添い、御成街道へ出ると、筋違御門の方へ向った。この二人、飯田平八郎の門人である。

式場は、もう春もたけなわだというのに、白茶の絹頭巾をかぶっていた。

今日も朝から、空が曇っている。

三人が、虎の門から江戸見坂へかかったとき、すでに夕闇がたちこめてい、雨も落ちて来た。

三人は、足を速めた。

市兵衛町から我善坊谷へ出た三人が屈曲した坂道をのぼりかけようとした。

この坂をのぼり切れば、間もなく飯田道場の前へ出る。

あたりは大名・武家の屋敷がたちならんでい、日中でも妙にさびしい場所なのである。

足を速めて先を急ぐ三人の前へ、右側の組屋敷の塀際に屈み込んでいた小さな人影がふわりと立ちあがり、近づいて来た。

小男で、塗笠をかぶり、老齢のようであった。

秋山小兵衛だ。

式場勘右衛門が室賀屋敷を出たときから、ひそかに尾行して来た四谷の弥七が、先まわりをして、小兵衛へ知らせたのである。

「式場殿じゃな」

声をかけて、小兵衛が塗笠を取り、笠の緒を差添えの脇差の鞘へ巻きつけつつ、

「秋山小兵衛でござる」

と、名乗った。

名乗る前に、はっと立ちどまった式場は、小兵衛とわかったらしい。

あわただしく、式場が二人の門人へ何かささやいた。

うなずいた二人が、式場勘右衛門を庇うようにして、ぱっと前へ飛び出した。

「これ、式場殿。一言のあいさつもなく、わしに手向いをするつもりかな。こやつどもに、わしの首が打てるとおもうのかえ。それを知らぬおぬしでもあるまい」

「うぬ!!」

門人ふたり、気負いこんで大刀を抜きはらった。

「これ、式場殿。おぬしも知ってのとおり、肝心の後藤角之助が、何者かに殺害されてしもうてな。気の毒に、何の罪もない茶店の女あるじが、巻き添えにされて共に殺されたわえ。そのことを式場殿。おぬしは知っていような」

「う……」

頭巾をかぶっているし、夕闇と雨の中で、式場の顔色はわからぬが、全身が瘧にでもかかったようにふるえはじめた。

「さ、式場殿。亡き後藤角之助に代って、十二年前より今日にいたる事件の釈明をしていただこうか」

式場は、じりじりと後退する。

小兵衛は、眼前に白刃を構えて立ちふさがる二人を全く無視した態度で、

「式場殿。わしと共に、まいられよ」

よびかけたとき、

「たあっ!!」

門人の一人が、中段につけた刀を脇構えに転じ、その勢いをもって、下から小兵衛の老体をすくいあげるように斬りつけて来た。

小兵衛の体が、地を蹴って舞いあがった。

するどい刃風は、小兵衛の足の下の空間をなぎはらい、同時に、小兵衛の足は、こやつの頭を蹴りつけ、道へ飛び下りている。

「あっ……」

あわてて、飛び退る別の一人の脇を小兵衛が斜めに走りぬけざま、藤原国助の大刀を抜き打った。

「うわ……」

そやつは、小兵衛の抜き打ちに左股を深く切り割られ、地へのめった。

小兵衛に頭を蹴られた門人は、組屋敷の向うの細道から駆け寄って来た四谷の弥七の十手にくびすじを打たれ、がっくりと気をうしなった。

細道からあらわれたのは弥七のみではない。

一挺の町駕籠が、傘屋の徳次郎につきそわれ、道へ出て来た。

「さ、あの駕籠へ乗ってもらいたい」

刀にぬぐいをかけ、鞘へおさめつつ近づいてくる秋山小兵衛の前から、もはや、式場勘右衛門は逃げる気力さえも消え果てていた。

股を切られた門人は苦痛の唸り声を発し、必死に逃げようとしている。

六

秋山小兵衛は、捕えた式場勘右衛門を町奉行所へ送った。

四谷の弥七がつきそって行ったこともあり、奉行所でも、十二年前の事件の調書を蔵から引き出し、再吟味に取りかかった。

数日後。

式場の身柄は、幕府評定所へ移された。

評定所は、幕府の最高裁判所としての機能をもつ。

これは、式場の主人である飯田平八郎の出生の秘密が判明したからであった。

そして、飯田平八郎が、遺恨によって秋山小兵衛を殺害すべく、浪人剣客の後藤角之助に毒薬をあたえたこともわかった。

角之助は、秘密をもらした笠井駒太郎を殺し、下手人を小兵衛になすりつけようとしたが、これは、いささか小細工にすぎた。

「まことにもって、あきれ果てたる男にござりました」

と、式場勘右衛門が、取調べにあたった評定所改方へ吐き捨てるようにいったそうだが、式場自身、おろかな主人と角之助の間に立ち、金や毒薬を角之助へあたえたりしている。

もっとも、

「いくたびも、あるじを諫めましたなれど、おききわけ下されませなんだ」

式場は、こう申し立てたそうである。

小兵衛毒殺に失敗はしたけれども、飯田平八郎と自分との秘密をにぎっている後藤角之助から強請をかけられ、この十二年間に角之助がしぼり取った金は、実に三百三十両にのぼるというのだ。

大きな門戸を張っているとはいいながら、飯田平八郎は町道場の主である。よくも、それほどの大金を、やみやみと、ゆすり奪られていたものである。

式場は、

「かの、後藤角之助めの狡智は、実に人間のものとはおもわれませなんだ」

と、いった。

つまり、悪魔のような角之助にかかっては、これまで、どうしようもなかった。

角之助暗殺のことを何度もはかったが、その手に乗るような角之助ではない。

「金を出さぬと、奉行所へ訴え出る」

と、先ず、人をつかって手紙をとどけてよこす。

式場と出合う場所は、町なかの寺院であり、時刻は日中にかぎられている。

手をまわして後をつけさせても、角之助は、たくみに姿をくらましてしまうのが常であった。

お金の茶店にいることがわかったのは、偶然のことである。

角之助と式場が、六本木の寺院内で談合しているのを秋山小兵衛が目撃した翌日、式場勘右衛門は、麻布桜田の法雲寺へ出向いた。

法雲寺には、亡妻の墓がある。

その日は、妻の命日であった。

沈んだこころのままに墓参をすませ、桜田の通りへ出て歩みはじめた式場が、編笠の内で目をみはった。

向うからやって来た後藤角之助が、霞山稲荷の門前へ向って行くではないか。

(おのれ、今度は逃さぬ)

ついに、ここで、お金の茶店の裏口へ入って行く角之助を、式場勘右衛門は見とどけたのである。

つぎの日も、式場は、腹心の門人二名をもって猿屋を見張らせ、角之助暗殺に踏み切った。

式場と、この門人二名の経歴を洗ったところ、

「とんでもないことが、わかったらしい」

と、秋山小兵衛が、嶋屋孫助にいった。

「どんなことなのでございます？」

「さ、それが、わしにもわからぬ」

「ははあ……？」

「なんでも、名をいえばびっくりするような……たとえば、将軍家とも関わり合いの深い、何十万石という大名の家来だったそうな」

「三人とも？」

「うむ。これはな、田沼様御用人の生島次郎太夫殿が、ひそかに洩れ聞いたことじゃが、その上のことは御用人も知らぬそうな」

「ふうむ……それでは、飯田平八郎も……？」

「実は、その大名の落胤らしい。事情あって、旗本の室賀大和守があずかったのであろうよ」

「道理で、いくらも金が出るわけで……」

「さようさ……」

小兵衛は、憮然となった。

「それにしても大先生。ようもまあ、その式場勘右衛門が、何も彼も白状いたしましたなあ」

「六本木の寺で、角之助と談合しているところを、わしに見られているもの」

「なるほど……」

「それはさておき、わしが、我善坊谷で式場勘右衛門の前へ名乗って出たとき、一言の弁明もせず、いきなり、門人二名に指図をし、わしへ斬ってかからせた。これを、お上の御用をつとめる弥七が見とどけていたのじゃもの。いかに式場とて、いいぬけはできぬさ。公儀の評定所は、なかなかどうして甘いものではないよ」

「それで、飯田平八郎は、いかが相なりました？」

「これは内証事じゃが……」

「はい、はい」

「腹を切ったそうじゃ」

「へへえ……」

「もしやすると、その大名のところの家老か何かが出て行って、平八郎に詰腹を切らせたのかも知れぬな」

「ふうむ……はあ……」

室賀大和守への処置は、まだ決っていないが、いずれ、何らかのかたちで責任をとらされるにちがいない。

「世の中には、私どもにははかり知れぬ、恐ろしいことがあるものでございますなあ」

「何をいうのじゃ。わたしたちにも、二つや三つは、他人のはかり知れぬ恐ろしいことがあるものじゃ。これ嶋屋。おぬしにだって、ないとはいわせぬぞ」

意外に、小兵衛の声も表情もきびしかった。

嶋屋孫助が、息をのんだ。

春の蠅が、障子の桟にとまったまま凝とうごかぬ。

汗ばむほどの日ざしが、庭先にあふれていた。

おはるが酒の仕度をしてあらわれたので、嶋屋は救われたように、

「それにしても、こうなりまするると、亡くなった笠井駒太郎さんが、お気の毒で……」

小兵衛は、こたえぬ。

何やら、急に、

(取りつく島もない……)

ような深沈とした目の色になって、庭の一点を凝視したままなのだ。

おはるが台所へ去ってのち、嶋屋孫助が、

「大先生。どうなさいました？」

「そのことよ」

「え……？」

「笠井駒太郎はな、いったん、後藤角之助のさそいに乗りかけ、毒薬を受け取りかけたそうな。じゃが、辛うじて、おもいとどまった……」

「えっ……そりゃ、先生。後藤が式場勘右衛門にいったことなので？」

「うむ」

「そ、そんなことは、あてになるものではございませんよ。ええ、もう、こうなると後藤が殺されてしまったのが残念でなりませせぬな」

「うむ……」

「あの、後藤角之助というやつは、いいかげんなやつでございます。口から出まかせを……」

「駒太郎は、な。愛宕下の水茶屋の女に、金をつぎこんでいたそうな」

「ま、まさか……それも、後藤が式場勘右衛門に……」

「うむ」

「そ、そんなことが、あの笠井さんにあってたまるものではございません」

「おぬしは、駒太郎がひいきゆえ……」

「だって、そうではございませんか……」

小兵衛が、だまって盃を出し、嶋屋が酌をした。

いまにして、小兵衛は、

(おもいあたる……)

一事があった。

笠井駒太郎が殺害された半月ほど前に、小兵衛が手文庫へ入れておいた三十両ほどの金が、いつの間にか七両ほど減っていることに気づき、

（はて……？）

不審におもったことがある。

けれども、そのときの小兵衛は、

（わしの、おもいちがい……）

として、あとは忘れてしまっていた。

そのときの不審が、いま、ここによみがえってこようとは……。

あのころ、小兵衛の居間へ自由に入り、身のまわりの世話をしていたのは、笠井駒太郎ひとりだったのである。

（ああ……わしも、いま、この年齢（とし）になって、このようなことをおもい出そうとは……まだ、いかぬな。まだ、わしはだめな男よ）

それが哀（かな）しい。

わが息子ともおもい、念を入れて仕込んだ愛弟子（まなでし）へのうたがいを消すことができぬことが、さびしかった。

すべては、殺された後藤角之助の胸底（きょうてい）にひそんだまま、小兵衛の手がとどかぬ幽界へ消え去ってしまったのだ。

「もし……もし、大先生……」

「む……」

「お酌を……」

「おお……」

おずおずと、小兵衛の盃へ酌をしながら、嶋屋孫助が、

「笠井駒太郎さんの御両親は、いまも、植村駿河守（するがのかみ）様の御屋敷においでなさるので？」

「いや……七年前に母親が亡くなり、父親は、つい先ごろ、この二月に亡くなって、跡をつぐ子なきゆえに、家は絶えた」

今度は、嶋屋孫助が沈黙した。

微風に乗って、桜の花びらがひとつ、居間へながれこんできた。

折しも、酒をもって台所から出て来たおはるが、

「あれまあ……とうに、桜花（はな）が散ってしまったのに、こんな……」

と、花びらをつまみあげるのへ、

「どこかに、遅桜があったのだろうよ」

小兵衛が笑いもせずに、沈んだ声でつぶやいた。

徳どん、逃げろ

一

その夜も……。

傘屋の徳次郎は、千駄ケ谷にある松平肥前守・下屋敷内の中間部屋で、博奕をやっていた。

松平肥前守治茂は、九州の佐賀三十五万七千石の城主で、上屋敷は日比谷御門外にあり、その他に別邸が三つある。

上屋敷は、諸大名の江戸における〔官邸〕だから、屋敷内で博奕がおこなわれるはずもないが、下屋敷には殿様があらわれることなど、めったになく、家来の人数も少ない。

ことに千駄ケ谷のような、当時では江戸の郊外といってもよい場所にある下屋敷では、なおさらのことだ。

そこで、中間どもが夜になると、自分たちが住み暮している大部屋を博奕場にしてしまう。

したがって、種々雑多な、得体も知れぬ人間が出入りをする。

しかし、下屋敷の家来たちは、

「見て見ぬふり……」

をしているのだ。

むろん、中間部屋から、家来たちには相応の〔鼻薬〕をわたしてある。

（今夜は、どうもいけねえ。この辺で、帰るとしようか……）

四ツ半（午後十一時）すぎになって、傘屋の徳次郎は腰をあげた。

松平屋敷の裏塀に沿った大きな長屋一棟が、中間の大部屋で、奥の一郭を仕切り、そこが博奕場になってい、博奕に熱中する男たちの体からふき出る脂汗と酒のにおいがないまざって、なんともいえぬ異臭がたちこめている。

博奕場を出た徳次郎は、出入口に近いところにある、木の柵で囲った六畳敷きの部屋へ入った。

ここは、中間部屋の小頭をつとめている禄五郎の部屋で、酒もあれば菓子も置いてあるのだ。

禄五郎はいなかった。

若い中間にこころづけをやり、徳次郎は酒をたのんだ。

「もし……」

と、そこへ、後から入って来た中年の男が徳次郎に声をかけた。

「今夜は、いけなかったようだなあ」
「まあ、ね……」
このところ、ここの博奕場で、よく見かける男であった。
身なりも小ざっぱりとしているし、博奕の駆引きも程がよい。勝っても負けても、およそ二刻（四時間）もすると、引きあげて行く。
大金をもっているわけではないが、勝ったときは、かならず、小頭の禄五郎へ、
「みんなで、のんで下せえ」
相応の金を置いて帰るし、負けたときも、さっぱりと、微笑をうかべて帰る。
それを見ていて、徳次郎は、この男が気に入っていた。
丸顔の童顔で、小肥りの体に愛嬌があり、奥州（東北地方）訛りがわずかに残っている口調も、この男を、
（どう見ても、憎めねえ男……）
にしていたのである。
（だが、この男、いってえ、何をして食っていやがるのか……？）
そこが、わからなかった。
無頼の者ともおもえぬし、そうかといって、堅気の商売をしているようにも見えぬ。
博奕場での他人の詮索は、いわゆる〔御法度〕なのだ。
いまの傘屋の徳次郎は、博奕がきらいでない。

だから、半分はたのしみに来ている。
あとの半分は、やはり、お上の御用をつとめる四谷の弥七の下っ引としての神経がはたらいている。
博奕場と遊里とは、犯罪と切っても切れぬ。
弥七をたすけてはたらくうち、何度も諸方の博奕場へ出入りして、はじめは、あまり好きでなかった博奕が、
（このごろは、おもしろくなってきた……）
徳次郎なのである。
親分の弥七も、
「すこし、中間部屋を廻って来ねえ」
といい、博奕の金をくれることもある。
それほどに、博奕場で耳に入るうわさは、江戸の暗黒面をのぞかせてくれるのであった。
「わしはね、八郎吾というがね」
と、その男が名乗った。
「へえ……八郎吾ねえ」
「お前さんは？」
「徳次郎」
「御商売は？」

「傘屋」
すると、八郎吾が、
「嘘だあ」
と、いったものだ。
「傘屋だよ。まぎれもねえ……」
「嘘だあ」
にこにこしながら、八郎吾が、かぶりを振って見せた。
「じゃあ、お前さんの商売は？」
「何もしてねえ」
「ふうん……」
こいつ、変っていやがる、と、徳次郎は苦笑をもらし、
「お先へ、ごめんよ」
腰をあげた。
松平屋敷を出た徳次郎は、畑の道を北へ向った。
若葉のにおいが生ぐさいまでに、夜の闇にただよっている。
ふっと、内藤新宿の下町で、小さな傘屋の店を出している女房おせきの顔をおもい出し、
（久しぶりに抱いてやろうかな。そっと帰って、いきなり、寝床へもぐりこんでやったら、おせきのやつ、びっくりするぜ）

徳次郎は、今年で四十になる。
女房は、もと、新宿の宿場女郎だったが、徳次郎と〔いい仲〕になり、親分の弥七が骨を折ってくれ、夫婦にして、傘屋の店まで出してくれたのだ。
（親分のためなら、いつ、死んでもいい）
徳次郎は、心底から、そうおもっている。
「こんな御役目をつとめているのだから、おせき。お前も、いざというときの覚悟をしていてくれ」
かねてから女房にも、そういってある。
「おーい。もし、徳次郎どんよう」
うしろから、声が追いかけて来た。
ぶら提灯をさしつけて見て、
「なんだ、お前さんか……」
追って来たのは、八郎吾であった。
八郎吾は、提灯を持っていなかった。
「どうしなすったえ？」
「いやなに、お前さんと、はなしがしたくてねえ」
「何の、はなしを？」
「盗めのはなしだよう」

「つとめ……」
　とっさに、徳次郎はわけがわからなかったが、盗賊の世界で、盗むことを盗めるといいならわしているのを、わきまえていないではない。
「とぼけるでねえよ、徳次郎どん。わしは、ちゃんと、お前さんの正体を見破ったのだものね」
「ふうん……」
　徳次郎の胸が、さわぎはじめた。
（こいつ、向うから網へかかってきた……）
　そこで、
「その、はなしを聞かせてくれるというのかえ？」
「うん。わし、お前さんを見込んだのだ。お前さん、肚がすわっている。博奕の仕方を見ていれば、はっきりとわかる」
「ふうん……」
「どうだね？」
「何が？」
「わしと二人きりで、やって見ないかね？」
「盗めをかえ？」
「うん」

「そうさな……」
「見込みはつけてあるのだがね」
「ふうん……」
「どうだね。どうだね？」
「どこへ、見込みをつけなすった？」
　すると八郎吾は、いささかもこだわることなく、
「それがね。大川の向うの鐘ケ淵に、爺さまが若え女房と二人きりで暮していて、金を大分に持っているらしい。血をながすこともねえし、爺さまと女房をふん縛って、貯めこんだ金をいただいて帰って来る。わけもねえことだ。お前さんに、このところ、ずっと目をつけていたら、二人でやりたくなってきてねえ」
　徳次郎は、黙って歩み出している。
　こみあげてくる笑いを押えるのに、懸命であった。
　その爺さんと若い女房というのは、秋山小兵衛とおはるにまぎれもない。
（大先生のところへ押し込んで、わけもねえ盗めだと……こいつ、どうかしていやがる）
　八郎吾が、追いすがって来て、
「どうだね。どうだね？」
「ふうむ……」
「五、六十両から、うまくすると百両はあるとおもうがね」

「ほう……」
「どうだね?」
ちょっと考えてから、徳次郎がこたえた。
「よし。いっしょにやってもいいぜ」

二

「ほほう……傘徳(かさとく)先生、ひどく見込まれたものじゃのう」
と、秋山小兵衛が、さも、うれしげな笑いを浮べて、
「どうじゃ、弥七。世の中というものは、さてさて、おもしろいものではないか」
「まったく……」
そういわれて見ると、四谷の弥七も、急に笑いがこみあげてくるのを押えきれなかった。
今朝の……それもまだ、あたりが暗いうちに、傘屋の徳次郎は、四谷伝馬町(てんまちょう)の弥七の家の、裏の戸を叩(たた)いた。
寝惚(ねぼ)け眼(まなこ)で飛び起きて来た弥七が、
「徳。何か、起ったのか?」
血相を変えて尋(き)いた。
徳次郎ほどの老練な下っ引が、この時刻に駆けつけて来るというのは、よほどの異常犯罪

が起ったものと看(み)てよい。
「親分。そ、それが……」
「何だお前、朝っぱらから酔っているのか」
「いえ、酒をのんだだけのことで」
「ま、いいから、ここへ入れ」
「相すみません。ええ、もし、おかみさん。早くからどうも、相すみません」
「なあに、かまやあしない。いま、水をもって来てあげるからね」
「へえ、どうも……」
「いったい、何があったのだ?」
「それが、実は……」
徳次郎が、昨夜から、つい先刻まで一緒だった盗賊の八郎吾のことを語るや、
「なんだ、徳。そいつの人相から体つきまで、お前そっくりじゃあねえか」
「とんでもねえ。似ちゃあいません。いませんが、なんとなく体つきが似ています。八郎吾の死んだ兄貴というのが、私にそっくりだったそうなので……」
「ふうん……」
「ともかくも親分。これからまた、八郎吾のところへ引き返さなくちゃあなりません。いっしょに朝飯を食べて、それからその……鐘ケ淵の、目ざす場所を私に見せておきてえ、と、八郎吾が申しますんでね」

「目ざす場所って、お前……そこが、はっきりしているのか。ええ？」
「だって親分。あのあたりで、若い女房と二人暮しの年寄りといやあ、秋山の大先生よりほかにござんせんよ」
「そりゃ、まあ、な……」
笑いになりきれぬ笑いを浮べた弥七が、煙管へ煙草をつめながら、
「それにしても、徳。ずいぶん間ぬけな盗人じゃあねえか。選りに選って大先生のところへ押し込もうなぞは、愛嬌がありすぎるよ」
「ですが親分。大先生は小金を持っていなさる。そこへ目をつけたのは、ちょいとしたものではござんせんか」
「ふうむ……」
「大先生の正体なぞというものは、よほどのやつだって、見ぬけるものじゃあねえ。ちがいますか？」
「それにしても、どうしてまた、お前を……」
「いえ、それがさ。八郎吾のやつは、この徳次郎をすじの通った盗人だと、決めこんでいやがるので」
「ぷっ……」
「笑っちゃあいけませんよ、親分。博奕をしている私を凝と見ていて、こいつならとあたりをつけ、はなしをもちかけてみると、私もまた、こいつは長年、親分の下ではたらいている

ものですから、あいつらの世界をまんざら知らねえわけじゃあねえ。それに、こいつは獲物が網へ引っかかったとおもうから、こっちも気を入れて相槌を打ったとおもいなせえ。すると、いよいよ……」
「見込まれたというのかえ？」
「そ、そうなので」
「それで徳。お前、そいつをどうするつもりなのだ？」
「冗談じゃあねえ」
と、徳次郎はあわてた。
「それを、いま、親分へ尋きに来たのじゃあござんせんか……」
「そうか……そうだったな」
さすがの弥七も、こんなことに出合ったのは、これがはじめてといってよい。
徳次郎は、はじめ、
（よっぽど、おれ一人で御縄をかけてしまおうか……）
そうおもったが、よくよく看ると、間がぬけているように見えても八郎吾の体のこなしには隙がない。
「たとえ、私ひとりで組みついても、かなわねえとおもいました」
「ふうむ……」
それに、もう一つ。もしも、八郎吾が江戸の何処で暮しているかをつきとめておけば、他

の獲物も引っかかると考えた。
「親分。こいつは、盗賊改メへゆずりましょうかね」
「まあ、待て」
別に、自分の手柄にするつもりはないが、弥七は急に、その八郎吾という盗賊への興味が大きくふくらんでくるのをおぼえた。
（ともかくも、大先生に申しあげてみよう。それから手を打っても遅くはない）
このことであった。
傘屋の徳次郎は、昨夜あれから、青山の六道の辻にある菜飯屋へ連れて行かれ、裏二階で酒をのまされた。
夜が明けかかったので、
「女房へ、ちょいと、ことわって来る」
と、八郎吾へいい、ぬけ出して、弥七の家へ駆けつけたのだ。
「後をつけられなかったろうな?」
「ぬかりはありません」
「で……いつ、大先生のところへ押し込むというのだ?」
「明後日の、夜ふけに……」
「急だな」
「そうなので……」

「よし。八郎吾のところへ引き返せ」
「連絡は、どうします?」
「いらねえ。お前とおれの呼吸は合っているはずだ」
「合点です」
徳次郎は、弥七の女房が運んで来た湯のみ茶碗の冷水を一息にのみほし、外へ飛び出して行った。

「こういうことがあるから、長生きをする甲斐もあるということよ」
と、秋山小兵衛はひざを叩かんばかりに、うれしがっている。
「だが、弥七。八郎吾の目のつけどころは狂っておらぬぞ」
「え……?」
「ほれ、この初春に金貸しの浅野幸右衛門殿が、湯島天神下の家と、遺金千五百両をわしにあずけて自害をした……その千五百両は、いま、わしのところに在るのじゃもの」
「えっ。何でございますって、物騒な。それで、若い御新造さんを、ひとりで留守居させたりなさいましては……」
「なに、だれにも、わからぬところへ隠してあるのさ」
「そ、それにしても……」
「弥七。もう、そろそろ、八郎吾が徳次郎をつれて、この近くへあらわれるのではないかな、

わしの家を見せるために……」
「大先生……」
「何じゃ？」
「いったい、どういたしたら、よろしいので？」
「わしの家へ押し込むのは、明後日とか……」
「さようで」
「さて、と……」
「大先生……」
「叱っ。おはるが井戸端からもどって来たらしい。おはるには内証じゃ。よいな、弥七」

三

青山の六道の辻は、六筋に道が分れている中心地点なので、その名称があるのだろう。
幕府の組屋敷や武家屋敷に囲まれた小さな一郭に町屋があり、盗賊・土崎の八郎吾が、いま、寝泊りをしている菜飯屋も其処にあった。
店の屋号も何もない。軒行燈に〔菜めし〕と書いてあるだけの小さな店だが、
「六道の辻の菜飯屋」
といえば、この店だけなのである。

大根や蕪の葉、小松菜など、青菜をきざみ、炊きまぜた飯はいつでもあるが、そのほかには酒。熱い味噌汁。それだけしか出さぬ。
亭主は、名を権兵衛といい、五十がらみの大男で、同じ年配の女房と二人で店を切りまわしている。
女房の名は、
「おれも知んねえ」
と、権兵衛がいうのだ。
女房は、唖であった。
また、字も書けぬし、読むこともできない。
「おれの女房には、うってつけだよ」
と、権兵衛はいう。
女房も大女で、この夫婦が身ぶり手ぶりで語り合いながら、仲よく気をそろえてはたらく。
店を開けるのは八ツ半（午後三時）ごろからで、そのかわり、夜から翌朝にかけて菜飯を売り、酒を売っている。
それというのも、このあたりの大名や武家の下屋敷の中間たちが、入れかわり立ちかわり、食べたり飲んだりしにあらわれるからで、中間部屋の博奕もさかんにおこなわれている。
「どうかね。うまく行きそうかね？」
朝の光が射しはじめたので、店の戸を下ろし、裏二階へあがって来た権兵衛が、土崎の八

郎吾に尋いた。
「ああ、心配ねえ」
八郎吾は、寝床に横たわり、煙草をふかしている。
「昨日、あの男をつれて、鐘ケ淵へ行ったよ。小さな爺さまが若い女房と二人きりで暮している。ありゃあ、小金持ちの浪人らしい。いつも杖にすがって歩いているよ」
「ふうん……だがね、八郎吾よ。あの男は大丈夫なのかね？」
「徳次郎かね？」
「うむ……」
「大丈夫だ」
「どこで、拾って来たね？」
「ほれ、おれがよく行く千駄ケ谷の、松平さまの中間部屋でね」
「ふうん……」
「何度も、あの男が博奕するのを見ていて、こいつなら大丈夫とおもったよ。おれの死んだ兄さまそっくりの顔かたちで、博奕に勝っても負けても、のぼせあがることがねえ。することなすことが只者ではねえとにらみ、鎌をかけて見たら、やっぱり、盗めの道にくわしい。はなしてみると人懐こい男で、どうもどうも、おれとは気が合ってねえ。それで、今度、いっしょにやってみることにしたのだよ。おれもさ、長え間、二人いっしょに盗めをして来た飯島の亀五郎に死なれたので、気の合った相手がどうしてもほしい。権兵衛どんは、もう盗めをしてくれねえというし……」

「ああ、もう、おらあ嫌だね。面倒くさくてね。それよりも菜飯炊いてるほうが気楽だねー
「権兵衛どんは、女房持ちだからなあ」
「だから、よ……」
と、権兵衛がひざを乗り出し、
「八郎吾も、もう一度、女房持ったらどうだね？」
「いや……もう、たくさんだ」
「八郎吾よ。むかしあったことは、みんな忘れてしまうがいいね。おらだって、むかしを忘れたから、こうして菜飯屋のおやじに生き返ったのだ」
「いや……いや、いや……」
急に、土崎の八郎吾が烈しくかぶりを振った。
いつもは愛嬌をたたえている童顔が、まるで別人のような陰鬱さに変り、ぴたりと口を噤んでしまった。
権兵衛も、その八郎吾を無言で見まもっている。
ややあって、八郎吾が、
「女一匹、背負いこむのは、もう、たくさんだよ」
呻くようにつぶやいた。
権兵衛は立ちあがり、

「いま、酒を持って来てやる。そいつをのんで、もう一寝入りするがいい」
こういって、階下へ去った。
その酒をのみ、
「徳次郎が来たら、起してくれ」
たのんでおいて八郎吾は、蒲団(ふとん)を頭から引きかぶった。
そのころ……。
傘屋(かさや)の徳次郎は、四谷(よつや)の弥七(やしち)の家へあらわれている。
「徳か。出て来てもいいのか?」
「へえ。もう、すっかり、私を信用してくれていましてね」
「いやに、見込まれたものだな」
「まったく、気味がわるいようなもので」
「明日の夜だな、大先生(おおせんせい)のところへ押し込むのは……」
「そうですよ」
「お前と八郎吾と二人きりか。間ちがいはねえな?」
「そういわれても困ります。八郎吾は、くわしいことを何もいいません。ただ、いっしょに来て、おれのいうとおりにしてくれればいいというのでござんすよ」
「昨日、大先生の御宅を見に来たのか?」
「何度も見ている御宅を、はじめて見るふりをしなくてはならなかったので、骨が折れました。親分が大先生とはなしているところを、遠くから見ましたよ」

「八郎吾は、何といっていた?」
「妙な客が来ていやがる……と、ね」
「妙な客か。おれも気をつけて、わざわざ身なりを変えて行ったのだが……怪しまれてはいねえだろうな?」
「ま、大丈夫で」
「お前たちが、のぞき見をしているのを、すこしも気づかなかった。どこから見ていた?」
「土手の下に、大きな松の木がありましょう。あの上へのぼったので……」
「何てえこった」
「あ、そうだ。このことを親分へつたえておこうとおもって……」
「何を?」
「八郎吾は私に、お前、舟が漕(こ)げるか、と、尋(き)きましたよ」
「舟……それじゃあ、大川(おおかわ)から押し込むつもりなのか?」
「さあ、そこまではわかりません」
「で、お前は何とこたえた?」
「漕げる、と、いっておきました」
「ふうむ……こいつ、もしやすると……?」
「ほかにも二人や三人、仲間がいるかも知れませんね、親分」

「ええ、面倒なことだなあ。おれのほうで片づけてしまうのが、いちばん早いのだ。大先生も物好きだよ。年をとりなすったものだから、退屈で仕様がねえらしい。だが徳。八郎吾の勘ばたらきは狂ってはいねえぞ。大先生のところには千五百両もの小判が隠してあるそうだ」

「げえっ……千、五百……」

「ほれ、金貸しの浅野さんが遺して行ったという……」

「へえ、へえ。ああ、あの金が……それで親分。その千五百両は、大先生の御宅の何処に隠してあるので？」

「さて、な……」

にやりと弥七が徳次郎を見やって、

「八郎吾とお前が、一所懸命、探して見ることとさ」

「な、何をいいなさる。親分も人がわるい」

「ともかくも、おれは、いまから鐘ケ淵へ行き、泊り込むつもりだ。お前も、そのつもりでいてくれ」

「それでは、これが最後のつなぎでござんすね？」

「そうとも。大先生とおれとが待ち受けているから、お前たち、どこからでも押し込んで来い」

「じょ、冗談じゃあねえ、親分。お前さんまで、おもしろがっていてはいけませんよ」

傘徳が、這う這うの態で去ったのちに、弥七は身仕度をして我が家を出た。

秋山小兵衛の隠宅へ着いたのは、まだ、昼前であった。

「早いな、弥七」

と、小兵衛。

「どうも、家におりましても、落ちつきませんもので……」

「あは、はは……お前、どうかしているのではないか？」

「ですが大先生。今度ばかりは、私も徳次郎も面喰っておりますので」

「あは、はは……」

「八郎吾は、徳次郎にこういったそうでございます。あの隠居のところには、五十や百の小金がきっとあるにちがいないと……」

いいさした弥七が、たまりかねて笑い出した。

「大先生。五十や百とは、いいじゃあございませんか」

「だがな、浅野幸右衛門からあずかった遺金を別にしたら、百両もないぞ、わしのところには」

「そりゃ、まあ……」

「だから八郎吾の目に狂いはないということじゃ。八郎吾という盗賊は、気心の知れた仲間を一人か二人つれて、小金ばかりをねらうやつなのだろう。いや、腕が利いておれば、そのほうが却って稼ぎになるのだ。多勢の仲間を引きつれての盗みは、大金を得ても、それぞれ

に分配をしなくてはならぬし、一人一人の分け前となると、そりゃ、ずいぶん少なくなってしまう。それに気苦労も多い。仲間のうちの一人の失敗が、一味の者のすべてに振りかかってくる。それよりは二人か三人で、小さな盗みをするほうが気楽でもある。そうした盗賊が、この十五、六年ほどの間に、ずいぶん増えたということじゃ」

「なるほど。大金持ちは、それ相応の要慎をしておりますし……」

「お上の目も、なまくらではないということよ」

「どうも、こいつは、恐れ入りました」

「それにさ、近ごろは、あちらこちらに、小金持ちが増えたということじゃ。大名や武家の金が、みんな商人へ吸い込まれて行くしな。もっとも、お百姓は別のことじゃ。士農工商などと申し、身分は上から二番目ということになっているが、いやはや、一所懸命に米をつくり、野菜をつくり、国中の人びとの口へささげ、そのくせ自分たちのふところは、いつも貧しい。田沼様も、そのことが、いちばん、気にかかっておられるらしいが……というても、御老中の一存にもまいらぬしな。何故というに、日本の諸国は諸大名が治めている。一つの国であって一つの国ではない。そこが、むずかしいということよ」

「ははあ……」

おはるが仕度をした昼餉をすませたとき、四谷の弥七がおもい出したように、

「大先生。昨日は、徳次郎が八郎吾といっしょに、ここを見にまいったそうでございます」

「ああ」

「え……御存知だったので？」

「お前とはなしこんでいたとき、向うの……ほれ、あの松の大木へ、二人して登っていたようじゃ」

事もなげに、小兵衛がいったものである。

四

一夜明けて……。

秋山小兵衛隠宅へ押し込む当日となったとき、傘屋の徳次郎は、妙な気分になっていた。

その気分というものを、

「これこれだ」

と、口にすることはむずかしい。

強いていうならば、

（ふうん……大先生のところには、千五百両がねむっているのか。伝馬町の親分は、そんな大金を大先生が何処に隠してあるのか、教えてはくれなかったが……さて、どこに隠してあるのだろう？）

そんなおもいが、ちらちらと脳裡をかすめ、つぎに、

（もしも……もしもだよ。もしも、おれが盗人だったら、何処へ目をつけるだろうか？）

と、おもう。

そして徳次郎は、われ知らず、見なれた秋山小兵衛隠宅の内部のありさまを、おもい起している自分に気づいて、

(な、何だ、ばかばかしい……)

あわてて、気を取り直すのであった。

さらに、一つ。

今日で足かけ三日をつき合った土崎(つちざき)の八郎吾(はちろうご)へ、押えようとしても押えきれぬ親しみをおぼえてきた徳次郎なのである。

(いいやつだ、八郎吾は……)

そう、おもわざるを得ない。

(こいつは盗人なのだ。悪いやつなのだ……)

という意識はあっても、傘徳の感情は別の方向へうごいて行ってしまうのだ。

松平屋敷の博奕場(ばくちば)で、何度も顔を合わせているうち、たがいに好意を抱いてしまった徳次郎と八郎吾の胸の内は、たがいに通い合ってしまったのだろうか……。

いま、一つ。

徳次郎は、八郎吾への疚(やま)しさを捨て切れない。

(おれは、八郎吾を騙(だま)している……)

からである。

お上の御用をつとめるため、盗人や悪人を騙すことなど、これまでに何度も仕(し)てのけてきた徳次郎なのに、今度ばかりは、どうも割り切れぬおもいがする。

それは、八郎吾が、

「これと見込んだ……」

からには、いささかも徳次郎を警戒することなく、まるで十年も二十年も、共に盗みをはたらいてきたかのような信頼をかけてくれているからでもあろう。

「お前さん。博奕場で顔を合わせていただけのおれを、よくまあ、信用ができたものだね?」

と、昨夜も徳次郎は、菜飯屋(なめしや)の二階で枕(まくら)をならべながら、八郎吾へ尋いてみた。

「なあに……」

八郎吾は事もなげに、こういった。

「人のことを、うたぐってみたら切りがねえよ、徳次郎どん。わし、今日まで、それで通って来たのだものね」

盗人の声ともおもえないではないか。

「一度も、御縄(おなわ)にかかったことがねえのかい?」

「ねえよ。もっとも、若(わけ)えうちはね、死んだ兄貴が盗(つと)めの手引きをしてくれたから、大安心だったし……つい、三年前までは、兄貴の友だちの亀五郎(かめごろう)どんと二人で盗めをしてきた。二人とも、いい人間だったが病(やまい)には勝てねえ」

さびしげに曇った八郎吾の声が、また張りを見せてきて、

「だが、徳次郎どん。お前さんに会えてよかったよ。わし、一目で、お前さんが、しっかりした盗人だと見きわめがついたのだ。その目に狂いはなかった。それがうれしくてねえ」

いよいよ、いけない。

盗賊というよりは、盗人の呼名がふさわしい八郎吾の盗めは、いずれにせよ小振りなもので、むしろ、博奕の才のほうが上まわっているのではないか……。

それにしても、

(こんな人のいい盗人が、よくまあ、捕まらなかったものだ)

徳次郎はあきれもしたし、八郎吾と語り合っていると、どうしても、これが盗みをはたらくような男に見えなくなってくる。

しかし、

「外から見ただけで、しかとはわからねえが……」

と、見せてくれた秋山隠宅の図面には、徳次郎もおどろいた。

間取りから坪数まで、ほとんど誤っていないのである。

「いいかね。わしの盗めは、決して血を見ねえことだ。それに女や子供へ乱暴をしてはいけねえ。いいかね。いいかね?」

「わかっているとも。だが、手筈はどうするつもりなのだえ?」

「なに、わけもねえ。隠居と女房を、ちょいとねむらせておけばいいのだよ」

「ねむらせる……?」

「これさ」

と、八郎吾が妙な物を取り出してきて見せた。

長さ二尺ほどの、まるい棒であった。太さは擂粉木の柄ほどのもので、これに鞣革を巻きつけてある。

「それで、どうする?」

「二人の急所を打てば、すぐ、気絶してしまうよ」

八郎吾が、そういったとき、おもわず徳次郎は顔を伏せた。

(冗談じゃあねえ。こんな物で、大先生の急所を打とうなんて……)

こみあげてくる笑いを、徳次郎は必死に堪えた。

その徳次郎の様子さえも、八郎吾の目には、

「大丈夫だよ、徳次郎どん。わしがやるのを怖がらずに、落ちついて見ていればいいのだ」

としか映らぬ。

「盗めするときは気を楽にしなくてはいけねえ。そこらの店へ入って、蕎麦の一つも手繰るような気持で押し込むがいいのだよ。ね、そうではないかね?」

「まあ、そんなところだ」

「さすがは、徳次郎どんだ」

「なあに……」

傘徳、尻が痒い。

すると八郎吾が、すさまじいことをいい出した。

「明日、この盗めを終えたら、その足で、上州の高崎へ突っ走り、また一仕事をして、中仙道を美濃の太田へ出る。そこでまた、一つ、盗めをしてから尾張の名古屋へ行き、盗めをしてから、江戸へ帰って来るのが、来年の春ごろになるかねえ。どうだね、徳次郎どん。いっしょに来ないか。一年の辛抱で、これからあと三年は遊んで暮せる。お前さんのおかみさんだって、きっと、よろこぶよ」

徳次郎は呆気にとられて、

「そんなに、お前さん。みんな、探りをつけてあるのかね?」

「そうだとも。それでなくては、この道は歩けねえものね」

「む……まあ、そのとおりだが……」

「わしはね。気分が乗ったところで、目をつけておいた盗め先へ、立てつづけに押し込むのだよ。これは死んだ兄貴仕込みでねえ」

そして昨夜のことだが、八郎吾が金五両を紙に包み、徳次郎の前へ置いて、

「お前さんのおかみさんには、まだ、お目にかかっていねえが、どうかひとつ、よろしくつたえておいて下せえよ。これはね、徳どん。まことに、すこしばかりで申しわけねえが、八郎吾の手みやげ代りに、おかみさんへさしあげて下せえよう」

ここに至って、傘屋の徳次郎の八郎吾へ対する好感は層倍のものとなったのである。

(なんという、行きとどいた男なのだ、この男は……)

であった。

徳次郎は、もう、何が何だかわからなくなってきた。

五

その当日。

土崎の八郎吾は徳次郎を連れて、八ツ半ごろに六道の辻の菜飯屋を出た。

二人とも、きっちりとした物堅い風体で、髪もきれいにととのえている。器用に二人の髷を結いあげてくれたのは、権兵衛の女房なのであった。

徳次郎が身につけるものいっさいは、八郎吾がととのえてきてくれたのだ。

八郎吾は、風呂敷包みを一つ抱えていた。おそらく、その中に例の棍棒が入っているのであろう。

「おれが持とうよ」

徳次郎が風呂敷包みへ手を出すと、

「なあに。こいつは、わしが持っている」

と、八郎吾がこたえた。

菜飯屋の権兵衛は、すこしも不安そうな顔を見せず、八郎吾を送り出した。

八郎吾のすることなら、
（安心だ……）
と、看ているにちがいない。
「仕度は、これだけでいいのかね？」
青山の通りへ出たとき、徳次郎が尋いた。
「うむ。いいのだよ」
「夜ふけには、大分、間があるが……」
「まあ、いいではねえかよ、徳どん。どこかで、ゆっくりと酒をのみ、腹をこしらえようではねえか」
と、八郎吾は悠々たるものであった。
そうした土崎の八郎吾の風格に、徳次郎は魅了された。
徳次郎の前で、見栄を張っているのでもなければ、強いて体裁をつくっているのでもないのだ。
八郎吾は八郎吾なりに、なっとくの行くまで準備をととのえ、自信にみちみちているにちがいない。
そこは傘屋の徳次郎の目に狂いはない。
われにもなく、徳次郎は胸がときめいてきている。
（もしも……もしもだ……）

であった。
（おれと八郎吾が、待ちかまえている大先生と、うちの親分の鼻を明かせて、まんまと、千五百両をこっちのものにしたら……きっと、うちの親分はびっくりしなさるだろうなあ）
おもうそばから、そのようなことが絶対にあり得ぬことだと知る。
知りながら、八郎吾の盗めが、
（もしも、うまくいったら……）
と、おもう。
八郎吾のうしろについて歩みながら、徳次郎は、やりきれない気持になってきている。
（いっそ……みんな、打ちあけてしまって、八郎吾を逃してしまおうか……）
とさえ、おもうのだ。
「徳どん」
と、親しげに呼びかけて、八郎吾が振りむき、
「ならんで、はなしながら行こうよ」
うなずいて近寄って行きながら、徳次郎は何か、なさけなくなってきている。
二人は、飯倉の通りへ出てから、右へ折れた。
八郎吾は、麻布の市兵衛町から赤坂の溜池へぬけるつもりらしい。
どんよりと曇った空に鳶が一羽、ゆっくりと輪を描いている。
「徳どん。もうすぐに、夏だねえ」

「そうだな」
「夏のころには、二人で、美濃に出ているだろうね」
八郎吾は、これからも徳次郎が同行することに決めこんでいるようであった。
道が、南部遠江守屋敷の塀へ突き当り、二人は左へ曲った。
と、そのとき……。
我善坊谷の方からあらわれた四人づれの、いずれも編笠をかぶった侍のうちの一人が、
「あ……」
低く叫び、同行の三人を制して立ちどまった。
その侍は、坂道を北へ下って行く八郎吾と徳次郎の後姿を凝視している。
八郎吾も徳次郎も、このことに、まったく気づいていなかった。
侍といっても……身なりは小ぎれいにしているが、四人とも浪人である。
「田島。どうした？」
と、一人が、声をかけた。
八郎吾と徳次郎を見送っている浪人へである。
「うむ……」
振り向いた田島浪人が、
「たしかに、そうだ」
「そうだ、とは？」

「去年の二月に、下目黒で、大久保さんを捕えた奴らの中のひとりにちがいない」
「な、何だと」
「本当か？」
三人が、田島浪人を囲むようにして、
「二人ともか？」
「いや、すこし背の低い、こちら側を歩いているやつだ」
とすれば……。
それは傘屋の徳次郎に、ほかならぬ。
「いま一人のやつは？」
「さて、わからぬが……しかし、いずれにしろ、同類と看ていいだろう。二人とも町奉行所の密偵だ」
「ふうむ……」
「このまま、見逃すわけにはまいらんぞ」
「むろんだ!!」
「どうする？」
「後をつけよう」
「いま、叩っ斬ってはいかんのか？」
「まだ日中だ。見ろ、人も歩いている」

「それもそうだ」
「あいつらのために、大久保さんは、市中引きまわしの上、磔になったのだぞ」
「よし!!」
田島浪人の左手が、そろりと人刀の鐔ぎわへかかって、
「ともかくも、斬って捨てよう」
と、いいはなった。
「二人ともか?」
「いや……先ず、目ざす一人をだ」
夕闇が淡くただようころになって、土崎の八郎吾は徳次郎を浅草・山谷堀へかかる今戸橋に近い〔二文字屋〕という料亭へ案内した。
店構えは小さいが、山谷堀に面して船着場もある瀟洒な料亭である。
山谷堀は、石神井用水、根岸川の末流であって、今戸橋からすぐに大川（隅田川）へながれこんでいるのだ。
「徳どん。この店で出すものが、わし、好きでね」
「そうかね」
「まあ、ゆっくりとやろうではねえかね」
「お前さん。舟を使うのではなかったのかえ?」

「使う」
「その舟は?」
「ちゃんと、仕度をしてあるよ。ここを出てから、舟がある場所へ行けばよいのだよ」
「そりゃ、どこだ?」
「この近くだがね」
「なるほど……」
場所柄、このあたりには船宿が多い。
その中の一軒へ、八郎吾は小舟をたのんであるのだろうか。
「徳次郎どん」
「え……?」
「今夜の押し込みも、きっと、うまく運ぶにちげえねえよ」
「うむ……」
「どうした?……怖いのかね?」
「なあに……」
「心配はいらねえよ。わしがついている。わしがついている」
こういって土崎の八郎吾は、酒をもってあらわれた年増の座敷女中へこころづけをはずみ、
「うまいものを、たのみますよ」
和やかな口調でいった。

六

二人が二文字屋を出たのは、五ツ（午後八時）をまわっていたろう。
八郎吾は、用意してきたぶら提灯へあかりを入れ、徳次郎に持たせた。
「さて、そろそろ舟に乗ろうかね、徳どんよ」
「舟は、どこに？」
「正法寺橋の向うに、ちゃんと舫ってあるよ」
いまにも降り出しそうな暗夜であった。
それでも、このあたりは、まだ宵の口といってよい。
山谷堀をはさむ両岸には、料亭や船宿が軒をつらねているし、堀川をさかのぼって日本堤から新吉原の遊里へくりこむ客も多く、夜通し灯をつけている店も少なくないのだ。
二人は、山谷堀の中河岸を新鳥越橋の北詰へ出た。
道は、目の前の正法寺の北側をまわって、そこから正法寺橋へかかる。
だが、河岸の草地をぬけて行けば、まわり道をせずにすむ。
「こっちが早いよ」
と、八郎吾がいい、先に草地へ踏み込んで行った。
「うむ……」

うなずいて、その後へつづきながら、傘屋の徳次郎は、
（おや……？）
急に、胸さわぎをおぼえた。
新鳥越橋の上に佇んでいた三つの黒い影が、突然、橋を駆けわたり、うしろから追いすがって来たからである。
「待て」
そのうちの一人が、振り向いた徳次郎へ、
「おのれ。この顔を見忘れていまいな」
と、いった。
こやつは、麻布から此処まで、徳次郎と八郎吾を尾行して来た四人の浪人のうちの「田島」とよばれた男であった。
「その提灯で、この、おれの顔を、よく見ろ」
いわれるままに、提灯をさしのべて見て、徳次郎は愕然となった。
その顔に、見おぼえがあった。
去年の二月の中旬に、下目黒の荒れ寺に隠れていた無頼の浪人剣客・大久保伝七郎を捕えたとき、大久保と共に潜んでいた浪人なのである。
大久保伝七郎は、一昨年の夏も終ろうとするころに、千駄ケ谷の名主屋敷へ押し入り、主人夫婦から奉公人、五歳の子供をふくめて八人を殺害し、百二十余両を強奪し、四人の仲間

と共に逃走した。

四谷の弥七は、自分の縄張り内といってもよい場所の犯行だけに、彼らの行方を懸命に探索し、ついに、大久保と田島の二浪人が、下目黒の荒れ寺に潜伏していることをつきとめた。

数日の間、これを見張ったが、あとの三人の浪人は寄りつかぬ。

南町奉行所の同心・岡島八十五郎ほか数名が出張って来て、尚も見張りをつづけていると、或る朝になり、大久保と田島が突然、旅姿で荒れ寺の中から出て来たではないか……。

こうなっては、

(ここで、二人を召し捕ってしまうが、もっともよい)

と、判断をした岡島同心が、

「それっ!!」

弥七、徳次郎ほか二名と共に物蔭から飛び出し、二人へ、

「神妙にしろ!!」

と、せまった。

たちまちに、乱闘となる。

二人とも、相当に暴れたが、岡島八十五郎は八丁堀の同心の中でも、捕物の名人などといわれた男だ。

ついに、岡島が大久保の大刀を十手で叩き落し、弥七が縄を打つ間に、田島浪人は、追いすがる傘徳ほか二名の捕手を振り切って暁闇にまぎれ、逃走してしまったのである。

その田島浪人が、仲間たちと共に、いま、忽然として目の前にあらわれたことについて、傘屋の徳次郎が、おもいをめぐらす間とてなかった。

「覚悟しろ!!」

腰を沈めた田島浪人が、いきなり、抜き打ったものだ。

ばさっと、徳次郎の手をはなれた提灯を切り割った田島の一刀の切先は、飛び退った徳次郎の頬から顎へかけて浅く切り裂いた。

「徳どん……」

叫んだ八郎吾が、自分へ打ち当るように逃げて来た徳次郎と入れかわり、

「何をしやがる!!」

これまでに見たこともない素早さで、体をまるめ、追いせまる田島浪人へ体当りをくわせた。

「こいつめが……」

「かまわん。叩っ斬れ!!」

「応!!」

三人が、八郎吾と徳次郎を押し包むようにして斬りかかって来た。

転瞬、八郎吾が徳次郎をうしろへ突きはなし、

「徳どん、逃げろ。早く逃げろ!!」

と叫んだ。その大声を、徳次郎はたしかに聞いた。

そのあとは、もう、無我夢中であった。
逃げるという意識もなかった。
自分へ斬りつけてくる浪人の刃風を、夜の闇の中でかわすのが精一杯のところで、
「あっ……あっ……」
山谷堀へ飛び込む隙（すき）さえなく、いつの間にか、正法寺橋のたもとへ逃げ出て来た徳次郎の正面から、別の敵が襲いかかった。
こやつは一人だけ、先へまわり、八郎吾と徳次郎の退路を絶っていたものだ。
（あ……もう、いけねえ……）
徳次郎は、半ば気をうしないかけていた。
目の中が真暗になり、体が地の底へ引き込まれて行くようなおもいがした。
「徳さん……徳さん。しっかりしろ。私だ。私だ」
すばらしい大声でよびかけられて、徳次郎の意識がもどった。
「あっ……」
徳次郎が、何ともいえぬ叫び声を発して、
「わ、わ、若先生……」
まさに、秋山大治郎（だいじろう）ではないか。
徳次郎をうしろに庇（かば）った大治郎の足もとに、浪人がひとり、倒れ伏していた。
大治郎の峰打ちをくらったのだ。

その向うにひとり、これは大刀を構えて大治郎とにらみ合っている。
大刀をひっさげたままで、大治郎が、
「徳さん。これは、どうしたことなのだ？」
「あ……う、う……」
声が、言葉にならぬ。喉（のど）が痛み、目がくらんで、徳次郎は正法寺橋の上へへたばっていた。
「たあっ!!」
切り込んで来た浪人の大刀が宙にはね飛ばされた。
大治郎の峰打ちが、強烈に浪人の胴へ決った。
「う……」
のめり倒れたそやつを見向きもせず、大治郎が左腕で徳次郎を引き起した。
「徳さん。しっかりせぬか!!」
「あっ……」
このとき徳次郎が、大治郎へすがりついて、
「と、と、友だちが……」
「何？」
「向うで、こいつらの仲間に囲まれているんでござ……」
「よし」
大治郎は、河岸の草地へ駆け込んで行った。

新鳥越橋に近いところで、二つの影がもつれ合っていた。
そして、その手前の草地に浪人が一人、倒れ伏している。
大治郎は、闘っている二人のうち、浪人のほうを、
（こやつだな……）
と看て、走り寄りざま、田島浪人のくびすじを峰打ちに叩きつけた。
「むうん……」
横ざまに、田島は転倒した。
田島と闘っていた町人ふうの男が、よろよろとして、尻餅をついた。土崎の八郎吾である。
八郎吾は浪人の脇差を奪い、一人を突き殺していたのである。
駆けつけて来た傘屋の徳次郎が、八郎吾へ抱きついた。
「し、しっかりしてくれ。しっかりしてくれ」
泣きわめくような、徳次郎の声であった。
八郎吾は、顔も体も血まみれになっていた。
「徳次郎どん。無事だったかね……」
「うむ、うむ……」
「よかった、なあ……」
「おい……おい。しっかりしろってえのに……」
「いいのだよ、もう……いつかは、こうなるのだよ、人というものはね……」

「おい、おい……」
「いいのだよ。おれが、むかし、この手で殺した女房が、いま、おれを、手招きしているものね」
徳次郎は、凝然と声をのんだ。
「女房は、むかし、ほかに男を、こしらえやがってね……」
それが、土崎の八郎吾の最後の声であった。
草地の両側に、人だかりがしている。
徳次郎が、わっと泣き出した。

○

その日。
秋山大治郎が、田沼屋敷内の道場での稽古を終えて、浅草・橋場外れの我が家へ帰ろうとすると、めずらしく暇ができた田沼主殿頭意次から、
「夕餉を共にしたい」
との言葉があったので、御殿へおもむき、いまを時めく幕府の老中であり、わが妻・三冬の父でもある田沼意次の酒の相手をし、語り合ったのちに辞去した。
もしも、この日。田沼意次に寸暇が生じなかったら、大治郎は夕暮れまでに帰宅していた

わけだし、したがって、傘屋の徳次郎の危急を救うことができなかったろう。
とすれば、徳次郎は無頼浪人の刃にかかって、殺害されたにちがいない。
田島浪人以下四人は、いま、町奉行所のきびしい取り調べをうけている。
おそらく、死罪はまぬがれまい。
「それにしても傘徳は、とんだ手柄をたてたものだのう、弥七」
と、秋山小兵衛が、雨の中を訪ねて来た四谷の弥七にいった。
「とんでもないことでございます。みんな、若先生のおかげでございました」
「徳次郎は、どうしている?」
「あいつも、浅手ではございますが、五つ六つの手傷を負っておりまして……」
「ふむ。そうだろう、そうだろう」
「土崎の八郎吾の死骸を、徳次郎が引き取りまして……それを大先生。てめえのところの墓へ葬ったのでございますよ」
「ほほう……」
「あいつも、おかしなやつで……」
いいさした弥七の声には、何か、しみじみとしたものがただよっていた。
「弥七……」
「はい?」
「お前は、いい子分を持ったものよ」

「はい……」
「で……その、青山の六道の辻にあるという菜飯屋の手入れをしたのかえ?」
弥七は、かぶりを振って見せた。
「そうかえ」
「それで、よろしゅうございましょうか?」
「わしは、いいとおもう。見逃してやれ。その菜飯屋の亭主夫婦を御縄にかけたところで、どうということもないわえ」
「はい。それをうかがって、安心をいたしました」
「もう、春も終りじゃな」
「さようで」
「いまごろの雨の日は、妙に、冷え込むものよ。おい、これ、おはる。障子を閉めておくれ」
「あい、あい」
「お前、台所で何をしているのじゃ?」
「竹の子を煮ているんですよう」
弥七が、ひざをすすめてきて、
「大先生……」
「うむ?」

「それにしても、土崎の八郎吾は、徳次郎をなんとおもったのでございましょうかね。あれほどの男が、よくもまあ、徳次郎を、あれだけに信用をしたものだと……いまさらに私は、腑に落ちないのでございますよ」

「なあに……」

微笑を浮べた秋山小兵衛が、煙草のけむりを吐き出して、

「勘ちがいというものさ」

「それにしても……」

「人間という生きものは、だれでも、勘ちがいをするのだよ」

「……………?」

「ごらんな。太閤・豊臣秀吉や、織田信長ほどの英雄でさえ、勘ちがいをしているではないか。なればこそ、あんな死にざまをすることになった。わしだってお前、若い女房なぞをこしらえたのはよいが、それも勘ちがいかも知れぬよ」

障子を閉めて台所へもどりかけていたおはるが、これを耳にはさみ、

「若い女房が、どうしたんですって?」

「いや、何でもない。何でもない」

ぽんと灰吹きへ煙管を落した小兵衛が、

「弥七。人の世の中は、みんな、勘ちがいで成り立っているものなのじゃよ」

と、いった。

「大先生。まさか……?」

「お前ほどの御用聞きが、そのことに気づかぬのはいけないよ。いいかえ弥七。それほどに、人が人のこころを読むことはむずかしいのじゃ。ましてや、この天地の摂理を見きわめることなぞ、なまなかの人間にはできぬことよ。なれど、できぬながらも、人とはそうしたものじゃと、いつも、わがこころをつつしんでいるだけでも、世の中はましになるものさ」

隠れ蓑

一

物憂げな初夏の夕暮れであった。
そのとき秋山大治郎は、入谷田圃の道を歩んでいた。
妻の三冬が、
「そろそろ、爺やがさびしがっているころでしょう。根岸の寮へ三日ほど泊りに行ってよろしいかしら？」
遠慮がちにいい出たのへ、
「よいとも、よいとも」
今日は大治郎が三冬を、根岸の和泉屋の寮（別荘）へ送りとどけ、ゆっくりと時間をすごしてから、帰途についたのである。
「よう、おいで下されました」

と、寮の留守居をしている三冬の老僕・嘉助は大よろこびで、大治郎も共に泊ってくれるものとばかりおもっていたが、実は、十日ほど前から秋山道場へ入門をした若者が一人いる。
自分の道場で稽古をつけることになった門人は、これで、ようやく二人目というわけだが、
（今度のは、はじめの高尾勇次郎よりは、いくらかましかな……）
と、おもっている。
高尾は、重い振棒ばかり振らされて、すっかり腐ってしまい、
「私、やめさせていただく」
師匠の大治郎を見かぎり、三日来ただけで道場へはあらわれなくなったものだ。
毎朝やって来る門人が一人でもいるかぎり、道場を留守にすることはできない。それで大治郎は三冬を根岸の寮へ残し、帰途についたのであった。
もし妻の三冬が、この日に根岸へ行くことをおもい立たなかったら……いや、大治郎が、この時刻に入谷田圃のこの道を通らなかったら、一昨年の春、駿河の薩埵峠で見かけた旅の老僧に再会することもなかったろう。
それにしても、この再会は尋常のものではなかった。
暮れつ方の田の面がくろぐろとひろがる中を歩む大治郎の右手の木立から、数人の男の高笑いがしたかとおもうと、
「むうん……」
異様な唸り声が聞えた。

「…………?」

大治郎の足がとまった。

こうなると、行きすぎてしまえなくなった。

さらに、何かが殴打される音がつづけざまに聞え、堪えかねたかのような男の……それも老人らしい呻き声がした。

しずかに、大治郎は木立の中へ踏み入った。

三人の、立派な服装をした侍たちが、倒れ伏している老人を取り囲んでいる。

老人は僧であった。

たちこめている夕闇の中にも、身にまとっている窶れた僧衣や、引きむしられて投げ捨てられた網代笠などが大治郎の目にとらえられた。

旅の僧でなければ、托鉢僧ででもあろうか……。

「ちょうどよい。な、そうではないか……」

と、侍のひとりがいった。

彼らは、ひそひそとささやきかわしつつ、あたりの気配をうかがったが、木蔭に佇む大治郎には、まったく気がつかぬ。

酒気が、ただよっている。三人とも、したたかにのみ、酔って、何やら昂奮しているらしい。

老僧は半ば気を失っているようで、逃げる気力も体力も残されていないらしい。ぐったり

と倒れたままだ。

「よし」

大きくうなずいた一人が、大形に腰をひねり、ぎらりと大刀を引きぬいた。

「おれも、試してみよう」

こういったのは、三人のうちで、もっとも年嵩に見える大兵の侍だ。これも抜刀した。

残る一人は刀に手をかけず、ふくみ笑いを洩らしつつ、老僧の襟髪をつかみ、

「これ、立たぬか。立て!!」

ぐいと引き起したのへ、大兵の侍が、

「それでよし。おぬし、退いていてくれ」

いいざま、刀を構えて老僧にせまった。

老僧の口から、何ともいえぬ声が洩れた。

秋山大治郎が木蔭から飛び出したのは、このときである。

物もいわずに大治郎は、一人を突き飛ばし、一人をはね退け、老僧を後手に庇った。

突き飛ばされた侍は木の幹へ強く頭を打ちつけたらしく、のめり込んだ姿勢のまま、うごかなかった。

「おのれ……」

「な、何者だ?」

抜刀した二人が喚いた。

「お手前方こそ、何者です?」
「な、何を……」
「罪咎もない通行の老人を此処へ連れ込み、試し斬りになさるおつもりか!!」
物凄い一喝である。
大刀を振りかぶって敵を斬らんとするときの気合がこもった大音声である。
「う……」
二人の侍の顔から、さっと血が引いた。
「名乗られい。いずれ、名のある家の方がたと見うけた」
一歩、足を踏み出した大治郎の気魄に、彼らは到底、抗しきれなかった。
倒れている仲間を引き起し、大治郎の目の前から逃げ去ることだけで、精一杯であったろう。
振り向いた秋山大治郎は、そこに坐りこみ、瞑目し、合掌している老僧を見た。
夕闇は、かなり濃くなっていたけれども、きびしい鍛練を経た大治郎の眼力が老僧の顔を見誤ることはなかった。
（おお……あのときの、旅の托鉢僧ではないか……）
であった。
それは、一昨年の春のことで、大治郎は年長の剣友・浅田忠蔵に関わる事件に捲き込まれ、

江戸から遠州・見付の町まで出向いて行ったことがある。
この事件は〔東海道・見付宿〕の一篇にのべておいたが、事件が解決してのち、江戸へ帰る大治郎は先ず薩埵峠の山道で、この托鉢僧を見かけた。
托鉢僧は、同年配の旅の侍と連れ立っていた。
二人とも、六十に近い年配で、貧しく苦しい旅をつづけていることが一目で看てとれた。
二人とも痩せおとろえていた。
まだしも托鉢僧のほうは、旅なれた足許もしっかりしており、日に灼けつくした顔貌にも一種の張りのようなものがみなぎっていた。
それにくらべると、旅の老武士は一口にいって、
「半病人……」
にさえ見えた。
しかも、老武士の両眼は失明しているらしく、みはった目は虚しく空間をさまよい、杖をつかみしめていた。
その老武士を、托鉢僧がまめまめしく介抱しながら、山道を辿っていたのである。
（旅の道連れか……?）
と、はじめはおもった大治郎だが、その、いかにも真情にあふれた僧の介抱ぶりや、血の気の失せた老顔に感謝の色を浮べつつ、僧に左手を把られ、
「ゆるりとな……ゆるりと足を運ぶがようござる。山道ゆえ、いささかも急いてはなりませ

ぬぞ。日が落ちるまでに、この峠を下ればよいのでござる」

やさしくいいかける僧に、老武士が頼りきった様子で、何度もうなずくのを大治郎は見た。

(この二人は、かなり長い間、共に旅をつづけているらしい)

のである。

(兄弟でも、親族でもない……)

ことも、大治郎にはわかった。

ともかくも、いたわりいたわられつつ峠路を辿る、この二人の老人が僧と武士だけに、大治郎の印象は深かったのだが、さりとて、いつまでも二人の後についているわけにもまいらぬ。途中で大治郎は二人に一礼して先へ出た。そのとき、礼を返してよこした托鉢僧の慇懃な態度も忘れがたかった。

その所為だろうか……峠を下った秋山大治郎は、峠ふもとの茶店へ入り、昼餉をしたためたのちも、街道に面した腰かけからうごかず、一本の酒をゆっくりとのみながら、時をすごした。

そのときの大治郎の胸の内には、無事に峠を下って来る二人を、いま一度、見とどけたい心持があったからだ。

やがて……。

二人の姿が、街道へあらわれた。

道のりは短いが、難所の峠を越えて来て、疲れ切った二人の老人なのに、茶店へ入って一杯の茶に疲れをいやすこともせず、身を寄せ合うように茶店の前を行きすぎたのは、茶代を置く余裕が懐中にないからにちがいない。

たまりかねて、大治郎は立ちあがった。

茶店を出て、すぐに追いつき、托鉢僧の前へまわり、

「御報謝」

と、一言。

紙に包んだ一分金を、呆然と見あげた托鉢僧の手へわたし、大治郎は走るように二人から遠去かったものである。

「ふむ、ふむ……」

江戸へ帰ってから大治郎が、この二人の姿を父・秋山小兵衛に語ったところ、相槌を打ちつつ、何度もうなずいていた小兵衛の両眼が、めずらしく熱いものをたたえているのを大治郎は見た。

「あの二人、どのような境遇にあるのでしょうか……?」

大治郎が、そういうと、小兵衛は、

「わからぬ……なれど、おぼろげながら、わかるような気もする」

「それは、どのような……?」

「といわれても、口や筆に出してあらわすことはむずかしい。わしもお前同様、その二人の身性については何も知らぬことよ」

「はあ……」
「なれど、胸の内に、言葉にはならぬものがあって、わしのような老いぼれになると、何やらわかったような気もちになるのさ」

二

そして二年後の今日……。
はからずも、件の托鉢僧の危急を救った秋山大治郎は、老僧を本所まで送って行った。
老僧は、いま、江戸に住みついているらしい。
二年前の大治郎のことを、老僧はおぼえていないようであった。
むりもないといえよう。
あのときの大治郎は峠路でも街道でも、塗笠をかぶったままでいたからである。
「かたじけのうございます。おかげさまにて生きのびることができました。ありがとうござりました。ありがとうござりました」
老僧は大治郎に向って両手を合わせた。
こうなると、なおさらに、二年前のことをいい出しかねた。
そのことを口にすれば、必然、金一分を報謝したことにふれねばならない。
ふれることが大治郎には、何やら、はずかしかった。

よろめき　ふらつく足を懸命に踏みしめながら、
「大丈夫でござります。ひとりで、もどれまする」
というのを、これだけは強って、老僧の栖まで送りとどけることを承知させた。
たしかに、そこまで注意をせぬと危ない。先刻の侍たちが、どこぞで見張っているやも知れぬからだ。
入谷田圃から浅草へ出るまでに、老僧は何度かのめりそうになった。そのたびに大治郎が差し出す手を「いえ、大丈夫でござります」と、辞退しつづけたが、ついにたまりかねて、
「では……おことばに甘えまして……」
大治郎の、たくましい腕に老体をゆだねたのである。
それこそ、
「骨と皮ばかり……」
の、老体であった。
この体を殴打されたり蹴られたりしたら、たまったものではない。三人の侍への怒りが大治郎の胸へ衝きあがってきた。
途みち、大治郎の問いかけに老僧は、ぽつんぽつんとこたえた。
老僧は今日、坂本から三ノ輪を経て、千住のあたりまで托鉢に行き、帰途を急いだので、三ノ輪から斜めに畑道や田の道をぬけようとした。
そして、人気もない入谷田圃まで来たとき、酔った三人の侍に囲まれたのだ。

三人は、とぼとぼと歩む老僧をからかい、反応を見せずに行きすぎようとする老僧に却って嬲心をそそられたらしく、しだいに執拗となり、ついに、木立の中へ連れ込み、乱暴をはたらくうち、腰にした刀の切れ味を試すことにしたらしい。

「とんだ災難でしたな」

「はい。はい。なれど、あなたさまのおかげにて、こうして無事にもどれまする」

「いや、なに……」

「私など、いつ、どこで朽ち果てようとも悔いはござりませぬが……なれど、いまのところは、もう少し、生きておらねばならぬこともござりまして……」

生きていなくてはならぬ事とは、何であろう。

大治郎は、そのとき、

（この老僧は、まだ、あのときの老武士を介抱しながら暮しているのだな……）

と、直感した。

大川橋（吾妻橋）を東へわたり、大川沿いの道を多田薬師の門前まで来たとき、老僧が、

「かたじけのうござりました。御礼は言葉につくせませぬが……事情あって、これよりは一人でまいりとうござります」

と、いい出た。

申しわけなさそうな口ぶりではあるが、その中に、これ以上は他人に介入されたくないという意志が侵しがたく秘められているのを、大治郎は知った。

「さようか……灯りもなしに大丈夫ですかな?」

すでに、夜の闇であった。

「通いなれた道で、ござりますゆえ……」

こういわれては、どうしようもない。

「では、お別れいたす」

「御恩は……」

いいさして老僧が、また大治郎を拝むかたちになった。

（これは、たまらぬ）

身を返して、大治郎は去った。

その後姿が闇に消えるまで見送ったのち、老僧は多田薬師と武家屋敷にはさまれた細い道を東へ入って行く。

これを、秋山大治郎は見ていた。

酒井下野守・下屋敷の塀に、ぴたりと身を寄せていたのだ。

すぐに、大治郎は老僧を追った。

どうして、そうなったか、自分でもわからぬ。

ただ、二年前のときのままの、老僧と老武士が落魄の身を寄せ合い、どのような場所に、どのようなかたちで暮しているのか、と、それが気にかかったのであろうか……。

老僧は、曲りくねった道を東へ、東へとすすむ。

このあたりは本所のうちでも、開けるのが遅かったところで、むかしは下総の国から武蔵の国に属していたころのおもかげが、まだ色濃く残されてい、古くは沼地が多かったとかで、じめじめとした湿地帯に竹藪だの、無人の百姓家などが点在している。

表通りへ面したところには店屋もあるが、一歩、細道へ入り込むと、これが将軍ひざもとの大江戸の内とはおもえぬ。

それでも、荒井町のあたりまで来ると道もひらけ、宵の口のこととて、あちこちで通行人の提灯のあかりがうごいていた。

老僧は、荒井町の一角にある細道へ切れ込んで行った。

何年も前からの落葉が積ったまま腐葉土と化している細道であった。

表通りに面した町屋の裏側は深い竹藪になってい、その中を細道が通っている。

突き当りに、朽ちかけた小さな百姓家があった。

むかしは、この百姓家も細道も、木立や田畑に囲まれていたにちがいない。

大治郎は竹藪の中から、老僧が、百姓家へ入って行くのを見とどけた。

百姓家に、淡く灯がともった。

老僧が帰って来るまで、盲目の老武士は暗闇の家の中に凝と待っていたのであろう。

竹藪を出て、大治郎は百姓家に近づいて行った。

あきらかに、二人のはなし声が聞えた。

(何を語り合うているのだろうか……？)

好奇心だけとはいいきれぬ心情があって、尚も近よりかけたが、

(いや、これはいかぬ。盗み聞きなど、無礼きわまることだ)

顔を赫らめ、大治郎は引き返すことにした。

これで、老僧との関わり合いは、

(終った……)

と、大治郎はおもっていた。

だが、終ったことにはならなかった。

なんと、その翌々日に、秋山大治郎は、またしても件の老僧を見かけたのである。

しかも、父・小兵衛の親友であり、碁がたきでもある町医の小川宗哲宅へ、老僧は薬を受け取りに来たのだ。

宗哲と語り合っていた部屋と小廊下をへだてた診察の部屋にいて、宗哲と語る老僧の声を聞いたとき、大治郎は、

(よくよくの縁だな……)

と、おもった。

後刻、老僧とのいきさつを大治郎が語るのを聞き終えた小川宗哲は、こういった。

「……まったくな。わしなども、ずいぶん、そうしたことがある。何度も道で出合う人、おもいがけぬ場所で何度も出合う人というものは、決っているようじゃな。現にそれ、お前さんの父ごの小兵衛殿もそうじゃ。前に、あちこちで、よう顔を見かけた。向うも、そうおも

っていたらしく、あるとき……さよう、回向院の前あたりじゃったかな。小兵衛どのがわしに、よう出合いますなあ、と、こう声をかけてきたものさ。いや、それまでは口をきいたこともなかったのじゃよ。まったくそのとおり、と、わしがこたえてな。それから語り合うて仲よしになれた。こういうことはな、古めかしい言葉じゃが、何かの因縁とでも申すよりほかはない。天と地のちからが目に見えぬ糸でもって、われらをあやつっているのであろうよ」

それはさておき、その日、小川宗哲宅を出て、荒井町の百姓家へ帰って行く老僧を御竹蔵の通りで見かけた者がいる。

そやつは、あわてて南割下水に沿った道へ駆け込み、老僧が行きすぎるのを待ち、後をつけはじめたではないか。

若い侍であった。

先日、入谷田圃で老僧に暴行をはたらき、大治郎に懲らしめられた三人のうちの一人であった。

三

この侍は、本所の三ツ目通りが南割下水へ突き当った東側の角地に屋敷がある四百石の旗本・阿部玄蕃の長男で、名を新之助という。

阿部新之助は、入谷田圃にも近い下谷・御具足町に道場を構える白井熊治郎（中条流）の門人であった。

他の二人も同門で、大兵の侍は白井道場に近い山崎町に屋敷がある二百五十石の旗本・六郷左門。

いま一人は、下谷・七軒町に住む五百石の旗本・坂部孫太夫の次男で豊太郎という。

日暮れ前に、阿部は六郷左門邸へ駆けつけ、

「かの、乞食坊主の居所をたしかめましたぞ」

と、告げた。

そこで六郷左門は、すぐさま七軒町へ使いを走らせ、坂部豊太郎を自邸によんだ。

「どうする……?」

「どうしてくれようか……」

「ともあれ、このままには捨てておけませぬぞ!!」

と、阿部がいった。

「申すまでもないことだ」

坂部は、大治郎に突き飛ばされたとき、立木へ打ちつけた頭に包帯を巻いている。

一昨夜は帰邸してのち、高熱を発した坂部豊太郎は、腫れあがった頭の痛みに眠ることもできなかった。父の孫太夫に「なんとしたぞ？」と問われ、仕方もなしに、

「白井先生に稽古をつけていただきまして……」

そうこたえると父は、さも満足そうに、
「さようか。それは何よりじゃ。白井先生に打ち叩かれた痛みを忘れず、修行にはげめよ」
と、いったものだ。
（踏んだり、蹴ったりとは、このことだ）
坂部豊太郎は、自分の非行を棚にあげて、怒り狂っている。
六郷も阿部も同様であった。
見も知らぬ若者に、
「試し斬りを邪魔された……」
ばかりではない。
その若者に対し、白井道場では相当の遣い手だと自負していた三人が、一合もせずに逃げた。
その屈辱は、三人だけの秘密であり、
（決して、他へ洩れてはならぬ……）
ものなのである。
このような恥辱が世間に知れたなら、徳川将軍の臣としての家柄へ傷がつくどころではない。事によったら三人は、幕府の裁決を受け、きびしく処罰されることにもなりかねない。
絶対に、
（知られてはならぬ……）

と、このことのみを、三人はおもいつづけていた。
もっとも、こちらが名乗ったわけではないから、老いた托鉢僧も若い浪人ふうの男も、三人の身分や居所を知っているはずはない。
しかし、顔を見られている。
非行を見とどけられている。
江戸はひろいといっても、どこでまた、顔を見られるやも知れぬ。
現に、それ、阿部新之助は件の老僧を御竹蔵の道で見かけたではないか。
「よし」
と、六郷左門が決意をした。
「かまわぬ。斬って捨てよう」
「乞食坊主をですか？」
「あの浪人の居所はわからぬ……と、なれば決っているではないか」
「よろしい!!」
「やりましょう!!」
こうなると三人の、見当ちがいの遺恨と憎悪は、ひたすら老僧へ向けて募るばかりとなった。
また、たとえ、あの若い浪人の住居を探り出したとしても、
（われわれでは歯が立たぬ……）

ことを、三人は口にこそ出さぬが、よくわきまえている。

もしも、あの強敵を見つけ出したときは、他に数人の助勢をもとめなくてはなるまい。

あのときは三人とも、無我夢中で逃げてしまったが、やはり、

(浪人の後をつけ、住居をたしかめておくべきであった……)

すくなくとも、六郷左門はそうおもっていた。

大兵で筋骨もたくましく、白井道場随一の門人と自負している三十七歳の六郷左門には妻子もいるし、家来もいる。屋敷へ帰ると、わが家来たちを替る替る庭へ引き出しては剣術の稽古をつけ、片端から木太刀で叩き伏せ、得意満面になっていた六郷だけに、大治郎の激烈な叱咤に肝を冷やし、一目散に逃げ走った自分の醜体を、同門の若い二人に見られたことがくやしい。

ともかくも三人の、そうしたおもいが一つになって、逆恨みに老僧へ向けられたのである。

「で、その百姓家に、坊主がひとりで棲んでいるのか?」

「いや、別にひとり……」

「何……まさか、あの浪人では?」

「ちがいます、六郷殿。同じ浪人でも盲目の病人らしい。近くで聞き込んでおきました」

「ふうむ。盲目の浪人、な……」

「近辺の者たちが申すには、兄弟のようだとか……」

「兄弟、か……」

「となると、その浪人も斬って捨てずばなりますまい」

「いや、盲目なれば、わかるまい。たとえ乗り込んで行って坊主を斬ったにせよ……」

「なるほど」

「病気の老いぼれを斬ったところで、はじまるまい」

「いかさま」

「で、六郷殿。いつ、やりますか?」

「まあ、急くな。わしがひとつ、明日は下見に行こう。それからでよい。だれにも気づかれぬように仕てのけねばならぬゆえな……」

「さよう」

三人は、顔を見合せて、陰惨な目の色になり、だれからともなく顔をそ向け合っていた。

そのころ……。

秋山大治郎は父・小兵衛の隠宅で夕餉をよばれていた。

三冬は、明日、帰って来ることになっている。

大治郎は今日の午後、父の機嫌うかがいに鐘ケ淵の隠宅へあらわれたところ、父から小川宗哲へあてての手紙をとどけるようにたのまれ、宗哲宅へおもむき、居間で語り合っているときに、あの老僧が薬を取りに来たのであった。

「わしのところへ、あの坊さんが見えたのは一月ほど前のことであったかな……」

と、宗哲は大治郎にいった。

「いっしょに住んでいる友だちが急病だというので、わしのうわさを聞き、たずねて来たのさ」
　すぐに宗哲は、老僧にみちびかれて百姓家へ行き、盲目の浪人を診察した。
「急病と申すよりも、長い間の病が重くなったのじゃ。目のほうは、もう癒る見込みはないな」
　眼科は専門でない小川宗哲だが、はっきりとそういった。
「あれは、ただの知り合いとか友だちとかいうのではないな。うむ」
「と、申されますと？」
「念友の間柄やも知れぬぞ」
　念友とは、男色関係をさす。
「まさか、あの老人が……」
「いや、そうでない。年をとればとるほど、心と心が堅くむすばれるものじゃそうな」
「……………」
　大治郎は、眉をひそめた。
「ともあれ、坊さんの看病ぶりや、浪人をいたわるありさまなど、徒事ではない。また、その浪人どのもな、坊さんにたよりきっているようじゃよ。うむ、あの百姓家は無人で朽ちかけていたのを、坊さんが僅かな金で借り受けているらしい。近所とのつきあいもなくて、雨さえ降らなければ、かならず托鉢に出て、浪人どのの薬代を得ようとする。いやはや、実に

感心なものさ。わしも気の毒におもうてな、取っておきの、よい薬を調剤してあたえているのじゃが……それでも、もはや三月とはもつまいよ」
「どこが悪いのですか？」
「どこといって……どこもかしこもじゃ。長年にわたって、体が痛めつけられている。薬を血肉に吸いこむだけのちからが、体に残ってはいない」
「ふうむ……」
「ときに、大治郎どのよ」
「はい？」
「何で、あの坊さんを知っていなさる？」
「いえ、このあたりで、托鉢をする姿を数度、見かけておりましたので……」
「それだけかな？」
「はい」
　大治郎は老僧を救ったことを、宗哲先生に語ることがためらわれた。
　老僧を語ることによって、自分の為したことを語ることになるからである。
　しかし、小川宗哲の返書をもらって父の隠宅へもどって来た大治郎は、入谷田圃の一件を語った。
　聞き終えてから秋山小兵衛が、
「そのとき、その三人の侍どもに後をつけられなかったろうな？」

「大丈夫です」

そのことに、大治郎はぬかりがなかった。

老僧を本所まで送って行く間にも、充分に気をつけたつもりである。

「ならばよい。その侍どものようなのが、もっとも怖い。なに、お前にとってではない。坊さんの居所をつきとめたとしたら、きっと仇をするにちがいない」

「はあ……」

「侍どもは、これまでにも、ずいぶんと同じような乱暴をはたらいているにちがいないな」

「おそらくは……」

「三人とも、斬って捨ててしまえばよかったのじゃ」

めずらしく、小兵衛が昂った声を出したので、大治郎はおどろいた。

「父上……」

「いやなに、お前のしたことにあやまりはない。どうも、ちかごろは年をとった所為か、わしも気が短くなってのう」

四

翌日の昼下りに、秋山小兵衛の姿を本所・荒井町の源光寺門前に見出すことができる。

いまごろは、秋山大治郎が田沼屋敷内の道場で汗をながしている最中であろう。

今日も、晴れわたっている。

小兵衛は門前に佇み、源光寺境内の松の木立で、一つ、二つ、三つと、松蟬の声が鳴き揃うのへ耳をかたむけた。

この蟬は〔春蟬〕ともいい、夏のさきがけに鳴きはじめる。

その声が、小兵衛は好きであった。

（さて……わしも、これより何度、松蟬の声を聴くことができるやら……？）

六十をこえてから、季節が変るごとに、何かにつけてそうおもうようになった。

それでいて小兵衛は、いまの自分の体のすこやかさをも、みとめぬわけにはいかない。

むろん、十年前にくらべると体力のおとろえを感ぜぬものでもないが、どこといって悪いところもないのである。

妙なはなしだが、ときには、

（若い、おはるの相手もできぬことはない……）

のである。

それにつけても大治郎から聞いた、自分と同年配の老僧と盲目の浪人のはなしは、たしかに小兵衛の胸をさわがせたようだ。

（その二人、いったい、どのような間柄なのであろう……？）

それでなくとも、日々、退屈をもてあましている小兵衛の好奇心をそそるには充分であった。

いや、単なる好奇心ともいいきれまい。

くわしい事情は知らぬながらも、小兵衛は二人の老人に一種の感動をおぼえていた。

大治郎に救われた折の、老僧の態度や言葉を、よくよく考えてみると、

（前身は、侍ではなかったろうか……？）

そのおもいが強かった。

そうなると尚更に、

（蔭ながら、二人が棲む家だけでも見ておきたいものじゃ）

おもい立つと、矢も楯もたまらなくなり、おはるに昼餉を急がせ、隠宅を出て来たのであった。

（このあたりに、ちがいない……）

大治郎の言葉をたよりに、小兵衛は北割下水の突き当りの道を左へ折れた。

道を西へ行き、

（あ、ここか……）

荒井町と表町の境の辻を右へ折れた。

表通りの荒物屋の横の細道を、竹藪をぬけて突き当ったところに、二人が棲む百姓家があると聞いた。

荒物屋が、右側に見えた。

（ここだな……）

ひょいと、細道をのぞき込んだ秋山小兵衛が、はっと身を反らせた。

細道の向うの竹藪の中から、三人の侍が出て来るのを見たからであった。

とっさに、小兵衛は荒物屋へ入って、

「火吹き竹を一つ、もらおうかな」

と、店の女房へ声をかけた。

三人の侍が、表通りへあらわれた。三人とも編笠に顔を隠している。

（大治郎に懲らしめられたのは、こやつどもだ）

と、小兵衛は直感した。

編笠を寄せ合い、何やらささやき合った三人は、荒物屋の前を通りすぎ、表町の方へゆっくりと歩んで行く。

「ありがとうございい」

荒物屋の女房の声を背中に聞いて、火吹き竹を買った小兵衛は、三人の後をつけはじめた。

三人は一度、振り返って、こちらを見たけれども、小兵衛いささかもあわてずに後から歩む。

怪しまれた様子もない。

日中のこととて、通行人は小兵衛ばかりではないのだ。

そのころ……。

老僧は、日本橋・鉄砲町のあたりを托鉢していた。

軒下に立ち、懸命に、丹念に経をよむ姿を見て、家々の人びとが銭を紙に包み、報謝してくれることもめずらしくはないのだ。

この日の夕暮れに、田沼屋敷の稽古を終えた秋山大治郎が浅草橋場の我が家へ帰ると、妻の三冬が出迎えた。

「おお、帰られたか」

「はい。あの……」

「何か……？」

「先刻、本所の荒井町の荒物屋の亭主が、義父上にたのまれたと申しまして、これを……」

と、三冬が差し出したものは、結び文であった。

三冬はひらいて見てはいなかった。

「何、父上から……」

結び文には、こうあった。

「この文を見たら、すぐに、荒井町の荒物屋へ来てもらいたい。わしは、そこで待っている。尚、おはるのもとへも知らせておいたから、かまわぬように」

大治郎は、父の文を三冬へわたし、

「行ってまいる」

「何事でしょう？」

「読めば、わかる」

昨日、根岸の寮へたち寄った折に、三冬には、入谷田圃の一件を語ってあったから、大治郎は身を返して、家を走り出て行った。

荒物屋へ駆けつけたときには、夜になっていた。

秋山小兵衛は荒物屋の二階にいて、酒をのんでいた。

荒物屋の夫婦へ、たっぷりとこころづけをはずんだにちがいない。

「父上。いったい、これは？」

「三人の侍どもの正体をつきとめたぞ」

「えっ……」

これには、さすがの大治郎もおどろいた。

父の手まわしの早さには、

（呆れるほかはない）

と、おもった。

「まあ、聞け。それよりも先ず、のめ」

盃を息子にあたえた小兵衛が、通りに面した障子を細目に開けて、下の道から目をはなさず、

「のんでから、腹ごしらえをしておけ。ここの女房どのに仕度をたのんである」

「ち、父上……」

「まあ、聞け」

障子の隙間から目をはなさず、小兵衛が語りはじめた。

五

小兵衛の巧妙な尾行に全く気づかなかった三人は、ひとまず、六郷左門邸へ入ったという。

「小半刻も、六郷屋敷の前をぶらぶらしていたが……いや何とも、間がもてなくなってな。そこで、此処へ来て、お前とおはるへ手紙をとどけてもらったのじゃよ」

「この荒物屋へは、何といってあります?」

「来がけに小川宗哲先生のところへ立ち寄り、宗哲先生をわずらわせて、ここの夫婦にたのんでもらった。何しろ大治郎、本所界隈では宗哲先生は、神か仏も同様ゆえ、な」

「なるほど」

「いずれにせよ、やつどもが、坊さんと盲目の浪人に何か仕掛けるとすれば、夜か明け方じゃ」

「父上は、今夜にでも、三人が押し込んで来るとおっしゃるのですか?」

「来ぬかも知れぬが……来るやも知れぬ。来ることを先ず考えておかねば、あの二人の気の毒な老人たちを救うことはできぬ」

「父上。おやりなさる?」

「知ったからには、知らぬふりもできまい?」

「はあ……」

「日暮れ方にな、坊さんが、疲れた足を引きずるようにして、無事に帰って来たよ」

「さようですか……」

そこへ、荒物屋の女房が、大治郎のために夕餉の膳を運んで来た。

焼魚に味噌汁。それに井戸水で冷やした豆腐が一皿。

「わしは、先にすませた。さ、おあがり。なかなか、うまいぞ」

「では……」

「おかみさん。すまぬが、酒をな……」

「はい、はい。かしこまりました」

「下にもおかぬように……」

小川宗哲が何といったか知らぬが、荒物屋の夫婦は秋山父子を、もてなしてくれる。

「ときに、父上……」

「うん?」

「どうなさいます?」

「何が、よ?」

「こうして、私たち二人だけで、いつまでも見張りをつづけるわけにもまいりますまい」

「お前は、田沼様での稽古もあるし、な」

「そのとおりです。父上、これはやはり、四谷の弥七どのに助けてもらわねばなりますまい」

「そんなことなら、わけもないが……」

「父上。替りましょう」

食事をすませた大治郎が父と入れ替り、障子の隙間へ視線を移した。

表通りの町屋の灯火が、道に洩れている。

「来るにしても、もっと遅くなってからだろうよ」

「といって、こうなれば、目をはなすわけにもまいりますまい」

「ほんにな……とんだところへ、首を突っ込んだものじゃ」

いいながらも、小兵衛の両眼が若々しい光をたたえ、声にも活気が出てきている。

「父上。まだ別に、手段があるとおもいますが……」

「いまのうちに、あの二人を何処かへ隠してしまおうというのかえ？」

「はい」

「となると、二人に事情をはなしてやらぬといかぬな」

「申すまでもないことです」

「さて、なあ……」

「は……？」

「承知すまいよ、坊さんが……だって、そうではないか。先夜、住居まで送ろうとしたお前

に、事情あって、これより先は一人で帰ります、と、坊さんがそういったそうではないか」

「そうでした……」

「じゃが……事情をはなしてみるのもよいだろう。そうすると坊さんは浪人を連れて、江戸をはなれ、ふたたび、流浪の旅へ出るやも知れぬ。そうなれば、三人の悪どもも後は追うまいよ。あの三人は、わが身分と家柄を考え、おのれらの醜体が世間へ洩れることを何よりも怖れているのじゃ」

「父上。その醜体を見知っているものが、いま一人、ここにおります」

「お……そうだ、そうだ。お前のことを忘れていたわえ。ふむ、こうなると、いよいよ捨ててはおけぬ。可愛い伜に害がおよんでは一大事じゃ」

と、大形に目をむいて見せる父を見て、大治郎は苦笑を浮べるのみであった。

ところで……。

さすがの秋山父子も、見逃していた一事がある。

もっとも、そのことは、荒物屋の夫婦でさえも気がつかぬことだったから、秋山父子の目に入らなかったのも、

「むりはない」

と、いえぬこともない。

しかし、六郷・阿部・坂部の三人は、それを今日のうちに、発見していたのであった。

それは、何かというと……。

托鉢僧と盲目の浪人が棲む百姓家の裏手から、源光寺の墓地へ通ずる細い細い通路のことなのである。

雑草に埋もれ、木立に囲まれた、この細路は、ずっとむかしに、百姓家のあるじだった男が、源光寺の墓守を兼ねていたため、人ひとりが辛うじて通れる道を通したのであった。

ために、近辺の人びとも、ほとんど知ってはいない。

六郷たちは、今日の昼間に、百姓家を探りに来て、老僧が托鉢に出ていることをたしかめ、破れ障子の隙間から、屋内に盲目の浪人がいることを確認した。

裏手にも廻ってみた。

そして、源光寺の墓地への通路を発見したのである。

小兵衛も大治郎も、荒物屋の傍の細道の突き当りが百姓家で、出入りは、この道ひとつと、おもいこんでいた。

なればこそ、荒物屋の二階から表通りを注視していれば、百姓家の二人をまもることができると見きわめをつけたのである。

小兵衛と大治郎は、夜が更けて荒物屋の夫婦や子供たちが寝しずまってからも、相談をつづけている。

そのころ、下谷・山崎町の六郷屋敷の裏門から、三つの人影が路上へあらわれた。

主の六郷左門に、阿部新之助と坂部豊太郎であった。

三人とも、蒸し暑い初夏の夜ふけなのに、すっぽりと頭巾をかぶっている。

六郷左門が頭巾の中から、

「やはり、あの寺の墓地づたいに打ち込むがよいな」

と、二人にいった。

六

三人が本所荒井町の百姓家を襲ったのは、丑三つ（午前三時すぎ）のころであった。

やはり三人は、源光寺の墓地づたいに潜入して来た。

人の目にふれる心配もない時刻ではあっても、表通りから入って行けなかったのは、この襲撃が正当のものではなかったからであろう。

三人が、百姓家の裏手へあらわれたとき、家の中では、盲目の浪人が、ささやきつつ、となりの寝床に眠っている老僧を、手さぐりにゆり起した。

「もし……もし、了念殿……」

「あ……いかがなされた？」

「おしずかに」

と、浪人は、しわがれた声で、

「先ず、落ちつかれるがよい」

「はあ……？」

「裏手に、怪しき物音がする……」

いいさして、浪人は痩せおとろえた腕をのばし、枕元の大刀をつかんだが、ふと、おもい直したように脇差のほうを把って胸元へ引き寄せた。

「堀内どの……」

「おしずかに……実はな、今日の昼下りにも、この家のまわりを密かに歩む足音がしておりましたが……それも、一人ではない」

「あ……」

老僧は、愕然となった。

入谷田圃での事件を、老僧は浪人に語ってはいなかった。

心配させては、

（病体に障る……）

と、おもったからである。

「まさかに、このわしの首をねろうて、敵の佐藤弥五郎があらわれたわけでもあるまいが……」

「堀内どの……」

「さ、ともあれ、お逃げなされ」

「いや、それは……」

「お逃げ下され。たのむ。たのみ申す」

と、浪人のかすれ声に、ちからが加わった。

このとき……。

荒物屋の二階では、秋山大治郎が障子の隙間から外の道を見張りつづけている。

闇になれた大治郎の目には、たとえ、細道へ入る猫一匹も見逃さなかったろう。

小兵衛は着のみ着のままで身を横たえ、荒物屋の女房が貸してくれた掛けぶとんを腰にかけ、よく眠っていた。

無事に翌朝を迎えることができたなら、小川宗哲に相談し、何かうまい方法で、ともかくも二人を他の場所へ移してしまい、

「そのあとで、三人の侍どものことを考えよう」

と、小兵衛はいった。

夜が明けぬうちに、曲者どもがあらわれたなら、秋山父子は二階の窓から道へ飛び下りるつもりでいる。

大治郎は行燈の被いを深くし、さらに部屋の内を暗くしてから、障子を半分ほど開けた。

冷んやりとした夜気に、噎せ返るような新緑のにおいがこもっていた。

（どうやら、無事に、朝が来るらしい……）

と、大治郎はおもった。

ちょうど、そのとき……。

百姓家の中の様子をうかがっていた三人の侍は、体当りに裏口の戸を叩き倒し、いっせいに屋内へ闖入した。
この物音は、むろん、遠すぎて大治郎の耳へとどいていない。
百姓家の中には、はじめから灯がともっていない。
夕餉がすめば灯油も消してしまうのが、老僧と浪人の習慣であった。
三人のうちの阿部新之助が、用意してきた龕燈提灯を左手に持ち、屋内を照らした。
土間に接して板の間。その奥に八畳ほどの部屋がある、それだけの小さな家であった。
「それっ……」
坂部豊太郎が大刀を小脇に抜きそばめ、一気に板の間へ駆けあがり、板戸を引き開けて奥の部屋へ躍り込んだ。
坂部が躍り込んだかと見る間に、
「うわ……」
絶叫をあげ、奥の間から転げ出て来たものがある。
坂部につづいて板の間へ駆けあがろうとした六郷左門と阿部新之助は、その転げ出たものを、
（あの乞食坊主……）
と、一瞬は見た。
だが、それは他ならぬ坂部豊太郎ではないか。

板戸の蔭に、早くも脇差を抜いて待ち構えていた盲目の浪人が、飛び込んで来た坂部の太股を深ぶかと切り割ったのである。
盲目の上に、小川宗哲が「三月とはもつまい」といったほどの、病みおとろえた老体が為し得た業ともおもわれぬ。
同時に……。
前庭に面した雨戸を引き開けた老僧が、声をかぎりに叫んだ。
「盗人でござる。人殺しでござる。人殺しでござる!!」
この叫びは、竹藪をつきぬけて、微かながらも、はっきりと大治郎の耳へ入った。
ちょうど、障子を開けて外気を吸い込んでいたときだったから、よかったのだ。
「父上!!」
大治郎が声をかけるよりも早く、小兵衛が飛び起きた。
「お先に……」
いうや、大刀をつかんだ秋山大治郎が窓から下の道へ飛び下りた。秋山父子ならば、わけもないことだ。
「盗人でござる。お出合い下され。人殺しでござる!!」
老僧の叫びが、細道へ駆け込んだ大治郎の耳へ、今度こそ、はっきりと聞えた。
大刀を引き抜きざま、大治郎は一気に竹藪を走りぬけた。
その前へ、百姓家の裏手から抜身を持った二つの人影が駆けあらわれた。

「おのれ!!」
大治郎の声に、
「あっ……」
二人は、立ちすくんだ。
六郷左門と阿部新之助である。
阿部が、いきなり、龕燈提灯を大治郎へ叩きつけた。
ひらりとかわした大治郎が、
「おのれら、先夜の二人だな」
「う……」
そこへ、秋山小兵衛が駆けつけて来た。
「大治郎。こやつどもか?」
「はい」
「よし。かまわぬ。斬れ」
「よろしいか?」
「こやつどもを生かしておいては、何をするか知れたものではない。罪もなき人びとの迷惑じゃ。わしが引き受ける。かまわぬから斬れ。斬れい!!」
小兵衛の声には、烈しい怒りがこもっている。
「たあっ!!」

進退きわまった六郷左門が、大治郎の正面から猛然と刀を突き入れてきた。
わずかに左足を引きざま、右足で踏み込んだ大治郎は、六郷の刃風を胸もと三寸にかわしておいて、大刀の柄頭で左門の左の鬢のあたりを強打した。
「う……」
目がくらみ、前へのめりこんだ六郷左門のくびすじの急所を、秋山小兵衛が抜き打ちに斬った。
「むうん……」
わずかに呻いて、六郷が倒れ伏した。
即死である。
阿部新之助は、六郷左門に一撃を加えて飛び退いた大治郎の側面から、
「いまこそ!!」
とばかり、振りかぶった一刀を打ち込んだが、これに対する大治郎の体勢はいささかもくずれぬ。
水のながれのごとき自然さで、飛び退いた大治郎の左足が軸になって、くるりと体がまわり、阿部の打ち込みはむなしく闇を切り裂いた。
「ぬ!!」
あわてて踏みとどまり、向き直ったときが、阿部新之助の最期であった。
秋山大治郎が送り込んだ切先は、阿部の喉笛を見事に掻き切っていたのである。

裏手から、太股を切られた坂部豊太郎が唸り声をあげつつ、這い出て来た。太股の骨まで切断されたのだ。

「こやつは、捨てておけ」

いうや、小兵衛が前庭に面した雨戸の、引き開けられた箇所から屋内へ入って行った。

大治郎も、これにつづいた。

土間に接した板敷きで、老僧が盲目の浪人を抱きしめていた。

七

盲目の浪人は、間もなく、老僧の腕の中で息絶えた。

曲者どもの刃を、浪人は一太刀も受けていなかった。

病みおとろえた体に残されていた微かなちからを振りしぼって、浪人は曲者どもを迎え撃ったのである。

しかも、目が見えぬ。

それでいて、浪人は裏手にせまる殺気をいち早く察知し、冷静に迎撃の仕度をととのえた。

老僧を前庭に面した雨戸の傍へ移し、自分は抜きはなった脇差を構えて、板の間から、躍り込む敵にそなえた。

坂部豊太郎が重傷を負って転げ出た、つぎの瞬間には老僧が雨戸を引き開け、叫び声をあ

げたので、六郷も阿部も動転してしまった。

(自分たちを、待ちかまえていた……)

このことである。

待ちかまえていたものは、老僧と浪人だけではあるまい、と、すくなくとも生き残った坂部豊太郎は感じた。だから秋山父子に斬って殪された六郷・阿部の二人も、同様であったのだろう。

「いかぬ。逃げろ」

六郷左門がいい、真先に裏口から外へ飛び出し、阿部がつづいた。二人は重傷の坂部をたすけようともしなかった。いかに彼らが周章狼狽していたかが知れよう。

それにしても……。

(この浪人どのは、徒者ではない……)

と、秋山父子は看てとった。

浪人は、老僧の腕に抱かれたまま、その耳もとへ、跡切れ跡切れに何事かささやいた。

二度、三度と、老僧がうなずいた。

この二人の様子も、

「また、徒事ではない……」

と、いってよい。

(念友……やはり、宗哲先生の申されたように、まことなのか?)

大治郎が小兵衛に、
「父上。宗哲先生に来ていただきましては……?」
そういうと、小兵衛がきびしい横顔を見せたまま、強くかぶりを振った。
(もはや、間に合わぬ……)
と、看たのであろう。
「りょ、了念殿……」
浪人が老僧の胸へすがりつくように右手を伸ばした。
「はい……はい。ここにおりまするぞ、堀内どの」
「あ……」
意識が混濁してきたらしく、盲目の浪人は、わけのわからぬ言葉をつぶやきはじめたが、その中で、
「長い長い間……」
という言葉と、
「……かたじけない」
の一語が、秋山父子の耳へ入った。
了念とよばれた老僧は、浪人を抱きしめたまま、化石のごとく身じろぎもせぬ。
「亡くなられた……」
小兵衛が、だれにともなく呟いた。

夜の闇が薄紙でも剝ぐように、仄白く明るみを増し、どこかで鶏が鳴きはじめている。
息絶えた浪人の死顔に見入りつつ、老僧が、
「堀内どの。この了念を……佐藤弥五郎を、おゆるしあれ」
ほとばしるように、いい出たものである。



「いえ、私の名も、この亡くなられたお人の名も素姓も、何とぞ、お聞き下されますな」
と、老僧は秋山父子に語った。
「その上で、申しあげまする……私は、むかし……さよう、もはや二十八年もむかしの事でございましたが、いま、この腕の中で息をひきとられたお人の父御を手にかけてしもうたのでござります」
「御坊が……?」
「はい。はい。おもえば、これと申して由ないことから、酒に酔うて、このお人の父御と争いましてな……このお人の父御は、そのころの私の上役でござりました。満座の中で、私は、ひどく叱りつけられ、そのくやしさ、無念さに逆上し、宴が果ててのち、このお人の父御を城下の暗い道に待ちうけ、背後から……」
絶句したが、すぐに気を取り直したらしく、老僧は語りついだ。

「背後から、刀を突き入れました。父御は即死。私は、その場から城下を脱け出し、逃亡したのでござります。老いた母と、妹を捨てて……」

　顔を見合せた小兵衛と大治郎は、声もない。

「このお人は、家中に聞えた一刀流の名手でござりました。私には、この人を返り討ちにする自信など、とうてい、ござりませなんだ。父の敵と追いせまるこの人の目を逃れ、逃れて、私は苦しい旅をつづけましたので……はい、どこにいても、どのような場所に隠れていても、一夜として、満足に眠ったことのない年月がつづきました」

　そうして、十年の歳月がながれたという。

「まるで、夢のようにしかおもわれませぬ。なんで、このようなおもいをしてまで逃げまわらねばならぬのか……いっそ、このお人に見つけられて、殺されてしまうたほうがよいとさえおもいました」

　二人が故郷をはなれて十一年の夏に、二人は出合った。

　いや、先に相手を見つけたのは、老僧のほうである。相手は気づかなかった。

　場所は、東海道・白須賀の宿外れであったそうな。

「私は、あわてて木蔭へかくれ、このお人をやりすごしましたが……そのときでござります。はい、そのとき……」

「何となされた？」

　と、秋山小兵衛。

「そのとき、私の脳裡に浮びましたものは……あのように強い男に追いかけられていたのでは、この先、たまったものではない。よし、こちらが相手のうしろへぴたりとついて行こう。それならば見つかる心配はない、と、さようにおもいました。そして、もし、相手に隙あるときは、返り討ちにしてくれよう……そこで、討たれるはずの私が、討つ相手のうしろから影のようについて行ったのでござります」

　こうして、二人の長い長い旅がはじまった。

　ところがやはり、相手は〔然る者〕であって、返り討ちどころではない。昼も夜も、いつ、いかなる場所でも、相手にはつけ入る隙がなかった。老僧は返り討ちをあきらめ、一定の距離をへだてて後をつけることのみに専念した。

「はい。そのほうが、かえって気楽でござりました。後をつけることもうまくなりましたし、何よりも恐れる相手をこの目にたしかめつつ、うしろへうしろへとまわっているのでござりますから……」

　二年、三年と、二人の旅はつづけられた。

　そうなると老僧は、恐るべき相手に奇妙な親愛感をさえ抱くようになってきたのである。

「このお人の癖も、食べものの好みまで、手に取るごとく、わかるようになりましてな」

　武家の間におこなわれた〔敵討ち〕は、いわば法律の代行であった。

　父の敵の首を討って帰らぬかぎり、先祖代々の身分も役職も、ふたたび自分の手へはもどってこない。

ゆえに、敵を討つまでには国許の親類や藩庁もこれを助け、旅費なども工面してくれる。

けれども、おのずから限度があった。

敵討ちの旅に出て、十八年もたつのに、まだ本望がとげられぬとなれば、

「もう、いかぬわい」

と、親類も藩庁も援助を忘れてしまうし、それに敵討ち当人のほうが、

「合わせる顔がない……」

というわけで、連絡も絶えてしまうことになるのだ。

「それから、このお人の苦労がはじまりました。苦しい旅をつづけるうち、ついに、体をこわし、目も見えなくなりました。私は……私は、何度も、名乗り出て、首を討たれてやりたいと、さようにおもいましたなれど……ああ、どうしても、どうしても……」

老僧は堪えきれずに、嗚咽した。

「人というものは、さほどまでにしても、生きたいものなのでございましょうか……」

「そのとおりでござるよ」

と、小兵衛がやさしくいった。

盲目の浪人が、甲州の栗原の宿場にある旅籠で発病し、高熱がつづいて何度も死にかけたのち、両眼が見えなくなり、絶望の極に達し、或る夜、短刀を引き抜いて、これをわが心ノ臓めがけて突き立てようとしたとき、

「お待ち下され」

隣室に泊りこんでいた老僧が、たまりかねて飛び込み、短刀を捥ぎ取った。

もはや、返り討ちなどという考えは、みじんもなかった。自分の犯行のために半生を敵討ちの旅にすごし、辛苦にまみれつくして盲目とまでなった相手への同情と悔恨と自責の念に老僧も、さいなまれつづけていたのである。

「そこもとは?」

「旅の法師でござる」

「短刀をお返し下され。おかまい下さるな」

浪人は、この老僧が父の敵だとは夢にもおもっていない。

二十一年の歳月が経過しているのだ。

顔を見ることもできぬし、老僧は、おのれの若き日の声音を全くうしなっている。

「おたすけいたしましょう。かなわぬながらも……」

浪人は、父の敵を討つ身であることを、のちに老僧へ告げた。

「と申して、もはや、敵を討つことはあきらめ申した。なれど、向うが生きていて、それがしを見れば、返り討ちにしてくれようと斬ってかかるは必定でござる。そのときは、それがしにかまわず、お逃げ下さい」

「はい、はい……」

こうして、二人の旅は尚もつづけられた。

浪人の体をいたわりつつ、老僧は托鉢をしながら旅をつづけ、すこしでも金を蓄えると、

家を借りて棲み、浪人の療養に意をつくしてきた。

仏門の修行を積んだわけではないが、経文を理解し、これを誦することも堂に入って、

「このお人の病を癒すことが、生甲斐ともなってまいったのでござります。なれど……なれど……」

なれど、すべては終った。

「いかようになされましょうとも、かまいませぬ」

いさぎよく頭をたれた老僧へ、

「いや、いや……われらは無頼の者どもを始末しただけじゃ」

「な、なれど、このままにては……」

「かまい申さぬ。それよりも、ここにいては何かと面倒でござる。後は後のこと。さ、すぐさま何処かへ身をお隠しなされ。このお人の亡骸は、われらにて始末いたそう」

朝の光が、あたりにただよってきていた。

さいわい、近辺の人びとは、あの斬り合い騒ぎに気づいていないようだ。

洗いざらしの衣に網代笠をかぶった老僧が、源光寺の墓地への通路から立ち去ったのは、それから間もなくのことであった。

「御坊。わしは秋山小兵衛。これなるは倅の大治郎と申す。このお人の亡骸は、ひとまず浅草今戸の本性寺へ葬っておきましょうゆえ、月日がたったのちに、まいられるがよい」

「は……はい。かたじけのうござる。かたじけのう……」

秋山父子を伏し拝み、とぼとぼと木の間に消えて行く老僧を見送り、小兵衛も大治郎も顔を見合せ、溜息を吐くのみであった。

源光寺の本堂で読経の声があがりはじめた。

荒れ果てた前庭の一隅に、常緑の喬木が淡黄色の小さな花をつけているのを見つけた小兵衛が、

「ほう……かくれ蓑が花をつけたか」

「かくれ蓑……?」

「あの木のことよ。人は、そうよんでいる」

「ははあ……」

「あの花が咲くと、間もなく暑い日がやってくるのじゃ」

百姓家から出た小兵衛は、六郷と阿部の死体をながめ、

「ふ、ふふ……こやつのせがれどもが、わしたちを父の敵とつけ狙うやも知れぬな」

と、いった。

梅雨の柚の花

一

妻の三冬は、父・小兵衛の隠宅へ出かけ、留守であった。

このごろ、一日置きに、三冬は隠宅へおもむき、おはるから針仕事を習っているのである。

外には、初夏の陽光がみなぎりわたっている。

秋山道場では、若者ふたりが裂帛の気合声を発し、無外流の型をつかっていた。

ひとりは、飯田粂太郎。

いまひとりは、二月ほど前から道場へ通って来ている笹野新五郎だ。

秋山大治郎が、亡師・辻平右衛門から授けられた無外流の型は三段に別れてい、その第一段は、いわゆる〔基本〕というべきものである。

三転、四転する無外流の構えから、攻撃と防御の型が三十七手に組み込まれてい、これを

二人が〔打太刀〕と〔受太刀〕を交互につとめ、くり返し、くり返しつづける。

飯田粂太郎と笹野新五郎は、もう一カ月も、第一段の型を大治郎の前でつづけさせられているのだ。

半月前から、

「今日よりは、真剣をもっておこなうように」

と、大治郎に命じられた二人は、それこそ、渾身の気力体力をふりしぼり、型をおこなっている。

粂太郎の熱心なのは知れてあるが、秋山道場二人目の門人となった笹野新五郎も、たゆまずに道場へ通って来る。

新五郎は、神田・裏猿楽町に屋敷がある六百石の旗本・笹野忠左衛門の長男で、二十五歳になる。

剣術は十歳のころから、小石川の朝倉平太夫道場へ通っていたとのことで、

「相当につかえる……」

といってよい。

朝倉平太夫は三年前の夏、何者かに殺害され、道場は跡をつぐものが無く、閉鎖された。

以後、新五郎は剣術を絶っていたそうな。

新五郎がまなんだのは一刀流だが、近年流行の、ただもう派手やかに打ち合って、器用に仕上がればよいという悪い癖がほとんど身についていなかった。

秋山大治郎は、それをよろこんだ。

朝倉道場は小さなもので、門人の数も少なかったというが、

（よい師匠であったらしい……）

と、大治郎は、一度も見たことがない朝倉平太夫を偲んでいた。

小兵衛に尋くと、

「朝倉……ふむ。何やら、耳にしたこともある」

とのことだ。

ところで、笹野新五郎が何故、秋山大治郎の許で、ふたたび剣術をまなぶつもりになったかというと、

「ぜひにも、秋山先生に御面倒をおかけしたい」

と、田沼意次の用人・生島次郎太夫から、大治郎がたのまれたのである。

引き受けぬわけにはゆかぬ。

生島用人は、新五郎の父・笹野忠左衛門と昵懇の間柄だそうな。

二月前に、はじめて、笹野新五郎が道場へあらわれたのを見るや、三冬が笑いをこらえ、袂に顔をおおい、台所へ走り込んだものだ。

（ふむ……）

大治郎も、面へは出さなかったが、心中に、

（まさに、異相……）

と、見た。

笹野新五郎の、中肉中背の体格は実によく均整がとれているけれども、その顔貌が、

（またとない……）

ものであった。

新五郎の顔を一度見たら、決して忘れることはあるまい。

顔を、横から真二つに割ったとする。

その下半分に、眉・目・鼻・口があつまってい、上半分のすべてを額がしめているのだ。

そして、顔の上部から頭へかけて、しだいに巾がせまくなっている。

つまり、三角形の顔と頭の下半部へ造作が集中しているのだ。

顔は大きい。頭は尖っている。

濃い眉、くろぐろと見ひらかれた両眼、ふとい鼻、一文字に引きむすばれた口、いずれも男の顔の造作として申し分のないものでありながら、それが下半分へあつまってしまったところが残念であった。

もっとも、顔の半分といっても、それは常人の顔全体に匹敵するほどの大きさなのだ。その上へ、またまた大きい額が張り出してい、さらに、頭部が尖っているため、髷がよく乗らぬうらみがある。

はじめて新五郎が道場へあらわれた日の夜、秋山大治郎は夕餉を終えてから姿を正し、三冬へ向い、

「さて……」

何か、いいかけようとするのへ、

「おゆるし下されませ」

三冬が両手をつき、顔を伏せた。

笹野新五郎の顔貌を見たとたん、失笑しかけた妻の無礼を叱ろうとおもった大治郎は出端をくじかれた。

「私が、悪うございました」

「おわかりか……」

「はい」

「いつまでも、以前の三冬どのであっては困る」

大治郎は、それだけで叱るのをやめた。

ところで……。

笹野新五郎は、田沼屋敷内の道場で、大治郎が田沼家の人びとに稽古をつけるありさまを、物蔭から二度ほど見ていたらしい。

これは田沼家の用人・生島次郎太夫の手引きによったもので、新五郎としても、これから自分が師と仰ぐべき人の稽古ぶりをひそかに見ておきたかったのであろう。ことに、自分が大治郎の無外流とはちがう流派の剣術を修行してきただけに、それは当然のことであって、また新五郎のそうした心がけは剣士としてほめられてよいことだ。

笹野新五郎は、一刀流の朝倉道場が閉鎖されてより今日までの三年間に、

「いささか、身性が悪しくなりましてな……」

と、生島用人が大治郎に語った。

「ほう、それは……？」

「いや、屋敷内に、いろいろと事情もござって……」

笹野家に、何やら複雑な事情が起り、それがおもしろくなくて、新五郎は酒色にふけるようになったというのである。

「なれど新五郎殿は、笹野家の嫡男だそうではありませぬか」

「そのとおり……」

いいさした生島次郎太夫が、急に暗い目の色になって口ごもり、それ以上を語りたくはない様子を見せたので、大治郎はあえて尋ねなかった。

そうしたことは大治郎にとって、

（どちらでもよいこと……）

なのである。

必要なのは、彼が自分の道場へ来て、自分のきびしい指導を、どこまで熱心に、どこまで粘り強く、その身に受けてくれるかであった。

二

ともかくも笹野新五郎は、三年にわたっておぼれこんだ酒色の誘惑から這いあがり、中断していた剣の道へ深く分け入ろうと、
（決心をしたらしい……）
のであって、たしかに、その気構えは、大治郎と三冬にも感じとられたのである。
大治郎は先ず、例の振棒からやらせた。
これは無外流の初歩である。
新五郎も半月ほど前から、ひとりで体の調子をととのえていたらしく、二貫目の振棒を五百回振りぬいても体勢はくずれぬ。
これを、大治郎は凝視したまま、十日ほどがすぎた。
（ふむ。なるほど……）
この十日間に、新五郎が故朝倉平太夫から受けた修行の道程が、いかなるものであるかを大治郎は看取することを得た。
ひとかどの剣士である新五郎が不快の色も見せず、振棒を振りぬいて倦むことを知らなかった。
（これなら……）

大治郎は、期待を抱いた。
大治郎が田沼屋敷の稽古日に出かけ、道場を留守にしている間も、新五郎は黙々と振棒を振りつづけているそうな。
そして一月もすると、はじめは、どこかにうす暗い翳りが漂っていた笹野新五郎の面上に生き生きと血の色がみなぎりはじめた。
振棒も、三貫目の重さに替えられた。
日毎に、自分の体が以前のたくましさを取りもどしてくることに、新五郎は満足をしているらしい。
「いかがでしょうな、新五郎は……」
生島次郎太夫の問いに、大治郎が、
「あれならば大丈夫でしょう。私も本気になっております」
そうこたえると、生島用人の目がよろこびに光った。
「お願い申す。秋山先生によって、新五郎も生れ変りましょう」
「いえ、そのような……」
「お願い申す。お願い申す」
生島次郎太夫の声には、真情がこもっている。
それは、単なる友人の息子のために、というだけのものではない。新五郎の父・笹野忠左衛門と生島用人とは、よほどに親しい間柄なのであろう。

新五郎の父が生島用人へ、息子のことをくれぐれもたのんだにちがいないと大治郎はおもっていた。

　ところが、一月がすぎたころ、生島次郎太夫が、

「秋山先生……」

「はい？」

「かほどに、新五郎がお世話をおかけ申しながら、新五郎の父が御挨拶にも出ませぬこと、心苦しゅう存ずる」

　なにをいうことかと、大治郎はおもった。

　そうしたことなど、いささかも気にかけてはいなかった。

　いまを時めく老中・田沼意次の用人として、日々多忙をきわめる身でありながら、生島次郎太夫は二度も秋山道場を訪れ、

「笹野新五郎がことを、よしなに……」

　と、挨拶をしているし、三冬へも贈物をし、

「よろしゅう、面倒をみてやって下されますように」

　と、両手をつかえた。

　もっとも三冬は、生島用人にとって、主田沼意次のむすめなのであるが、それにしても行きとどいたことであった。

「次郎太夫が新五郎どのの親代りになっているのでございましょうか？」

　と、三冬が大治郎にいった。

「さて……そのようには聞いていないが……」

　三冬が少女のころから見知っている生島次郎太夫は、感情の起伏を顔にも態度にもあらわさぬ男であった。

　秋山大治郎にとっても、生島用人の印象は三冬と同様のものであったのだ。

「あれほどの打ち込みようは、ただごとではございませぬ」

「ふむ……」

「次郎太夫に、子がない所為かも知れませぬな」

「なるほど……」

「新五郎どのを幼少のころから見知っているので、父親になったつもりでいるのでございましょうか？」

「なるほど……」

「それにしても、こたびのことで、私は次郎太夫を見直しました」

「ほう……」

「妾腹に生れた私が、父の許をはなれております間、次郎太夫は何かと世話をやいてくれましたけれど、みじんも私へ笑いかけたことなどございませなんだ。この男は体に血が通うておるのか、と、何度おもいましたことか……」

「ふうむ……」

「ただもう、父の命ずるままに、生人形のごとく、用を足しているだけのこととしかおもわれませなんだ」
「さようか……」
「それにしても意外なことでございます。次郎太夫に、あのような親切ごころがありましたとは……」
「それにしても……」
三冬は、むしろ呆(あき)れたようにいうのである。
「む……?」
「笹野(ささの)新五郎どのを、何と、おもわれます?」
「何と、とは?」
「実は……」
と、三冬が語るには、大治郎が田沼邸の稽古に出た折の或(あ)る日に、三冬が住居と道場の境になっている板戸の隙間(すきま)から、何気もなく、道場で振棒を振りつづけている笹野新五郎を見たとき、
「はっ、と、おもいました」
「何で?」
「ただひとり、振棒を振っておられる新五郎どのの体から、凄(すさ)まじいばかりの殺気が噴き出しておりました」

「殺気が……」
「はい」
女武道として一流の三冬が看(み)てとったことだ。その目に狂いはあるまい。
「まことか?」
「はい」
「その日、一度だけのことか?」
「実は、三日前のことなのでございます」
「ふうむ……」
しばらく沈思していた大治郎は、その翌日から、飯田粂太郎(いいだくめたろう)をよびよせ、真剣を把(と)っての型を笹野新五郎へつたえることにした。
ただし、型をつかわせるときは、かならず自分が見ている前でということに決めたのである。
それから、半月が経過している。

三

その日も、笹野新五郎は昼すぎに秋山道場を出た。
朝から正午まで、新五郎は飯田粂太郎を相手に型をつかい、ときには大治郎の打太刀(うちだち)を受

けにまわり、または打太刀をつとめて大治郎に受けてもらう。
型の前後に振棒を振るのも、定められたことであった。
真剣の型をつかうのだから、一瞬の油断もゆるされぬ。
むろん、双方とも殺気に近い気魄がほとばしるのは当然のことだ。
この間、四度ほどの少憩をとったのみで、新五郎は渾身のちからをふりしぼる。
終って井戸の水を浴び、大治郎へ挨拶をし、神田の屋敷へ帰って行くのである。
この二カ月で、笹野新五郎の剣士としての心身は、完全に、
「よみがえった……」
と、いってよいだろう。
帰って行く新五郎を見送った秋山大治郎が、
「三冬どの。笹野は、どうやら瘧が落ちたようだ」
「と、申しますのは？」
「このごろは、剣に没入できるようになった。いささかも邪念はない」
「はい」
「ともあれ、笹野新五郎は、この道場へ来て、鈍りきった自分の心身を鍛え直そうとした……」
「はあ……」
「それも、何やら目当があったからでしょう」

「目当……？」
「だれかに、真剣の立ち合いを挑まれているのではなかろうか、と……」
「では、やはり……」
「たしかに、はじめのうちは、笹野の体から凄まじい殺気が噴き出していた。私を、たしかに憎むべき敵と見て、剣を向けてきていた」
「ま、それは……」
「それが消えた。型が身につくと共に、無外流の一太刀一太刀の、その剣の閃きのみが笹野の目に映り、心身へおよぶようになってまいった。いまの笹野には憎悪も邪心もない」
「では、無外流の型が……？」
「さよう。辻平右衛門先生が創られた三段三十七手の型を体得すれば、まさに、邪念は消えるはず。なれど笹野は、第一段十一手の型を体得したのみで、没入した」
「はい」
「このごろの、笹野新五郎の顔つきが変ってきた。見ていて、まだ可笑しくなるかね？」
「そのことは、もう、おっしゃらないで……」
「は、はは……」
道場では、飯田粂太郎が汗みどろになり、床板をふき清めていた。
そのころ……。
笹野新五郎は田の中の道を下り、思川をわたり、橋場の町すじへ入っている。

大川（隅田川）の川面に陽光が煌めき、浅草寺へ参詣に来た人びとが、浅草の外れのこのあたりまで、何気もなく歩を運んでしまうほどの、さわやかな五月晴れであった。

橋場の不動院前を行きすぎる新五郎の頰をかすめた燕が一羽、矢のように舞いあがって行く。

そのとき、不動院の門内から姿をあらわした二人の侍が、編笠をかぶったままで、

「まさに、な……」

「これは、徒事でないぞ。そうはおもわぬか？」

「先刻、見とどけた秋山道場と申すのは……たしかに、無外流・秋山小兵衛がせがれの道場なのか？」

「さよう。相当の遣い手らしい。ちかごろは、御老中・田沼様御屋敷へも稽古に出ているそうな」

「ふうむ……父親の秋山小兵衛は、世に隠れた名手と聞いたことがある」

「ほう……」

「いずれにせよ、酒と女に浸りきっていた笹野新五郎の、この変容ぶりは徒事でないな」

「いかにも」

「おぬしは、このことを、どうして知ったのだ？」

「笹野の屋敷の若党から、拙者の家の若党が耳にしたそうな」

「なるほど。おぬしの屋敷は、笹野のとなり合せであったな」

「さよう」

「もしやすると、笹野新五郎は、われらの仕てのけたことに気づいたのやも知れぬな」

「そう、おもうか？」

「気にかかる……」

「え……？」

「あの夜に、われらが仕てのけたことを、朝倉道場の下男の為八に見られている。しかも、為八は逃げた」

「追うたが、逃げられてしまったな。足の速いやつめ。いまいましいやつだ」

「その為八は、笹野新五郎の気に入られて、何かと世話をやいていたものだ」

「ふむ……ふむ……」

「もしやして、為八が姿をあらわし、笹野へ、あの夜のことを告げたのではあるまいか……？」

「ふうむ……」

「となれば、笹野が、朝倉平太夫先生の敵として、われらを討ち取らんがために、ふたたび、剣を……」

二人は沈黙し、歩みはじめた。

笹野新五郎の姿は、行手に、もう見えなくなっている。

「ともかくも、このことを、加藤先生に知らせねばなるまい」

「申すまでもないことだ」

「万事は、それからだ」

「と、申すのは？」

「笹野新五郎に、あの世へ行ってもらうことよ」

「なれど、早まっては……」

「いずれにせよ、笹野は邪魔なやつだ。為八もそうだが、笹野新五郎だとて、うすうすは、われらの仕てのけた事に気づいているのではあるまいか……」

「そうか、な……？」

二人が編笠をぬいで顔を見せた。

二人とも、三十前後の侍であった。

大川を行く荷舟から、船頭が唄う船唄が風に乗って、のんびりと聞えている。

四

神田の裏猿楽町は、ほとんど武家屋敷で埋まっている。

その一角に、笹野忠左衛門の屋敷があった。

六百石の旗本である忠左衛門は幕府の御小姓頭取をつとめてい、当年五十歳。片番所付の長屋門を構えた屋敷は七百坪ほどもあろうか。

笹野新五郎が、この屋敷へ帰ってから、しばらくして、南隣りの飯塚左内の屋敷へ帰って

来たのは、左内の嫡男・飯塚釜之助である。

釜之助は先刻、浅草橋場の不動院門前で笹野新五郎を見送りながら、怪しげな会話をかわしていた二人の侍のうちのひとりだ。

夕闇が淡くただよう屋敷町の道すじには、ほとんど人通りが絶えていた。

そして、夜が来た。

笹野屋敷内の、自分の居室で、新五郎は読書にふけっている。貝原益軒著の〔諸州巡覧記〕のうち、南遊紀行の下を読んでいるのだ。

儒者として名高い益軒があらわした、この旅行記七巻を、

「おもしろいぞ。読むがいい」

と、新五郎へあたえたのは、亡師・朝倉平太夫である。

新五郎は十二年も、朝倉道場へ通い、剣をまなんだわけだが、その間に、道場で稽古にはげむ門人は十人に満たなかったろう。それほどに流行らぬ道場であった。

新五郎が十歳で入門したとき、平太夫は、ちょうど、いまの新五郎ほどの若さだったのだから、殺害されたときは四十にならなかったことになる。

指の痕さえもみとめられぬほど、きれいに保存された亡師形見の書物を読むたびに、新五郎の脳裡に浮ぶのは、

（朝倉先生が、あのように、たやすく殺害されるとは……）

このことであった。

朝倉平太夫は、厠の外の廊下に倒れてい、七カ所の傷のほとんどが突き傷であったそうな。

厠の中にも血がしぶいていた。

掃出し窓の外から、槍のようなもので、厠に入って用をたしている平太夫を突いたものらしい。

おどろいた平太夫が、廊下へ逃れたところを、待ちかまえていた別の曲者が突き刺し、突きまくったのではないか……。

奉行所の調べでは、

「強盗の仕わざ……」

ということになっている。

妻子もない平太夫が住み暮している三間の部屋が荒されており、所持していた刀剣が三振ほど消えていたし、平太夫の身のまわりを世話していた下男の為八が、その夜から行方知れずになっているところから、

「下男の手引きで、盗賊が入った……」

ことになった。

その他には、何の手がかりもなく、為八は依然、行方不明とあれば、笹野新五郎も、

(半信半疑ながら……)

これを信じるよりほかはないのだ。

侵入した盗賊が何人なのか、それもわからぬ。

平太夫は就寝の前に、かなりの量の飲酒をするところから、酒に酔いつぶれた主人を為八が殺害したのであろうともいわれている。

(まさか……?)

そこがどうも、笹野新五郎には納得できぬ。

為八は、その一年ほど前に、口入屋を通じて雇われた下男で、年齢は三十四、五に見え、陰日向なくはたらくので、朝倉先生にも気に入られたし、新五郎も目をかけて、時折は小遣などをあたえ、

「いつまでも、ここにいて、先生のお世話をたのむぞ」

そういうと、為八は、

「へえ、もう……わしなどは、ほかに行くところもござりません。いつまでも置いていただきます」

「お前、どこの生れだ?」

「上州でござります」

「そうか」

上州のどこでも、そのときの新五郎にとっては、

(どうでもよい)

ことだったが、いまになってみると、もっとくわしく尋いておくのだったと悔まれてならない

ない。逃げた為八が、そのまま生れ故郷へ帰るとはおもえぬが、それにしても、何か手がかりがつかめたのではないか……。

為八を雇った口入屋がいうには、

「相州藤沢の在だと申しました」

これでは、為八の言葉と大分にちがう。

朝倉道場の近くに住む御用聞きの平治郎という者が、それでも藤沢まで探りに行ってくれたけれども、

「まるで、雲をつかむような……」

ものだったそうである。

「ああ……」

書見台の書物から目をはなし、笹野新五郎はためいきを吐いた。

書物を伏せて、新五郎は廊下へ出た。

厠へ行くつもりで廊下を曲ると、父・忠左衛門の居間からの、何やら、たのしげな笑い声が洩れている。

それは、父と義母と、義母が生んだ弟の団欒をものがたっている。

腹ちがいの弟の数馬は、十五歳であった。

いや、腹ちがいだと、いえぬやも知れぬ。

自分が、父・忠左衛門の血を分けた子でないことを、笹野新五郎は六、七年前から、おぼ

ろげながら感じとっていた。

奉公人の、ひそかなささやきも耳にしたし、弟が生れてからの父や義母の態度からも、それが察しられた。

子供のころの新五郎が、生みの母だと信じていた忠左衛門の先妻が病歿してから、もう十八年にもなるのだ。

忠左衛門の先妻は、病弱であった。

幼少のころの新五郎の記憶は、薬くさい病間の臥床に身を横たえ、痩せ細った白い顔に、たよりなげな、やさしい笑顔を自分に向けている〔母〕の、冷たい掌の感触なのである。

厠からもどって来た新五郎の耳へ、またしても、父の居間からの笑い声が聞えた。

まだ五ツ（午後八時）になってはいまい。

奥向きの自室から義母が父の居間へあらわれ、弟をまじえて語り合っているのであった。

以前の新五郎は、こうしたときに、絶望と不安と、得体の知れぬ怒りに身をさいなまれたものだったが、いまはちがってきている。

まるで、亡師の朝倉平太夫が、

（生き返ってきたような……）

新しい剣の師・秋山大治郎を得たからだ。

笹野新五郎が、酒色を絶ち、ふたたび剣を把って闘うべく奮起したのには理由がある。

人ひとり……それも強敵を打ち殪すためにであった。

その強敵は、亡師殺害の一件とは、まったく関係のない男なのである。

新五郎は、すでに、笹野家の跡をつぐことをあきらめていた。あきらめるというより、いまはまったく、そのことに執着をもっていない。

機会を見て、いさぎよく廃嫡のことを自分から申し出て、弟に家督をゆずり、父や義母のひそかなのぞみにそってやるつもりだ。

それから、あの強敵と闘い、これを斬って殪す。自分も、その場で腹を切る決心であった。

だが、その決意も、いまは大分に変化しつつある。

秋山道場での日々が、新五郎を変えたのだ。

剣の道の、底知れぬ深さを、もっともっと、

（きわめつくしたい……）

との欲望が執念に変りつつある。

秋山道場にいると、憎むべき強敵のことも、忘れかけることさえあった。

この屋敷を出る決意は、みじんもゆるがぬ。そのかわり、一介の剣士となって何とか生きぬいて行きたいという希望が生れた。

父の知友で、田沼意次の用人をつとめている生島次郎太夫が、

（秋山先生に引き合せて下されたことを、おれはありがたくおもわねばならぬ）

このことである。

（いまの、この、おれのこころを、殺されたおかかも、よろこんでくれるのではないか……）

笹野新五郎は、父の居間を背にして廊下を曲り、自分の居室へ入った。

小庭に面した障子を開けると、なまあたたかい夜の闇に、むせかえるような新緑のにおいがたちこめている。

「おれも、まだ、若いのだ」

おぼえず、新五郎はつぶやいていた。

障子を閉じ、書見台の前へもどった新五郎は、落ちついた気分で、また〔諸州巡覧記〕を読みはじめた。

五

翌日。

稽古を終えた笹野新五郎が秋山道場を出て、帰途についたころ、飯塚釜之助は、昨日、共に新五郎を見張った侍と二人で、市ケ谷八幡宮の境内にある〔万屋〕という料亭へ入って行った。

釜之助の連れは、ここからも程近い牛込の火之番町に屋敷がある旗本・松平弾正の嫡男・鎌太郎である。

松平鎌太郎は飯塚釜之助と同年の二十八歳で、釜之助同様に妻子もおり、一昨年に隠居し

た父の弾正にかわって松平家の当主となった。千石の旗本ではあるが、その姓を見ても、血すじのよい家柄なのであろう。
　松平屋敷の近くの払方町に、直心影流の道場を構える加藤勇右衛門という剣客がいて、飯塚も松平も、その門人であった。
　万屋は、八幡宮拝殿の東側の崖際にあった。
　深い木立に包まれている奥の座敷へ飯塚と松平が案内されて間もなく、二人の師匠である加藤勇右衛門が万屋へあらわれ、二人が待つ離れ座敷へ通った。
「や、加藤先生……」
「わざわざ、御足労を……」
　飯塚と松平は軽く頭を下げたが、妙に、なれなれしい。
　どっしりとした巨体を座に据えた加藤も、これを怪しまぬが、苦い顔つきになっていることはたしかだ。
　この三人の様子には、到底、剣術の師弟とはおもえぬ何かがにおっている。
　三人は、酒をのみながら、密談にふけった。
「いかが、おもわれますな、先生は……」
「ふうむ……」
「加藤先生……」
「待ちなさい。その、笹野新五郎と申すやつ。われらの仕てのけたことに気づいたと……？」

「そうとしか、おもわれませぬ。われらが成敗した朝倉平太夫の葬式の日に、新五郎は、かならず、師の敵を討つと、誓ったそうでござる」
「飯塚。それを、だれから聞いた？」
「笹野の若党が、私の屋敷の若党に語ったそうで……」
「三年前じゃな？」
「さようでござる」
「その後、笹野新五郎は遊蕩をはじめて、剣を忘れたというのか？」
「さよう」
「何故？」
「新五郎は笹野の嫡男と申しても、実の子ではないらしい。新五郎の父は、後妻が生んだ二男の数馬に家をつがせたくなって、近年は、まるで、継子あつかいにしていると申します」
「それで、自棄気味となり、酒色におぼれたという……？」
「さよう。ところが二カ月ほど前より、ふたたび、浅草橋場の秋山道場へ通いはじめましてな」
「ふうむ……」
「まさに、行方知れずとなっていた朝倉道場の下男があらわれ、新五郎に、われらのことを告げたに相違ありませぬ」

「私も、さようにおもう」
と、松平鎌太郎が、
「加藤先生。かくなれば仕方もない。笹野新五郎を、ひそかに討ち取ってしまいましょう」
「相手にねらわれるより、こなたから機先を制したほうがよい」
「む……」
加藤勇右衛門は厭な顔つきになったが、あきらめたように、
「おぬしたちと、こうした腐れ縁になろうとは、おもわなんだ」
つぶやくようにいい、盃洗の水をあけて、ぬるくなった酒をつぎ入れ、一気に呷った。
三年前の春に……。
この三人の師弟は、王子稲荷前の料亭〔吉野屋〕の奥座敷で大酔したあげく、若い座敷女中を押え込み、これに、いたずらをしかけたことがあった。
加藤勇右衛門は剣術も相当なものだし、教え方もうまいので、道場は、かなり繁昌をしている。
妻子がいないのは、亡き朝倉平太夫と同じだが、加藤は酒をのむと、まるで、
「人がちがった……」
ようになる。
乱暴をはたらくというよりも、ひどく、色好みになってしまう。
飯塚釜之助と松平鎌太郎は、どちらかといえば人のよい師匠の加藤を連れ出しては、酒を

のませる。
飯塚も松平も、家が裕福だから、遊ぶ金には困らないのだ。
料理屋で大酔し、座敷女中にいたずらをしかけたのも、そのときがはじめてではないのである。
三人は、女中を撲りつけて昏倒させ、着ているものを、剝ぎ取りはじめた。
そこへ、朝倉平太夫が飛び込んで来たのだ。
平太夫は、この日。王子権現・稲荷の両社へ参詣をし、吉野屋でおそい昼食をすませ、渡り廊下の突き当りにある厠で用を足して出て来たときに、向うの離れ屋の異様な物音に気がついた。
そっと近寄り、障子の隙間から中をのぞくと、いまや、三人の侍が失神した座敷女中へ怪しからぬまねをしようとしているではないか。
飛び込んだ平太夫が、三人を叱りつけると、醜体を見られた三人はかえっていきり立ち、刀をぬいて平太夫へ立ち向って来た。
来たが、どうにもならぬ。
三人とも、酒に足をとられ、たちまち平太夫に叩きつけられ、松平鎌太郎は髷を切り落されてしまった。
まっ先に逃げたのは、加藤勇右衛門であった。
これでは先生、弟子に頭が上らなくなるのも、当然といわねばなるまい。

しかし、さすがに加藤は、道場を構える剣客だけに、

（ぬぐうても、ぬぐいきれぬ恥辱をうけてしもうた……）

というので、物蔭にかくれて朝倉平太夫が料亭を出るのを待ち、これを尾行して、小石川の朝倉道場をつきとめたのである。

ほんらいならば、正々堂々の果し合いを申し込みたいところだが、その理由はと問われれば、とてもとても、おもてむきにできることではない。

これはどうしても、人知れず、朝倉平太夫を殺してしまわねばならぬと、三人の師弟は決意した。

それから夏になって、殺害決行の当夜が来るまで、飯塚と松平は朝倉道場を内偵した。

飯塚釜之助が、となり屋敷の笹野新五郎が朝倉道場へ通っていることを知ったのも、このときである。

三人が、朝倉平太夫を殺害した夜に、これも偶然、用便に起きて来た下男の為八に目撃されたのは不覚であった。

為八は悲鳴をあげて、逃げ去った。

三人とも布で顔を隠していたから、わかるはずはないとおもうのだが、平太夫を殺して引きあげる途中で、

「あの下男が、われわれの後をつけているのではないか……？」

しきりに、加藤勇右衛門が気にしていた。

こういう神経のはたらきがあるところに、加藤の人柄がよくあらわれている。

以来、飯塚も松平も、その加藤の言葉が頭からはなれないのだ。

「よし!!」

ややあって、加藤勇右衛門が飯塚と松平にいった。

「かくなれば、笹野新五郎を殺害してしまうより、仕方があるまい」

六

それから五日のちの午後であったが……。

秋山道場での稽古を終えた笹野新五郎は、そのまま道場へ居残った。

屋敷を出るときに、

「今日は、帰りが遅くなる」

と、門番の中間にいいおいてあった。

大治郎に、留守をたのまれたのである。

この日の午後から、大治郎と三冬は、そろって田沼意次の屋敷へ招かれていた。

大治郎が田沼邸の稽古日で、朝から出て行ったので、三冬は後から、父・意次の屋敷へ出向くことになった。

田沼意次は、むすめの三冬が大治郎と夫婦になってより、ほとんど、顔を見ていない。

政務が多忙をきわめているらしく、自邸へ帰ってからも書類に目を通したり、密議がおこなわれたりするので、

「このほどは、さすがに、お疲れの御様子でござる」

と、用人・生島次郎太夫が眉をひそめて、大治郎へ洩らしたそうな。

その意次が、

「たまさかには、夫婦そろった顔が見たい」

といい、大治郎夫婦を招いたのである。

折しも飯田粂太郎は、田沼家の下屋敷で当直の日に当っていたので、大治郎も三冬も家を明けて田沼邸へおもむくつもりでいた。

「ここへ入る盗賊もおるまい」

と、大治郎は笑った。

独身のころは、いつも、そうしていたのである。

しかし、笹野新五郎が留守居を申し出た。

「かまわぬのか?」

「先生。私でよろしければ……」

「よろしいも何も、そうしてくれるならありがたい。帰りも、それほどに遅くはなるまい」

「ごゆるりと……」

帰りが遅くなろうが、外泊をしようが、いまの笹野屋敷では、新五郎の行動にいっさい無

関心なのだ。ただ若党や中間の中に、新五郎へ同情を寄せる者が二、三いるだけであった。

「では笹野どの。後を、たのみます」

いいおいて、三冬が出て行ったあと、笹野新五郎は道場の掃除をはじめた。

夕暮れとなった。

新五郎は、まだ、掃除をつづけている。

天井も羽目も床板も、内も外も丹念に、隅から隅まで、

「みがいてみがいて、みがきぬく……」

ような掃除の仕方なのである。

そのころ……。

久しぶりで秋山小兵衛が、おはるをつれ、橋場の料亭〔不二楼〕へあらわれている。

「これは大先生。ようこそ……」

亭主の与兵衛夫婦が大よろこびで出迎えた。

「いい陽気になったのう」

「これから、すぐにまた、暑くなります」

「世の中は、うまく行かぬようにできているわえ」

「今日は、また、おそろいで……」

「たまには、台所からはなれたいと駄々をこねるのじゃ」

と、見返る小兵衛に、おはるが、

「あの、若先生の御夫婦にも、来てもらったらどうだね？」
「そうじゃな、そうしようか」
「それがいいよう、先生」
すると与兵衛が、
「では、こちらから使いを走らせましょう」
「すまぬな」
「何の……目と鼻の先でございますよ」
不二楼の若い者が、すぐに大治郎の道場へ飛んで行き、すぐに引き返してきた。
「お二人とも、お留守だそうでございますよ」
と、与兵衛が小兵衛の座敷へ知らせに来て、
「若い御門人がひとり、井戸端で水を浴びていたそうでございます。いえ、飯田粂太郎さんではないお人だそうで……」
「あ……それなら、笹野新五郎という新しい門人じゃろう」
「それはそれは、若先生のところも、いよいよ御繁昌でございますな」
「何をいわっしゃる。たった一人の客で、商売がなろうかえ」
「これは、どうも……いえ、あの、お二人そろって、田沼様御屋敷へお出かけになったということで……」
「おお、さようか。それならばよい。では、うまいものをどしどし出してもらおうかな」

「承知いたしました」
小兵衛は、大治郎の道場へ立ち寄った折に、笹野新五郎が型をつかっているところを、二度ほど、見たことがある。
「いかがでしょうか？」
そのとき、大治郎が尋くと、
「先ず、ものになろうよ」
小兵衛が、さも嬉しげな笑顔を見せ、
「よい弟子が来たのう」
と、いったものである。
夕闇が、夜の闇に変りつつあった。
ちょうど、そのころ……。
不二楼からも秋山道場からも遠くない、山谷堀の小ぢんまりとした料亭〔網彦〕の奥座敷に、加藤勇右衛門と飯塚・松平の三人を見出すことができる。
飯塚と松平は、いま、秋山道場の様子をうかがい、もどって来たばかりだ。
この三日間というもの、三人は笹野新五郎の身辺につきまとい、
「隙あらば……」
襲いかかり、殺害してしまおうとしているのだが、なかなかに機会がつかめぬ。
朝の五ツ（八時）に裏猿楽町の屋敷を出て秋山道場へ行き、午後の八ツ（二時）には帰邸

している新五郎を、まさか、白昼の路上で襲うわけにはまいらぬ。

三人は苛々(いらいら)しながら、新五郎が道場の帰りに、どこかへ立ち寄り、

「酒でものむか、女でも買うか……」

その機会をねらっていたのだ。

ところが今日は、日暮れになっても、新五郎が道場にいて留守居をつとめているらしい。

「何やら、橋場(はしば)の不二楼と申す料亭から、使いの男があらわれ、すぐに立ち帰りましたが……」

「加藤先生。いかがなさる?」

飯塚と松平の血相が変っていた。

「道場の主(あるじ)夫婦は、まだ、立ちもどらぬのだな?」

「さよう」

「ふうむ……」

「先生。いまをのがしてはなりませんぞ」

「よし、やろう!!」

「道場へ打ち込みますか……」

「うむ!!」

加藤勇右衛門が、決然と、うなずいた。

七

三人が、料亭・網彦を出るまでには、しばらくの間があった。

この三日の間に、ひそかに見ておいた秋山道場へ斬(き)り込むについて、作戦を練ったのであろう。

飯塚釜之助にいわせると、

「笹野新五郎は、かなりの遣い手と見てよろしい」

とのことだ。

それだけに加藤勇右衛門も、気をひきしめている。

なにしろ、新五郎の亡師・朝倉平太夫から、王子の料亭で、手もなくあしらわれているのだ。

笹野新五郎は、その朝倉の高弟だったという。

(いささかの油断もならぬ)

と、三人は三人なりに意を決していた。

網彦を出た三人は、山谷堀をさかのぼり、浅草新鳥越町(しんとりごえちょう)から左へ折れ、山谷へ通じる街路を歩みはじめた。

山谷から、玉姫稲荷(たまひめいなり)の境内へ入り、これを突きぬけると、見わたすかぎりの田圃(たんぼ)と木立が

ひろがる。

ここで三人は、用意の布を出し、顔をおおった。

石浜神明宮と真崎稲荷社の西側の、小高い丘を目ざして、三人は足を速めた。

丘の上の一角に、秋山大治郎の道場があり、そこには、笹野新五郎が一人きりで留守居をしているのだ。

松平鎌太郎は、丘の下まで来ると、用意の包みをひらき、半弓を取り出し、弦を張った。

剣術よりも、むしろ、弓が得意の松平である。

それだけ、松平鎌太郎は自信まんまんというところであった。

加藤勇右衛門も、ともあれ短時間のうちに、完全に、笹野新五郎の息の根をとめるためには、弓を使うことも、

「やむを得まい」

と、いった。

「松平。仕度はよいか」

「よろしい」

三人は木々の間を縫って、丘の斜面をのぼりはじめた。

「灯りを消せ」

加藤が、飯塚にささやいた。

彼方に、秋山道場から洩れる灯火が目に入ったからだ。

提灯の灯りを吹き消した飯塚釜之助が、

「見てまいる」

いうや、木立からすべり出て行った。

松平は、肩から小脇へ掛けまわした矢筒から二筋の矢を引きぬき、そのうち一筋を早くも弦へ番えた。

師匠の加藤も、これを見るや、長刀をぬきはなった。

両人とも、いささか気負い立っているようだ。

「あ、先生……」

「む……?」

「飯塚が、もどって来ました」

「うむ……」

飯塚釜之助が木立の中へ、あわただしく入って来て、

「いかぬ、先生……」

「何と……?」

「か、帰って来ています、秋山夫婦が……」

「ふうむ……意外に早く帰ったのだな」

「何、それならそれでよい」

と、松平鎌太郎が、

「ならば、笹野新五郎が間もなく道場を出て来よう。そこを一気に……」
「そ、そうだ。そうだな、よし」
「先生。ともかくも、彼奴めが橋場へ出ぬうちに……場所は、いくらでもあります」
「よし。急げ」
三人は、丘を下って行った。
秋山道場では……。
笹野新五郎が、大治郎と三冬に挨拶をし、辞去しようとしていた。
「さぞ、退屈をなされたでしょう」
三冬がそういうと、新五郎は、
「いえ……道場の掃除をいたしておりましたら、たちまちに日が暮れてしまいました」
たのしげに、こたえた。
「それは、御苦労をかけたな」
「いえ……では、先生。これにて……」
「さようか。では、また明朝に」
「はい」
間もなく笹野新五郎は、三冬が火を点じてくれた提灯を、
「拝借いたします」

受け取って、秋山道場を出た。
畑道の物蔭に身を屈めていた飯塚釜之助は、秋山道場から、ぽつりとあらわれた提灯の灯りがこちらへ向って来るのを見て、
(来た!!)
身を転じて、畑道を走り下って行く。
新五郎を見送った秋山大治郎は、そのまま道場へ入り、
「三冬。来てみなさい。どこもかしこも磨き立てられて、ぴかぴか光っている」
うれしげに、いった。

八

(そうだ。明日は道場の帰りに、おたかの墓詣りをしよう……)
ゆっくりと畑道を下って行きながら、笹野新五郎は、ふと、おもいついた。
おたかは、築地の明石橋の西詰にある船宿〔三吉屋〕の座敷女中をしていた女だ。
自分の出生の秘密と、父と義母と義弟と自分との確執に悩みながらも、師の朝倉平太夫が生きていたころは、剣術一筋に打ち込み、何も彼も忘れることができた。
しかし、平太夫が殺害され、道場が閉ざされたのちの新五郎は、
「たまりかねた……」

ように、酒色へおぼれこんだのであった。
三吉屋は、笹野家がむかしから使っていた船宿である。
遊蕩をはじめた新五郎の根城が、この三吉屋になって、ここへ泊り込んだきり、何日も屋敷へ帰らぬことがめずらしくなかった。
遊びの金の大半は、三吉屋のあるじ・伊兵衛が出してくれたものである。いまにしておもえば、よく、そこまで自分の面倒を見てくれたと、つくづくおもわざるを得ないのだ。
新五郎は、おたかを数度、抱いた。
三吉屋で束の間に抱いたこともあるし、上野の不忍池のほとりの出合茶屋で、ゆっくりと忍び逢ったこともある。
おたかは三十を一つか二つ出ていたらしい。
死に別れた亭主との間に生れた五つになる男の子を実家の父親へあずけ、三吉屋ではたらいていた。
肌は浅ぐろかったが、肌理がこまやかで、あたたかかった。乳房が大きくて、その中に顔を埋めている新五郎のえりくびのあたりから背中へかけて、おたかの手がやさしく撫でおろしてくれると、新五郎の胸の内も、ずいぶんと鎮まったものである。
その、おたかが、突然に死んだ。
今年の二月の末のことだ。
二階の廊下で酒肴を運んでいたおたかが何かにつまずき、盆を落した。

折しも、座敷から出て来た二人連れの侍の袴へ酒が飛び散った。
「無礼者!!」
叫ぶや、侍がおたかを突き飛ばした。
うしろが階段であった。
おたかは真逆様に落ち、頭を強打し、即死してしまったのだ。
ところが、この、おたかの死は、
「有耶無耶……」
に、もみ消されてしまったのである。
おたかを突き飛ばした侍は、近くの木挽町七丁目に屋敷がある豊前中津十万石奥平の武具奉行をつとめ、殿さまの剣術指南役をも兼ねている小出源蔵だ。
三吉屋は、奥平家の家臣たちが、大層にひいきにしている船宿だけに、あるじも強いことがいえず、大名家の圧力と、金ずくで、まるめこまれて……というよりは、泣き寝入りをさせられてしまったらしい。
(おのれ、何ということを……)
こころが荒んでいただけに、笹野新五郎は、
(それならば、よし。おれが人知れず、おたかを殺した小出源蔵を斬って捨ててやる!!)
と、決意をした。
母親にこのような死にざまをされた、おたかの子のことが、新五郎の脳裡から消えなかっ

た。

うわさに聞くと、小出源蔵は相当の剣士らしい。

そこで先ず、鈍りきった自分の体を鍛え直すことからはじめようと、おもい立ったのである。

父の古い友人である田沼家の用人・生島次郎太夫に、おたかの復讐のことは隠して、相談をもちかけると、

「それは、何よりじゃ」

生島用人は、目をかがやかせ、

「ようやく、夢からさめてくれたか。よし、よし。わしが、よき師匠に引き合せよう」

と、秋山大治郎の稽古ぶりを、そっと見せてくれたのであった。

(だが、おたか。おれは秋山先生にめぐり合えて、やはり、剣の道を歩むことにした。そのかわり、陰ながら、お前の子のことは行末目をはなさず、ちからになるつもりだ。安心をしてくれ)

丘を下りきった新五郎は、下の畑道を南へすすむ。

前方の木立の間から、橋場の町の灯火が星のようにのぞまれた。

闇を切り裂いて疾って来た一条の矢が、笹野新五郎の左の肩へ突き立ったのは、このときである。

「う……」

衝撃の中にも、すぐさま提灯を投げ捨て、腰を沈め、新五郎が腰の大刀を抜きはらうことができたのは、まさに、この二カ月の鍛練が物をいったといえよう。

畑の中に伏せていた飯塚釜之助が、すかさず、

「たあっ!!」

新五郎へ斬りつけたが、一瞬、おそい。

これほどに、矢を受けた新五郎の体勢がくずれなかったことを、飯塚は予想していたのだろうか……。

「うぬ!!」

新五郎にかわされて、飯塚は闇に泳いだ。

そこへ、加藤勇右衛門が木蔭から走り出て、

新五郎の胴を切りはらった。

「やあっ!!」

飛び退いて、大刀を八双に構えた新五郎の真向から、

猛然と、加藤が打ち込んだ。

「む!!」

受けとめた新五郎の刀を、ぐいぐいと押しまくりつつ、

「松平、松平!!」

加藤が叫んだ。

近寄って来て、二の矢を射込めといったのである。
松平鎌太郎の悲鳴が起ったのは、このときであった。
二の矢を番え、木蔭から躍り出ようとした松平のうしろから、何者かが、突然に、
「おい、何をしている?」
声をかけてきた。
ぎょっとして、振り向いた松平の左腕がすぱっと切断された。
切ったのは、秋山小兵衛であった。
小兵衛は、不二楼を出て、おはるを橋場の船着場へ先行させ、不二楼の料理を詰めた二重の折箱を大治郎のもとへとどけてやるつもりで、畑道を歩んでいると、すぐ近くで、弓弦が鳴ったのである。
左腕を切り落され、のたうちまわる松平鎌太郎を見返りもせず、小兵衛は道へ出て行き、左手の提灯を突きつけ、
「何をしている?」
と、よびかけた。
「あ……大先生……」
加藤の大刀を支えつつ、笹野新五郎がこたえた。
「や……お前は、大治郎の新弟子ではないか」
「はい」

飯塚釜之助は、小兵衛があらわれるや、一散に逃げ走っていた。
「どうした?」
「闇討ちのようです」
「ふうん、そうかえ。卑怯なやつどもだ。かまわぬから、やっつけろ」
「はい」
新五郎は勇気百倍となった。
それに引きかえ、加藤は狼狽の極に達した。
「えい!!」
新五郎に突き放され、飛び下った加藤は、ふたたび斬りつける闘志も失せ、背を返して逃げようとするのへ、走りかかった新五郎が峰打ちに加藤の急所を強打した。
「むう……」
大刀を落し、加藤勇右衛門は畑道へくずれ倒れた。



それから間もなく、例年より早目に、江戸は梅雨に入った。
その五月雨がふりけむる或る日の昼下りに、本所の小梅にある西光寺という小さな寺の墓地の、小さな墓の前に佇む笹野新五郎を見出すことができる。

この墓は、おたかの墓であった。

三吉屋のあるじが、奥平家から出た金で建てたものだ。

左肩の傷が、まだ癒えていない新五郎だが、明日からは秋山道場へ出るつもりでいる。

（おたか。おれは明日から、屋敷を出て、自由な体になる。笹野の家は義弟にゆずる。なんのみれんもない。父も義母も、よろこびを隠して、手のひらを返したように、おれのことをよくしてくれる。おれに大枚の金をくれるそうな。その金をもらっておくことにした。秋山の大先生が、こだわりなく、もらっておけとおっしゃる。それでな、おれは、その金を、お前の子が行末、店でも持つようになったとき、役立ててやるつもりだ。どうか、成仏してくれ）

おたかの子は、亀戸で百姓をしている祖父の手もとに暮している。

新五郎は、これから、そこを訪ねるつもりであった。

飯塚・松平・加藤の三人は、いま、お上の取調べを受けている。

先ず、加藤勇右衛門がすべてを白状におよんだので、他の二人は、いいぬけの仕様もなかった。

飯塚と松平は、家が歴とした旗本だけに、

「今度は、ただではすむまいよ」

と、秋山の大先生がおっしゃった。

朝倉平太夫の下男・為八の行方は、依然、わからぬ。

秋山小兵衛は、

「その為八という男も、お上の調べを受けるとまずいのではないかな。朝倉道場へ住み込む前に、きっと為八は、よくないことの二つや三つは仕てのけているのであろうよ。なればこそ、名乗り出ぬのだ」

と、いった。

（だが、あの三人が、とんだ勘ちがいをしたために、おれは、朝倉先生の御無念をはらすことができた。これも、おたか。お前があの世から、おれをたすけてくれたのやも知れぬなあ……）

雨に打たれながら、新五郎が墓前へささげた線香の束の火は、まだ消えていない。

まだ独身だったときの生島次郎太夫と或る料理茶屋の座敷女中との間に生れた子が、自分だということを、まだ新五郎は知らされていない。

そのころの次郎太夫は若かったし、主・田沼意次に見出されて用人に登用されてはいなかった。

次郎太夫に相談をもちかけられ、病身の妻に子が生れぬことを、医師から宣告された笹野忠左衛門が、

「よし。拙者の子にしよう」

むしろ、すすんで新五郎をもらいうけた事情も知らぬ。

そして、また……。

船宿・三吉屋のあるじへ、ひそかに、新五郎の遊蕩の金をあずけておいてくれたのが生島次郎太夫だとは、

「夢にも、おもわぬこと……」

であったろう。

いずれにせよ、父の先妻が、まだ生きていたなら、新五郎の今日は、もっと別のところに在ったはずだ。

おたかの墓の前をはなれた笹野新五郎は、墓のうしろの木立の中に、白い五弁の可憐な花が咲き残っているのを見た。

（さびしげな花だな……）

しばらく、その花を見つめていた新五郎は、それが柚の花だとは知らぬままに、傘をひらき、しずかに墓地を出て行った。

大江戸ゆばり組

ここ四日ほどは、梅雨晴れである。

長雨の泥濘と湿気に、町も家も人も、おはるのいいぐさではないが、

「腐れかかって、気ちがいになりそうな……」

明け暮れであった。

それが、からりと晴れて、目にしみるような青空に、むくむくと白い雲がわきあがってくるのを見ただけでも、人びとは元気を取りもどした。

だが、それも昨日までのことになるらしい。

今朝になると、空は鉛色に重くたれ下ってきて、湿りをふくんだ微風がただよい、

「また、梅雨がもどって来やがる……」

と、雨天には仕事にならぬ人びとを嘆かせた。

その日の夜ふけのことだが……。

「梅雨などは、われらに、いささかの関わり合いもない」

とでもいいたげな顔をしている中年の武士がひとり、三十間堀川に懸る木挽橋を西から東へわたりかけていた。

この武士は、豊前中津十万石・奥平大膳太夫昌男の家臣で、江戸藩邸の武具奉行をつとめる小出源蔵である。

小出源蔵は、築地の明石橋にある船宿〔三吉屋〕の座敷女中おたかの、わずかな粗相をとがめ、おたかを二階の階段から下へ突き飛ばした。

このため、おたかは頭部を強打して即死し、三吉屋は奥平家の金ずくのもみ消しに合って沈黙した。

子持ちの寡婦だったおたかと、ねんごろの間柄だった笹野新五郎は、一時、小出源蔵を密かに討ち取ろうと決意したものだが、いまは、秋山大治郎の道場へ通いつめ、剣の道ひとすじに没頭している。

小出源蔵は、笹野新五郎の存在なぞ、夢にも知らぬ。

小出は小野派一刀流の達人だとかで、殿さまの指南役を兼ねているそうな。

今夜は、諸家の家来で、剣士としても知られた人びとの宴会が数寄屋河岸の料亭〔吉浦屋〕でおこなわれ、小出も列席した。

宴が果てて、小出は、いま、木挽町七丁目の奥平屋敷へ帰ろうとしている。

さすがに堂々たる体軀。頰骨が張った顔貌も厳めしく、長く高い鼻は小出源蔵の傲慢な性格そのものといってよい。

このあたりは、いまの銀座六丁目にあたる。

夜ふけのこととて、人影は絶えていた。

小出は、妙な声で謡曲のようなものを口遊みつつ、その名のごとく三十間の川巾に懸る木挽橋へさしかかった。

今夜は供もつれぬ小出源蔵の右手の提灯のあかりが、向うから橋をわたって来る小さな人影を、ぼんやりと浮きあがらせた。

(少年か……)

と、小出は見た。

川を吹きぬけてくる風が酔って火照った顔にこころよい。

小出と、少年のような人影は木挽橋の中ほどで行きちがいかけた。

近寄って来る相手を気にもとめずにいた小出だが、このとき、ちらりと見やって、

(や……こどもではない……)

と、おもった。

左手をうしろにまわし、うつむきかげんに右手の提灯のあかりが照らす橋板を見て、とぼとぼと歩む小男は、老人のようにも見える。

小男は、黒い絹の頭巾をすっぽりとかぶっている。

いまにも降り出しそうな夜空だとはいえ、夏のことなのだ。よほど何かのわけがなくては頭巾をかぶるわけもない。

（はて……妙なやつ……）

おもいはしたが悠然と、その小男を左に見やった視線を、小出が正面へもどした、その瞬間であった。

行きちがったものとばかりおもっていた小男が、音もなく、小出源蔵の左側面へ出て来て、小出の目の前をすっと右側へ飛び抜けた。

そのとき、小男の手に何かが煌めいた。

「ぶ……」

ぶれい者と怒鳴りかけた小出源蔵の声が、異様な叫びに変った。

すぱっと、小出の鼻が切り落されていたのである。

「ぬ!!」

そこは一流の剣士だけに、提灯を投げ捨て飛び退りざまに大刀を抜きはらったが、曲者の姿は消えていた。

「う、うう……」

激痛と、ほとばしる血に、小出は惑乱した。

（ま、魔物か……?）

いや、居た。

小男は、何と橋の欄干の上をつたわり、西詰へ向って行くではないか。

「く、曲者!!」

喚きざま、小男の背後へ走り寄った小出が、欄干をつたわって行く小男の脚を切りはらった。

小出の一刀は、むなしく闇を切り裂いたのみである。

「ああっ……」

どこをどうされたのだか、さっぱりわからぬまま、小出源蔵は三十間堀川へ真逆様に落ち込んで行った。

「ばかめ……」

低くいった小男が頭巾を除った。

秋山小兵衛なのである。

「笹野新五郎に代って、わしがしてやった。一命が助かっただけでもしあわせとおもえ」

暗い川面へ、つぶやきを投げてから、小兵衛の姿は木挽橋を西へわたり、消え去った。

到頭、雨が落ちてきた。

小出源蔵が死物狂いで、川を泳ぎはじめた。

一

その日。

秋山小兵衛は、おはるを連れて深川へ出かけた。

梅雨のはれ間に、小兵衛は深川の富岡八幡宮へ参詣に出かけるのが例年のならわしとなってしまったようだ。

「別に理由はない。梅雨のはれ間の深川が好きだからさ」

と、小兵衛はいう。

そのころの深川という土地は、江戸の〔水郷〕といってよいほどの風趣があり、

「江戸であって、江戸ではない……」

一種の別天地だったのである。

深川は江戸湾の海にのぞみ、町々を堀川が縦横にめぐり、舟と人と、道と川とが一体になった明け暮れが、期せずして詩情を生むことになる。

ある書物の著者が、

「江戸時代の深川は、イタリアのベネチアに匹敵する美しい水郷であった」

と、のべているのも当然であったろう。

「まあ、今日いっぱいは保つだろうよ」

昼近くなって、庭から空を見上げていた秋山小兵衛が、

「おはる。八幡さまへでも行ってみようか……」

「まあ、うれしいよう」

「では、舟の仕度をしておくれ」

「あい、あい」

小兵衛が、木挽橋の上で小出源蔵の鼻を切り落したのは七日前のことになる。

あの夜ふけから降り出した雨は、昨日の昼すぎまで降りつづいたのである。

「まだ、道がぬかるんでいよう。下駄の仕度を、な」

「もう、舟へ入れましたよう」

「お、そうか、そうか」

隠宅の庭に設けられた舟着場から、二人を乗せた小舟が大川へすべり出て行った。

おはるも、久しぶりに〔女船頭〕をつとめるのが、たのしくて仕方がないらしい。

「先生。いつものように、万年橋へ着けますかね?」

「うむ。それがよいだろう」

大川が、新大橋の先から東へながれ入る小名木川の川口に架っているのが万年橋だ。

この橋の北詰に、柾木稲荷の社があり、小さな境内だがわら屋根の茶店もあり、ちょうど、その下が〔舟着き〕になっている。

自分の小舟で深川へ来るとき、小兵衛はいつも、柾木稲荷の茶店で一服し、こころづけを

置き、

「舟をたのむよ」

茶店の老爺にいい、あとは徒歩で富岡八幡宮へ向うのが例であった。

この日も例にもれない。

八幡宮の参詣をすませたとき、

「どうじゃ、おはる。洲崎へ行ってみようか？」

と、小兵衛が、

「又六が店を出しているやも知れぬぞ」

「あれ、ほんとうだ。きっと、出ていますよ、又六さん……」

かの〔悪い虫〕事件で、秋山父子から十日間の修行をうけてから、めっきりと性根がすわった鰻売りの若者又六は、いまも、洲崎弁天の橋のたもとで、鰻の辻売りをしている。

小兵衛とおはるは、洲崎弁天の社へ詣ってから、北門を出たところにある〔槌屋〕という茶店へ入った。

「さあ、こちらへ……」

と、小兵衛の顔を見おぼえている茶店の老婆が、

「おや、まあ……お久しぶりでございますねえ」

土間の右側の小座敷へ案内をしてくれた。

槌屋は、わら屋根の風雅な茶店で、老夫婦と小女ひとりで客をもてなし、酒も出してくれる。

土間の入れ込みの席から、外の腰掛けにまで、客があふれていた。

小兵衛は酒をたのみ、おはるはだんごをもらった。

「ほう……いるな、又六」

小座敷の窓から、向うの江島橋の袂に屋台を出し、一所懸命に鰻を焼いている又六の姿が見えた。

すぐ近くの木場にはたらく人足らしいのが三人ほど、焼きたての鰻を頬張り、冷酒をのんでいる。

「又六さんに、声をかけてきましょうかね？」

「ま、急ぐにはおよぶまい」

江戸湾の汐の香が、小座敷の中にも濃密にただよっていた。

洲崎弁天の由来は、元禄の時代に、幕府が富岡八幡宮より東面の砂浜を埋めたてた折に、弘法大師の作だとつたえられる弁財天女の像を〔本尊〕となし、社殿を建立したのがはじまりであった。

このあたりは、春になると汐干狩に来る人びとでいっぱいになる。

「こりゃあ、また、二日三日は保つかも知れぬな」

と、小兵衛が、窓から空を見上げていった。

風に、雲がうごきはじめ、西の空が明るんできたようだ。

やがて、小兵衛とおはるは槌屋を出て、又六の辻売りの屋台へ近づいて行った。

「おい、又六」

「あれ、大先生……」

「繁昌しているようじゃな」

「おかげさんで、へい。ずいぶんと、ごぶさたをしてしまいまして、相すみません」

顔も体もまるまるとしていて、小兵衛が「二つ合わせると、まるで正月の供え餅じゃ」といったこともある又六だが、ちかごろは体軀が引きしまってきて、むしろ、精悍な感じがする。

だが、張り出した額の下の円らな両眼には、もち前の愛嬌と純心が遺憾なくあらわれている又六であった。

「又六。手空きになったら、ちょいと来ぬか。鮒芳の二階にいるからのう」

「へい、すぐにうかがいます。そうだ、大先生のお酒の肴に、おもしろいはなしがあるんですよ」

「そうか、たのしみじゃな」

「剣術の名人が、化け物に鼻をちょん切られたんですと」

秋山小兵衛は「ふうん……」と鼻を鳴らし、いささか、おどろいたような顔つきになったものである。

二

「……大先生も御存じのように、おらは鰻の辻売りしてる、そのほかに、深川の漁師から直に仕入れた貝や魚を売って歩いてます」

と、〔鮒芳〕の二階座敷へ後からやって来た又六が、いまが旬の鶏魚の刺身で飯を四杯も食べたのちに、酒の肴のおもしろいはなしというのを、しゃべりはじめた。

「おらが住んでる島田町の近くの入船町の、ほれ、汐見橋の南の川沿いに、川野玉栄という独者の絵師の先生が住んでいなすって、その先生が、おらをひいきにしてくれるですよ、へい。そいでね、昨日の日暮れ方に、たのまれていた鰹を持って行くと、そこに、女がいたですよ。玉栄先生のとなりに、三月ほど前から住みついている女だというですよ」

その女は、名をおきんといい、小女と二人暮しだというと、これは、まさに妾宅といってよい。

深川には、こうした囲いものが住む小さな家が、ちかごろは増えるばかりだという。

絵師の川野玉栄は、五十五、六歳の老人で、円満洒脱な人物らしく、土地の人びとにもしたわれているそうな。

そういう人柄だものだから、となりへ住みついたおきんという女も、すっかり気をゆるして、短い間に惣菜をとどけたり、退屈しのぎの世間ばなしにやって来るらしい。

そのとき……。

又六が、玉栄先生の台所で、鰹を刺身につくっていると、すぐ向うの先生の画室で、おきんがしきりに愚痴をいいはじめた。

「ねえ、先生ったら……まあ、聞いておくんなさいな。うちの旦那はね、豊前の中津の十万石の殿さまの御家来で、剣術をね、殿さまに教えていなさるんですとさ」

「おお、道理で、見るからに強そうなお人じゃ」

「先生。知っていなすったの？」

「ちょいと、お前さんの家へ入るところをな……」

「それがさ。そんなに強い人が、つい此の間の夜に、三十間堀の木挽橋を通りかかったら、川の中から河童の化け物が飛び出して来て、うちの旦那の鼻をちょん切ってしまったんですとさ」

「へへえ、河童が三十間堀に棲んでいたとは、初耳じゃ」

「だって、ほんとうなんだそうですよう」

「ふうん……おもしろいな」

「それどころじゃありませんよ。そんなことになってしまったので、これからは、身をつつしんで、殿さまの御屋敷から外へ出られないというので、うちの旦那へ奉公をしている老爺さんが来て、これまでのことは、なかったことにしてくれと、たった三両ばかりで、あたしはお払い物になってしまったんですよう」

「そりゃまた、ひどいはなしだな」

「先生。ねえ、先生……」

「うむ？」

「あたしを囲っておくんなさいな」

「冗談をいいなさるな。わしはもう、役に立たぬよ」

「そうかしら……ねえ、あたし、先生なら、月に一両でもいいのだけれど……」

「とんでもない、とんでもない」

「ああ……」

と、おきんが、ためいきを吐いて、

「それじゃあ仕方もない。嫌なんだけれど、昨夜来たはなしに乗ってしまおうかねえ」

「それは何かね。また、新しい旦那のはなしかね？」

「ええ……」

「すぐに、口があるものなのだな」

「ええ、いまはね。囲い者の口入れをする人がずいぶんいるんですよ」

「なるほど、天下泰平の世の中じゃなあ。して、今度の旦那は、どんなお人なのじゃ？」

「それが先生。なんでも牛込の方に御屋敷があるという御大身の……ええ、そうそう、本多何とかの守さまの御用人で、年齢が五十二ですとさ」

おきんが川野玉栄に、そういったという。

「牛込の、本多何とかの守と、その女がいうていたのは、ほんとうだな？」
と、小兵衛が又六に念を押した。
「へい。そういってました」
「ふうん……」
「どうかしたですか？」
「いや、別に……」
小兵衛は、そ知らぬ顔で、
「はなしは、それだけかえ？」
「へい。いえ、あの……」
「どうした？」
「その女が、こういってました。今度の旦那が気に喰わなかったときは、たった一晩だけで手を切ってやると……」
「女のほうからかえ？」
「へい。玉栄先生に、そういってました。なんでも、手付けの金だけもらっておいて、一晩だけで手を切ってしまう方法があるんですと」
「ふうん……」
「玉栄先生も、そりゃ、どんな方法なんだと、尋いてましたです」
すると、おきんが、さも可笑しげに笑い出して、

「それがね、先生。あたしも今度はじめて教えてもらったんですよう。そりゃもう、いくら相手が玉栄先生でも、こればっかりは、ちょいと口には出せませんよう」
と、いったそうな。
「なるほど、お前のはなしは、まことにおもしろかった。酒の肴にしては、もったいないほどおもしろかったぞ」
「そんなら、よかった……」
「ほれ。よいはなしを聞かせてくれたごほうびじゃ」
「あれ……こんなにいただいたら困るですよ」
「ま、いいから取っておけ、取っておけ」
やがて、秋山小兵衛とおはるは鮒芳を出て、又六と別れた。
それから万年橋へもどり、小舟を大川へ漕ぎ出してから、
「これ、おはる……」
「あい？」
「さっきのはなし、な……」
「え……あの、いやらしい囲い者のことかね？」
「うむ。そのな、今度の新しい旦那になるという……」
「あい、あい」
「牛込の本多何とかの守というなら、五千石の大身旗本・本多河内守様にちがいない。その

用人というならば、富山治五郎じゃ」
「知っていなさるのかね?」
「わしの古い友だちだよ」
「あれ、まあ……」
「ほれ、あぶない。向うの舟に打つかるぞ」
「大丈夫ですよう」
「ときに、おはる……」
「あい?」
「どうじゃ、このわしが河童の化け物に見えるかえ?」
にやりと笑った小兵衛の顔をまじまじと見つめていたおはるが、はっと気づいて、
「あれ……また、大先生。いたずらをしなすったね」
小兵衛は微かに笑って、大川の川面へ目を落した。

三

本多河内守の屋敷は、牛込神楽坂にある。その本多家の用人をつとめる富山治五郎を秋山小兵衛が何故知っているかというと、むかし、小兵衛が四谷の仲町に自分の道場を構えていたころ、その評判を何処からか耳に入れたらしく、本多河内守が、家来を五名ほど、入門させてよこしたのだ。

その使いに見えたのが、富山治五郎であった。
五千石の大身の用人とあれば、小さな大名の家老同然なわけで、富山治五郎は二百五十俵の扶持をもらっていた。
当時は三十五、六歳であったろう。小兵衛と背丈がほとんど同じで……つまり小男で色が黒く痩せこけた、まことに見栄えのせぬ風采で、これが大身の御用人さまだとは、とてもおもえなかったものだ。
「それがしは、母によう似ておりましてな。さよう、男子は生みの母の体質を受けつぎ、女子は父親に似ると申します。私の父は大兵の、まことに立派な面がまえをしておりましたので、用人の役目にも充分押しがききましたが……いや、私なぞは、先生がごらんのごとく、まことに貧弱なもちものなので、奥向きの女中どもにまで侮られてしまいましてな」
などと、治五郎は苦笑まじりに、何事にも気取りや飾りがなく小兵衛へ打ち明けるものだから、
「まことに、善いお人じゃ」
と、小兵衛も治五郎の人柄を好み、二人は親交を深めて、暇があると治五郎があらわれ、道場の稽古を見たり、小兵衛と碁を囲んだりしたものだ。
小兵衛が四谷の道場をたたみ、鐘ケ淵へ隠棲してのちは、治五郎との交誼が絶えた。
折から、主の本多河内守顕孝が御書院御番頭という役目に任じたので、用人の富山治五郎

も何かといそがしくなったこともあるし、当初は小兵衛も、それまでの知人を避ける心境だったからでもある。

(すると、治五郎殿は、さよう……五十一、二歳になられているはず……)

であった。

その富山治五郎が、河童に鼻を切られた小出源蔵の妾おきんを、

「囲い者にする……」

というのだ。

(これだから、世の中はおもしろい……)

鐘ケ淵の家へ帰って来てからも、小兵衛は笑いがとまらない。

「いやですよう。いつまで、おもい出し笑いをしていなさる」

「だって、お前……」

「今度は、その御用人さまの鼻をちょん切っておしまいなさるのですかね?」

「なあに、治五郎どんの鼻は至って低いから、わしの刃先もとどくまいよ」

「あれまあ、ほんとうにおやりなさるのかね?」

「冗談じゃあない。あの御用人どのは、わしの友だちだった人じゃもの」

「むかしから、そんなに女狂いをしていたのかね?」

「治五郎殿がか?」

「あい」

「いいや。女にも酒にも、とんと縁のない人でな。大好物は神楽坂上の大黒屋という菓子屋で売っているきせ綿饅頭に胃の薬だったわえ」

「まあ、いやだよう」

「ところが奴さん。十何年もたつと、別の饅頭が好きになったらしいのう」

「また、そんなことをいいなさる。おやめなさいよう」

「あは、はは……」

すっかり晴れあがった夏の夕暮れになった。

台所の、おはるの庖丁の音を聞きながら、暮れ残る庭先を見つめて、

(はて、どうしたものか……?)

思案にふけった。

又六が耳にはさんだところによると、おきんは富山治五郎から手付けの金を受け取った上で、一夜のうちに手を切ってしまう方法をめぐらしているらしい。

(それもよい。治五郎殿の目がさめるであろうしな……)

それにしても、その方法というのが気にかかる。

ちかごろは、女を餌にして手荒な悪事をする無頼の者どもが多くなった。

同時に、大名・旗本の家来の中で、小金をもっている者が、女を囲って悦に入るという風潮になってきて、四谷の御用聞き・弥七なども、

「これも天下泰平なのでございましょうかね。女あそびに馴れぬ武家方が、目の色を変えて

囲い者を漁っていると申します。それで、また、そうした武家方を相手にする女たちが、ずいぶんと増えましたそうで……はい。手付けが二十両で、そのあとは月ぎめ一両という、まことに安直な囲い者が増えましてね。するとまた、そうした女たちを操る悪が出て来るというわけで……何やら、あっちこっちで悶着が起り、私どもも実は困っているのでございますよ」

などと、こぼしていたことを、小兵衛はおもい出した。

もしも、富山治五郎が、女を餌にする悪漢どもに取り囲まれたなら、

「ひとたまりもない……」

ことは目に見えている。

十何年も前の治五郎は、小さな体に大小の刀を引きずるようにして歩いていたものだし、

「いや、まったく、この刀と申すものほど、むだなものはござらぬな」

まことに正直に、小兵衛へいったことがある。

「大先生。御飯ですよう」

おはるがうしろから、よびかけてきたとき、小兵衛の肚は決った。

（いずれにせよ、この始末は、わしが見とどけなくては安心がならぬ）

このことであった。

今日も、鮒芳で又六と別れたとき、おはるには聞えぬように、その後の、おきんの妾宅の様子を、

「むりのないように、気をつけて見ていておくれ」

と、たのんではおいた。

おいたが、しかし、

（それだけでは、こころもとないような……）

気がせぬでもない。

小兵衛は振り返って、夕餉の膳の仕度にかかっているおはるへ、

「すまぬが、おはる。明日な、四谷の弥七へ、此処へ来てもらうように手筈をしておくれ」

と、いった。

四

四谷の弥七は、翌日の昼すぎに小兵衛の隠宅へあらわれ、小兵衛との打ち合せをすませて引き取ったが、三日後にやって来て、

「大先生。本多様の御用人は、当分、大丈夫でございますよ」

「大丈夫とは……？」

「探ってみましたところ、五日ほど前から腹ぐあいが悪くなり、ずっと、寝込んでいるそうでございます」

「やれやれ……」

「うわさに聞きますと、ちかごろの富山様は大変に評判がよろしいそうで……」
「ふうん……」
弥七も、小兵衛の道場へ稽古に来ていたころ、富山用人を何度も見ている。
したがって当時、本多家から秋山道場へ来ていた家来たちとは稽古もしたり、語り合ったりもしている。
そうしたわけだから、弥七が本多家のあたりを見張っていて、通りかかった知り合いの家来に声をかけ、探りを入れることなど、わけもないことだし、怪しまれることもない。
ともかくも、いまの富山治五郎の本多家における羽振りは相当なものらしい。
あの、小さくて細かった顔や体に、みっしりと肉がつき、それなりの貫禄もそなわってきて、殿さまの本多河内守の信頼も厚いそうだし、五千石の家宰をつとめるについてはなかなかにきびしく、家来たちも、
「口やかましい御用人だ」
と、悲鳴をあげているのだそうな。
「へへえ……」
小兵衛が目をまるくして、
「ほんとうかえ?」
「ほんとうらしゅうございますよ。あの貧弱な御用人様がねえ……」
「変れば変るものよ。もっとも十数年前のあのころは、亡父の跡をついで用人の席に就いたばかりゆえ、気苦労も多いところへもってきて、あの風采ゆえ、みなから莫迦にもされていたのであろうよ。それが、しだいに用人のつとめにも馴れ、馴れるにしたがって自信もでき、自信がつけば胃病も癒って肉づきもよくなり腹も出っ張ってこようというものさ」
「なるほど、こりゃあ大先生、剣術と同じでございますねえ」
「そのことよ。あは、はは……」
「そうなると、今度は、自分の行先も知れているということで、元気なうちに女のひとりも囲ってみようという……」
「罠が仕掛けられているとも知らずにのう」
「ですが、いったい、その女は、どんな罠を……?」
「さて、わからぬ」
「傘屋の徳次郎も、すっかり傷が癒りましたので……昨日から、深川の、その女の家の出入りを見張らせております」
「変りはないようかえ?」
「相変らず、小女を相手にぶらぶらと暮しているらしく、暇をもてあましては、となりの絵師の家へあがり込んでいるそうで……」
「又六と徳次郎とは……?」
「はい。ちゃんと連絡がついているようでございますよ」
「それなら大丈夫じゃ」

「私も明日はひとつ、その女の顔を見ておくつもりでございます」
「富山用人の病気は?」
「まだ四、五日は寝込んでいるのではございませんか」
「それなら、よいが……」
「では、これで、ごめんをこうむります」
「まあ、よいではないか。いっぱい飲ろう」
「いえ、今日のところはこれで……」
「そうか、すまなかったのう。弥七、こりゃ、空模様が怪しくなってきたぞ」
「ちゃんと身仕度をしてまいりました。それにしても大先生。今年の梅雨は中休みが多くて楽でございました」
「そうよ、な……」
傘屋の徳次郎が隠宅へ駆けつけて来たのは、その翌日であった。
晩春のころに、盗賊・土崎の八郎吾に関わる事件で、無頼浪人の一刀を浅く頬に受けた徳次郎であったが、
「おお、徳かえ……」
その顔を一目見るや、秋山小兵衛がうれしげに、
「うむ。その傷痕なら、やがて消えよう」
と、いったものだ。

「こいつは、どうも……なあに傷痕なんぞ、かまうものじゃあございませんが、この上、人相が悪くなってしまっては、四谷の親分のお役にも立てませんので」
「ありがたいこころがけだ。弥七にもそういっておこう」
「とんでもねえことでございます」
「ま、あがれ」
「また、降り出しましてございますねえ」
「もうすこしの辛抱じゃよ」
と、小兵衛がおはるへ酒をいいつけておいて、
「何か、あったのかえ?」
「へえ。昨日の日暮れ方でございましたが……あの女の家へたずねて来た四十がらみの男がございます」
「ふむ、ふむ……では何か、富山治五郎を待ちきれずに、別の旦那を取ったというのかえ?」
「いえ、それが……帰る男を女が見送って出たときの様子を看ますと、そうでもねえようなので」
「ほう……すると何かな。その女を富山用人へ周旋している、つまり囲い者の口入屋ではないのか……?」
「どうも、そうらしいので……」

「後をつけたか、男の……」
「へい」
「どこへ行った?」
「芝口の土橋に軍鶏を食わせる丸鉄という小体な店がございまして……そこへ入りましたので、ちょいと当ってみますと、どうやら、丸鉄のあるじで民蔵というのが、その男らしいのでございますよ」
「なある……」
「堅い身なりをしておりましたが、細身の隙のねえ体つきで、目つきが妙に光っておりましてね」
「くさいのう」
「まったく……」
「このことを弥七へつたえたかえ?」
「さっき、親分が深川へ見えましたんで、つたえておきました。いずれにしろ、親分が帰りに、こちらへ見えることと存じます」
「そうか、よし、よし。さ、これはすこしだが、何かうまいものでも食べておくれ」
「と、とんでもねえ……」
「いいから、いいから……これ、これ、年寄りに恥をかかすなよ、徳」
「さ、さようでございますか。どうも、いつも、いただくばかりで申しわけもございませ

ん」
「なあに……では、たのんだよ」
「へい」
傘徳が帰ってから、小兵衛は昼餉をすませ、夏夜着をかぶって、昼寝をした。
（わしのような閑人には、梅雨も、さして苦にならぬ。もったいないことよ……）
軒を打つ雨音をこころよく聴きながら、とろとろとまどろんだかとおもうと、
「先生よう。四谷の親分が見えましたよう」
おはるに、ゆり起された。
「お、そうか……弥七。さ、入ってくれ、入ってくれ」
「これはどうも、おやすみのところを……」
「何の……」
「大先生。実は、深川の中島町にいる御用聞きで、私が、ごく親しくしております勝平という人がおりまして……」
「ふむ、ふむ」
「今日、深川へ行ったついでに、勝平のところへ立ち寄りましたら、その、あの女のとなりの絵師の川野玉栄先生に勝平は可愛がっていただいているというので……」
「ほほう……」
「お上の御用の人相書なども、中島町の勝平のたのみなら玉栄先生、気軽に引き受けて下さ

るのだと申します」
「ははあ……」
「そこで大先生。勝平が申しますには……」
と、四谷の弥七と小兵衛が、ひとしきり打ち合せをすませたのち、酒になった。
肴は湯豆腐である。
土鍋に金杓子で削ぎ入れた豆腐へ大根をきざんでかけまわしてあるのは、豆腐をやわらかく味よくするためで、煮出は焼干の鮎という、まことにぜいたくな湯豆腐だ。
女房が料理屋をしているだけに、四谷の弥七が目をかがやかせて、
「これはどうも大先生。大変な御馳走でございますねえ」
「梅雨の冷えどきには、湯豆腐もいいものじゃよ」
「まったく……」
「ときに弥七……」
「はい？」
「いよいよ、事はおもしろくなってまいったのう」

五

それから四、五日するうちに、秋山小兵衛は、中島町の勝平の引き合せで、絵師の川野玉

栄とすっかり仲よしになってしまった。
川野玉栄は、小兵衛よりも六つ七つ年下なのだが、することなすことが、すっかり枯れきっており、
「あの先生にくらべれば、わしのほうが、まだまだ生ぐさいのう」
小兵衛が四谷の弥七に洩らしたほどであった。
玉栄のほうも、すっかり小兵衛が気に入ってしまったらしく、
「いや、その、私の実家は、三河以来の家柄でしてな。どうもその、何かとやかましゅうて……大小の刀を腰へ差し込み、もったいぶって暮すのは、生得大きらいなもので……さよう、刀よりも絵筆のほうが性に合うているというわけで、若いころは、もう、ずいぶんと人目にあまる乱行をいたしましてな。はい、はい。それで、実家からはじき出されてしまいました。もう、三十年も前になりましょうなあ。実家は弟が跡をついでおります。いや、実家の名だけはごかんべん下さい。何やら弟に相すまぬような気がいたしますのでなあ」
と、まるで童児のようにはにかみつつ、つるつるに禿げあがった頭へ手をやる姿が、何とも微笑ましい。
それが、対座していて小兵衛が見上げるほどの大男だけに、なおさら、
（可愛げに……）
小兵衛には見えるのだ。
絵師といっても、世間が買ってくれるほどの腕をもっているわけでもないらしい。実家の

弟から毎年、仕送りの金が来るので、悠々と暮しているのだそうな。

川野という姓も、おそらく実家の姓ではあるまい。

（なるほど。こうした人柄なれば、土地の人びとにも……いや、となりの囲い女にも好まれるわけじゃ）

そこで小兵衛は、ありのままのことを包み隠さず、打ち明け、川野玉栄のちからを貸してもらうことにしたのである。

「ほう、ほう……御老体の親しいお人が、となりの女を、これから囲いものにしようとしていなさる。ふむ、ふむ……」

いちいち、うなずきながら聞き入っていた川野玉栄が、

「ならば、となりの女のことを、その本多様の御用人どのへ、あなたからお知らせするのが、もっとも手早いのではありませぬかな？」

「ごもっとも……」

まさに、玉栄のいうとおりである。

「なれど玉栄先生……」

いいさして秋山小兵衛が、

「こうしたときには、男と申すもの、余人のいうことなど聞き入れましょうか、いかが？」

「ふうむ……」

「玉栄先生のお若いころは、いかがでしたかな？」

「いや、これは……」

禿頭をつるりと撫でて川野玉栄が、

「まさに……」

深く、うなずいたものである。

「それに、五十をこえて、はじめて女狂いをしようという男なれば、のちのちのことを考え、ここは一つ、しっかりと懲らしめておくがよいとおもいましてな」

「なるほど、なるほど。そこまで深く、お考えだとは存じませぬでした」

「それに……」

と、いいさして、小兵衛がにんまりと笑うや、川野玉栄の老顔も笑みくずれてきて、

「それに、その御用人どのが、どんな目に合うか、ちょと、のぞいて見たい気もいたしますな」

「のぞく場所に、こころ当りがござるかな？」

「ないこともありませぬよ」

「これは、ありがたい」

「ふ、ふふ……」

「あは、はは……」

「年をとってまいると……」

そういいかけた玉栄の言葉を小兵衛が引き取って、

「毎日が退屈になるばかりでござるなあ」
「そのこと、そのこと」
「たまさかには、こうした事件が起ってくれぬと……」
「生きているたのしみもありませぬ。なれど、秋山先生には剣術というものがおありなさるゆえ……」
「いや、剣術にも飽いてしまいましたよ。それにくらべて玉栄先生には、絵を描くという風雅なたのしみがござる。うらやましいことで……」
「何の、私も、絵筆を持つことに飽いてしまいましたよ」
こういって立ちあがった川野玉栄が、
「秋山先生。ちょと、二階へおあがり下さいませぬか」
と、いった。

六

川野玉栄の家は、瓦葺きの小さな借家だが、二階に六畳の間が一つあり、ここが玉栄の寝室になっている。
「ほれ……そっと、ごらんなされ」
と、二階へ小兵衛を案内し、西向きの小窓を細目に開けてくれた。

小兵衛がのぞいて見ると、わずかに垣根一つをへだてたとなりの、女の家が丸見えではないか。
南側にささやかな庭もあり、その向うは草原になってい、堀川をへだてて洲崎の土手であった。
西側は、これも堀川をへだてて、対岸の町屋をのぞむ。
このあたりは江戸の市中とちがい、木立も多いし、人が隠れ棲むには絶好のところといってよい。
囲い女……おきんの家は木端板葺きの平家だが、三間ほどあるそうな。
西側の堀川沿いの道から格子戸の出入口まで、よく見えるし、庭に面した座敷も障子が開けてあれば、かなりの見通しがきく。
「秋山先生。いかがで？」
「これは、よう見えますな」
「ここにおられれば、いちいち見張りを出さずともよろしいかと……」
「さよう」
「いかがなものでしょう。今夜から、此処へお泊りになっては……」
「かまいませぬか？」
「かまいませぬとも……」
外は、霧のような雨がけむっている。

おきんの家の障子が一枚だけ開いていた。
「で、女は、ちかごろ、何と申していますかな？」
「それがな、秋山先生。もう直に、新しい旦那が見えるというております」
「ではやはり、富山治五郎殿が……」
「はい、はい」
「手付けを取って、一夜のうちに手を切る……？」
「そのようですな。手付けは三十両で、そのうちの二十両が口入屋のふところへ入るらしい……」
「ははあ……」
「それからまた、つぎの旦那を見つけて来て金三十両。一夜で手を切るという……」
「よい商売ですな、玉栄先生」
「まったく……それにしても、あの女と口入屋が、どんな方法を用いるものやら……」
　と、川野玉栄が興味津々という顔つきになった。
　秋山小兵衛が着替えの衣類を風呂敷に包み、これを、迎えに来てくれた鰻売りの又六に持たせ、川野玉栄宅へ泊り込んだのは、翌日の午後からであった。
　小兵衛の留守中、鐘ケ淵の隠宅へは、関屋村にいるおはるの父親が泊りに来てくれた。
　傘徳を二階にあげて見張りをさせておき、小兵衛と玉栄は階下の画室で仲よく碁を打ったり、酒をのんだりしている。

「わけもなく、一日がすぎてしまうよ」
　と、二日ほどして様子を見に来た四谷の弥七に小兵衛がいった。
「ところで大先生。御用人の病気は、どうやら癒った様子でございますよ。昨日、神楽坂の通りを歩いていた本多様の家来の……ほれ、前に道場へも来ていた加藤平馬さんを見かけて聞いてみましたら、もう元気になって、がみがみと小言ばかりいっているそうで」
「そうか、よし。では、そろそろ、こっちへあらわれるだろうよ」
　果して、その翌日の八ツ（午後二時）ごろに、弥七が駆けつけて来た。
「御用人が本多様の御屋敷を出て、土橋の軍鶏鍋屋へ入ったそうでございます」
「そうか。今日も見張っていてくれたのかえ」
「下ばたらきの伊三というのを見張りに出しておいたのでございます」
「ありがとうよ。いや、御苦労だった」
「これから何が、はじまりますんで？」
　すると、川野玉栄が、
「細工はりゅうりゅう……」
　と、いった。
　今日は、朝から薄日が射している。
　夕暮れ近くになると、遠くで雷が鳴った。

「や……雷じゃ。ようやくに梅雨もあがりそうじゃな」
　小兵衛が、そういったとき、二階から傘屋の徳次郎の声がした。
「来ました。やって来ました」
「そうか……」
　小兵衛、玉栄、弥七の三人が二階へ駆けあがり、小窓の隙間から、かわるがわるに外を見た。
　なるほど、来た。
　本多河内守の用人・富山治五郎が、土橋の軍鶏鍋屋のあるじに案内をされて、おきんの家へ入って行ったのである。
「なるほどのう……御用人らしくなったわえ。どうじゃ弥七。あの反っくり返って威張った様子は……」
　弥七がぷっと吹き出して、
「いやどうも、御立派なもので……」
「さあ、いよいよ、はじまりますな」
　と、川野玉栄老人、いそいそとしている。
「徳や。酒をのんで、いまのうちに眠っておけよ」
「へい。そうさせていただきます」
　と、階下へ去った傘徳を見送った四谷の弥七が、

「大先生。どうなさるので？」
「夜に入ったら、傘徳が、あの女の家の床下へもぐり込み、朝まで様子を見とどけるのさ」
「へへえ……」
　さすがの弥七が、目をまるくした。
「すでに、床下にはな、藁を敷き、その上へ茣蓙をのべ、蚊いぶしの用意までしてあるのじゃ」
「これはどうも、おそれ入りましてございます」
「や……ごらんなされ。御用人どのについて来た軍鶏鍋屋のあるじが帰って行きますぞ」
　と、川野玉栄。
「どれ……」
　小兵衛が、窓の障子へ目をあてがった。
　いましも、帰る男を見送って出たおきんが、何かささやき、笑っている。
　男のほうもくすくす笑いながら、おきんの肩を叩き、うなずいて見せ、汐見橋をわたって去った。
　おきんは家へ入った。
　それから間もなく、小女が買物に駆け出して行き、酒だの肴だのを仕込んで来たかとおもったら、すぐにまた出て行った。
　これは、おきんから小遣をもらい、自分の実家へでも泊りに帰って行ったものらしい。

「弥七、どうする。朝まで此処にいるかえ?」

「大先生さえ、御迷惑でなければ……」

と、四谷の弥七も、御用聞きという稼業をはなれた顔つきになった。

どこかで、水鶏が鳴いている。

気温が、急に上ってきたようだ。

七

富山治五郎は、夢を見ていた。

白蛇が、自分のずんぐりとした裸体に巻きついているのである。

巻きついて、巻きしめつつ、白い蛇の舌がちろちろと治五郎の口をなぶる。

「ああ……」

たまりかねて、治五郎が呻く。

なんともいえぬ恍惚の呻きなのだ。

長い長い蛇の胴体が足の先からくびすじのあたりまで巻きついており、すこしずつ、すこしずつ、巻きしめるちからが加わってくるのだが、まったく苦痛をおぼえない。白蛇の体のやわらかさはたとえようもないのだ。

白蛇に巻かれて快感にひたっている富山治五郎の前で、三十人ほどの者が両手をつき、頭

を下げている。

その中には、本多家に奉公をしている家来たちや侍女たちもいるし、なんと、治五郎の主・本多河内守と奥方も平伏をしているではないか。

半月ほど前に、市ケ谷八幡宮門前の水茶屋で、はじめて知り合いになった佐々木平太夫という中年の侍も平伏をしている。

近年は寺社の門前町などに水茶屋が増え、美女を茶汲女にし、媚態をつくして客をもてなすようになった。

このごろの富山治五郎が、暇があると諸方の寺社へ参詣に行くのも、若い茶汲女の声を聞き、女たちの体からただよう化粧の香りを嗅ぐのがたのしみになったからであった。

五十をこえたいままで、女といえば先年病死をした妻のみしか知らぬ治五郎なのだ。

いまや、本多家の用人としての実力も充分となり、睨みも利いて、おもうままに五千石の世帯を切りまわすことができるようになった富山治五郎だが、それにつけても、

(わしは、もう、このまま、若い女の体を抱くこともならずに生涯を終えてしまうのか……)

これが、何としても心残りである。

跡つぎの長男も二十八歳となり、妻を迎えて、去年は治五郎に初孫ができた。

本多家の用人長屋は四間であるが、深夜、向うの部屋で若夫婦がひそやかに何事かささやいたりしている声が耳に入ると、嫁のみずみずしい体が脳裡に浮んできて、ねむれなくなってしまう。つまり、それだけ治五郎には、まだ男のちからが残存しているのだともいえよ

う。

　治五郎が若いころとちがって、いまの江戸では、水茶屋や料理屋ばかりではなく、若い女の化粧や衣裳が派手やかに美しくなり、女たちの言動も何やら生き生きとしているようだ。

　いまさら後妻を迎えるつもりはないが、治五郎は治五郎なりに小金をためこんでいるし、

（金で、どうにかなるものならば、ちかごろ流行の囲い者を、わしも持ってみたい）

　そのことばかりを、おもいつづけていたのである。

　そうした折も折、市ケ谷八幡宮門前の水茶屋で、佐々木平太夫に声をかけられたのであった。

「御参詣ですかな?」

　と、近寄って来た佐々木平太夫は、さる大名の江戸屋敷の〔御用取次役〕をつとめているというだけあって、身なりも立派なら、顔つきも福々しく、上品でいながらさばけており、はなし上手の、すすめ上手（酒の……）というわけで、富山治五郎はすっかり気をゆるしてしまい、自分の名も身分も打ち明けた。

　佐々木は治五郎を八幡宮境内の料理屋へさそい、また、酒になった。

「いかがでござる。若くて美しい女を囲うてごらんなされては……」

　と、佐々木がいった。

「いやいや、とても……」

「何の、わけもないこと。それがしも一人、囲うてござる」

「ほう……」

「まことに便利な世の中になりましてな。入費もかからぬ上に、気軽で、安心な……」

「なるほど……」

「そうした女を世話してくれる者もおりましてな」

「なるほど、なるほど……」

　ひざを乗り出した富山治五郎へ、佐々木平太夫が、

「いかがで?」

「さよう。先ず、はなしをお聞かせ願いたい」

　と、治五郎は遊びなれた様子をよそおっていたが、胸が高鳴っていた。

　その佐々木の世話で、三日後の午後に、同じ料理屋へあらわれた治五郎は、民蔵という男に会った。四十がらみの愛想のよい、いかにも気のきいた、わけ知りらしい町人なのだ。

　佐々木が一足先に帰ると、今度は、いよいよ女が入って来た。

　名を、おきんという。

　一目見て、富山治五郎はおきんが気に入り、民蔵が中へ入って契約をむすんだ。手付金として三十両。その後は月に一両二分という約束で、このときに治五郎は十両をわたし、残る二十両は、女が住んでいるという深川入船町の家へ行ったときにわたすことになったのである。

　ところが、帰邸した夜ふけに下痢を起してしまい、治五郎は数日、病床にあった。

この間、使いを民蔵の家（芝口の土橋）へ出し、手紙をもって、自分の病気全快を待つように、くれぐれも念を押したのだ。

　そして、腹痛も消え、下痢もとまった昨日、民蔵の案内で女の家へやって来た富山治五郎が、女……おきんのもてなしに有頂天となり、

（ちがう……まるで、ちがう。亡き女房どのとは、まったくちがう。同じ女でも、このようにちがうものなのか。ああ、女が……女が、男の体に、このようなことをしてくれようとは、夢にもおもわなんだわい……）

　このまま、死んでしまうのではないかとおもうほどの昂奮と快楽に疲れ果て、治五郎は裸のおきんに添い寝をされ、深いねむりに落ち込んだのである。

八

　富山治五郎が、急に、ねむりからさめた。

　まさに、昨夜の女の家に自分は寝ている。

　閉めきった雨戸の隙間に、白い朝の光があった。

　くびを曲げると、自分の左脇に、女の黒髪が乱れてい、女は夏夜着をはだけて、こんもりとした胸乳を見せている。

　治五郎は、おもわず北叟笑んだが、

（おや……？）

　自分の腹から股のあたりが、ぐっしょりと濡れていることに気づき、同時に、得もいわれぬ強烈な臭気が夜具の中からただよっているのを知った。

（あっ……）

　はじめは、自分が、また下痢を起し、粗相をしてしまったのだとおもい、あわてて、はね起きた。ちがう。下痢ではない。あきらかに、これは小便の臭気である。

（わしが、寝小便を……？）

　かつてないことだ。

「おい……おい、これ……」

　治五郎は、おそるおそる女をゆり起した。

「あっ……」

　目ざめた女が湯文字一つを腰に巻きつけた裸身を起して、

「あれえ……」

　悲鳴を発し、ついで泣きむせびつつ、

「すみません、すみません。相すみません」

　と、叫んだ。

「こ、これは、どうしたことじゃ？」

「私が……あの、私が、粗相を……」

「な、何じゃと……」
「いつも、子供のころから、こんな粗相を……」
「えっ……」
「おゆるし下さいまし。おゆるし……」
せっかくに囲った女が、夜尿症だというのである。
これでは、どうも、百年の恋もさめ果ててしまうではないか。
「おのれ。たばかったな!!」
富山治五郎は、激怒した。
「このことを隠しておったな、おのれ……」
「おゆるし……おゆるし……」
「ならぬ。手付けの金三十両を返せ」
「おゆるし……」
「返せ。返さぬか!!」
治五郎は下帯一つの裸体のままで、女を蹴飛ばした。
そのとき……。
台所の障子が開き、屈強の男が二人、短刀を抜いてあらわれた。
「何者だ?」
わめいて、自分の刀を探したが、どこかに消えてしまっている。もっとも、刀を腰に帯し

てはいても、これを引き抜いたことなど一度もない富山治五郎なのだ。
「おい!!」
と、二人の男が短刀を治五郎へ突きつけて、
「こんなことを、てめえの主人に知られてもいいのかよ」
「この女には何の罪もねえのだ。このまま、お前さんが囲ってくれるなら、おれたちは何も文句はつけねえのだぜ」
「どうするのだ」
「女をゆるしてやれよ、おい……」
とんでもないことだ。夜尿症の女とは寝られるものではない。
富山治五郎は、すくみあがった。
「どうするよ?」
「か、帰る」
「では、文句をつけねえのだな?」
「う……うむ……」
「この女を捨てたのは、お前さんだよ。そうだろう、ええ……」
喉もとへ短刀を突きつけられ、治五郎は顔面蒼白となり、仕方もなく、うなずいた。
富山治五郎が、這う這うの態で、辛うじて衣服を身につけ、大小の刀を両手に抱き、ふらふらと女の家を出て来たのは、それから間もなくのことであった。

出て来て、
「あっ……」
治五郎は、驚愕の叫びをあげた。
堀川沿いの道に立って、治五郎を迎えたふたりの人がいる。
一は、秋山小兵衛。
一は、絵師・川野玉栄老人である。
二人を見て、治五郎は崩れ折れるように平伏をした。
朝も、まだ早い。
道を通る人もなかった。
「治五郎。久しぶりじゃな」
と、先ず、声をかけたのは川野玉栄である。
これには、秋山小兵衛がびっくりした。
「玉栄先生。この御用人を御存知なので?」
「はい。私の実家の用人でしてな。いまの当主・本多河内守は、私の弟でございますよ」
「ははあ……」
さすがの小兵衛が呆気にとられて、
「お人がわるい……」
というのが、ようやくのことであった。

「いや、まことに御無礼を……」
頭を下げた玉栄老人が、
「これ、治五郎……」
「ははっ……」
「馴れぬことをするものではないぞ。よう、わかったか」
と、いった口調が、まぎれもない大身旗本のそれであった。
「ははっ……」
「弟には内証にしてつかわす」
「お、おそれいり……」
「わしが、此処に住んでいることを知らなんだのか?」
「は……」
川野玉栄への、年々の仕送りは、親類の本多達之助方を通じておこなわれてい、富山治五郎は、その住居まで耳にしていなかったらしい。
「よし、よし。行け。二度とあやまちをいたすなよ」
「ははっ……」
もはや、秋山小兵衛の出る幕ではない。
よろめきよろめき、大小の刀を腰へ差し込みながら、汐見橋をわたって行く富山治五郎を見送り、

「あは、はは……」
「うふ、ふふ……」
小兵衛と玉栄が笑い出した。
このとき、おきんの家の中で格闘の響みが起った。
四谷の弥七と徳次郎が裏手から飛び込み、治五郎を脅しつけた無頼者たちと、おきんを御縄にかけているのであろう。
朝の陽がのぼりはじめた。
「玉栄先生、いよいよ、夏ですなあ」
「はい。年ごとに、夏が嫌になります」
「ごもっとも、ごもっとも」

○

土橋の軍鶏鍋屋〔丸鉄〕のあるじの民蔵は、おきん以外にも十人の女をあやつり、同じような手口で、好色の侍たちから金をまきあげており、この組織を、みずから、
「ゆばり組」
と名づけ、悦に入っていたという。
佐々木平太夫なる者も、民蔵一味の浪人者で、本名は村松某であったそうな。

彼らの手口に乗せられた被害者は、これまでに、なんと三十人におよぶ。
「将軍様おひざもとの、この江戸に、ああした連中が出て来ようとは……いや、まったく、おどろきましてございます」
と、四谷の弥七が報告するのを聞いた小兵衛は、
「それにしても、寝小便とは考えたものじゃのう」
「あの、おきんという女は、富山御用人がはじめての……」
「寝小便かえ？」
「はい。あの女、以前は、采女ケ原の茶店に出ていたと申します」
「それに目をつけたのが、あの、小出源蔵か。なるほど……」
「小出のほうが、富山さまより、よっぽど、そのほうにかけては上手だったようでございますねえ」
「ふむ、ふむ……」
その小出源蔵は、この年の秋に、江戸屋敷から九州の国許へ転勤させられてしまった。
藩中随一の剣士が、河童の化け物に鼻を切り落されてしまったのでは、はなしにも何もならぬ。
奥平家の家中で、
「鼻欠け源蔵」
などとよばれ、大いに面目をうしなってしまった。

殿さまも、
「二度と、源蔵の顔を見とうない」
と、いうし、重役たちも、
「あのような面相の者を、江戸表へ置いては、いかがなものか」
「まことに当家の恥でござる」
「見ともないことじゃ」
と、意見がそろい、小出源蔵は妻子を連れて悄しおと国許へ旅立って行った。
夏のさかりとなって、隠宅を訪ねて来た四谷の弥七が小兵衛に、こう告げた。
「昨日、田町の通りで、本多様の家来の加藤平馬さんにばったり出合いまして……はい。あれからこっち、口やかましい御用人はすっかりおとなしくなって、人あたりもよくなったらしく、加藤さんがふしぎがっておりましたよ」

越後屋騒ぎ

一

鬱蒼とした木立に、蟬が鳴きこめている。
そのとき秋山小兵衛は、ただ一人で、不忍池のほとりの道から上野の山内へ通じている女坂をのぼっていた。
花見どきはむろんのことだが、時候のよいときには、寛永寺の参詣がてらにやって来る江戸の市民たちにとって、上野の山は、
「またとない気散じの場所……」
でもある。
天台宗の関東総本山にして、徳川将軍家の菩提所でもある東叡山・寛永寺の寺地は一万千余坪。初代将軍徳川家康を祀る東照宮の社地が一万五千二百坪。合わせて三万坪に近い境内がすなわち、上野の山内といってよい。

この日の朝も早く……。

秋山小兵衛は、湯島天神下の同朋町にある、亡き浅野幸右衛門の旧宅へおもむいた。

金貸しをしていた孤独の老人浅野幸右衛門が自殺をとげたのは、今年の正月であったが、その折、幸右衛門は千五百両という莫大な遺金と同朋町の家を、

「まことにもって御面倒ながら、なにとぞ、いかようにも御処分下されたく……」

と、遺書をもって小兵衛に托した。

その後、かの〔いのちの畳針〕事件が起り、小兵衛は、むかしの自分の門人だった植村友之助を幸右衛門の旧宅へ住まわせた。

病身の友之助が、この家の留守番をするようになってから、めきめきと体のぐあいが好転し、下男の為七と共に暮しながら、ちかごろ、近辺の子供たちをあつめて読み書きを教えるようになった。

むろん、礼金はとらぬ。

「ほう……それは何よりじゃ」

小兵衛は知らせを受けて、大いによろこび、

「そのうちに、見に行こう」

といっていたが、長い梅雨に閉じこめられた所為もあって足を向ける折もなかったが、この朝、ふと、おもい立って、涼しいうちに鐘ケ淵の隠宅を出た。

四十になっても、六、七歳の知能しかないといわれる下男の為七が、それこそ汗みずくになって子供たちの世話をやき、自分もまた、友之助から〔いろは……〕の読み書きを教えてもらっているのを見て、たどたどしくも一所懸命に筆をあやつる大男の為七の姿に両眼を潤ませたのであった。

子供たちが、汐の引くように帰ったあとの昼下りに、為七は索麺を茹でて井戸水に冷やし、蓼の葉の青味をそえ、薬味に葱まで添えて小兵衛の前へ運んで来た。

「ほう……為公は、こんなことができるのかえ」

小兵衛が、目をまるくした。

為七は、すっかりはにかんでしまい、台所へ逃げた。

「ふしぎなものでございますな、先生。こうしたことは教えると、よくおぼえますので」

と、植村友之助。

「ふうむ。なれば、どしどし、台所の仕事をさせるがよい。そこのところから当人の知恵も育つであろうよ」

「はい」

「そもそも人間なぞというものはな、自分が知らぬ知恵のはたらきが、いくつも隠されているものなのじゃ。その知恵のはたらきが引き出されるきっかけというものがないかぎり、埋もれたままになってしまうのさ。わしなぞも、いまにして後悔をしているのじゃ」

「何と申されます……?」

「なまじ、剣の道なぞへ迷い込まず、剣のかわりに庖丁の修業でもしたほうがよかったかと、

おもうているのじゃよ」

「まさかに……」

「いや、ほんとうじゃよ」

友之助はあきれて、二の句がつげなかった。

「為や、うまかったよ。さ、ごほうびをあげよう」

帰りぎわに小兵衛が一分金を紙に包み、為七の手へつかませてやると、為七は何ともいえぬ笑顔になり、小兵衛を伏し拝んだものである。

「先生。もそっと涼しくなってから、お帰りになられましては……」

「なんの、日ざかりの道を歩むのもよいものじゃ。汗をたらたらとながしながら、な……」

池の端・仲町から不忍池畔へ出た小兵衛は、上野山内を突切り、車坂を下って入谷田圃から浅草へぬけ、橋場の〔不二楼〕で、夕飯をするつもりであった。

おはるも、大治郎・三冬の夫婦も夕刻には不二楼へあつまることになっている。

女坂をのぼり切った秋山小兵衛は、東照宮に参拝をし、大仏殿のうしろへ出て、中堂を拝し、雲水塔の傍から東への道をとり、車坂へ向った。

夏の日ざかりの上野山内には、人の姿もなく、小兵衛は汗をぬぐいつつ、

（むかしは、いかに暑くとも汗なぞ出なかったものじゃが……）

ふと、何気もなく南の方を見やって、

（や……？）

燕のごとく身をひるがえし、木立の中へ走り込んだ。

日射しが白い道の向う側は、寛永寺の子院がいくつも建ちならんでいる。

その道へ木立の中から、よろめき出た男が、ばったりと倒れ伏したのを小兵衛は見た。

はじめは、霍乱（日射病）かとおもったのだが、つづいて、木立からあらわれた二人の男が、もがきあばれる男の子供を抱え、子院の凌雲院と本覚院の間の細道へ走り込んだのを見て、とっさに木立へ身を隠したのだ。

身を隠したのは、二人の男に見られまいとしたのである。見られては彼らの隙を衝くことができない。

二人の男が、

（子供を勾引した……）

と、小兵衛は直感した。

すぐに、小兵衛は道へ走り出た。

道に倒れている五十がらみの男は、どこぞの商家の下男のように見えたが、かまっている余裕はなかった。

ふたたび、秋山小兵衛は身を転じて、車坂へ駆け向った。子院の間の細道が車坂へぬけていることを、あらかじめ知っていたからであった。

二

この日の秋山小兵衛は、白茶色の帷子を着ながしにして脇差一つを腰に帯し、素足にばら緒の草履。日よけの菅笠をかぶり、手製の竹の杖をつくという姿であった。

凌雲院の裏手の車坂は、かなり急な坂道である。

これを走り下る秋山小兵衛は、前方の細い崖道を下って来た二人の男を見た。男たちに抱え込まれた子供は、もう、ぐったりとなっているらしい。

「待て!!」

老人ともおもわれぬ凛々たる声を投げると、見るからに無頼者らしい二人が、ぎょっと振り向いた。

「その子供を勾引して何とする!!」

よびかけつつ、歩みをゆるやかにして近づく小兵衛を睨んだ一人が、別の一人へ何かささやき、子供の体をそやつにまかせ、ふところから短刀を引きぬいた。

子供を抱えた一人は、一散に車坂を駆け下って行く。

小兵衛の小さな体が突風のようにうごいた。

余所目には、小兵衛が無頼者の傍を擦りぬけたとしか見えなかったろう。

短刀を構えた大男の無頼者は、ほとんど何もせずに、小兵衛が走りぬけて行ったあとの坂

道へ地ひびきをたてて転倒している。

車坂を下ったところに、町駕籠が一挺、待機していた。駕籠舁きも屈強の男たちである。

駕籠舁きに何か叫びながら、車坂を駆け下った無頼者が、抱え込んでいた子供を駕籠の中へ放り込み、

「早く、早く!!」

と、わめき、自分は振り向いて短刀を引きぬき、いましも坂を駆け下って来る小兵衛へ備えた。

駕籠舁きは、素早く駕籠を担ぎ、下寺道とよばれる崖下の道を上野の山下の方へ逃げにかかった。

それを見た秋山小兵衛が、坂を下り切らぬうちに、手にした竹の杖を先棒の駕籠舁きへ投げつけたものだ。

細い竹の杖は、弓弦を放れた矢のごとく疾り、駕籠舁きの後頭部へ命中した。

「うわ……」

駕籠舁きが、のめり倒れ、駕籠もまた、前のめりに落ちた。

「野郎!!」

短刀を揮って坂へ駆けあがる無頼者の頭上を、小兵衛が軽がると飛びこえた。飛びこえざまに小兵衛がこやつの頭を蹴っている。

短刀を放り落して坂道へ転倒する無頼者にはかまわず、小兵衛は駕籠へ走り寄った。

二人の駕籠舁きは、駕籠を捨てて山下の方へ、必死に逃げ出した。

小兵衛は、駕籠の中に気をうしなっている男の子を引き出し、抱えあげた。

「これ……これよ……」

身なりもよく、年のころは七つか八つであろう。品のよい、可愛らしげな顔だちの子だ。

坂道の無頼者も、這うようにして、山内へ逃げつつあった。

子供がいることゆえ、これを追うことを小兵衛はあきらめた。

下寺道の向う側にも、寛永寺の子院がたちならんでい、屏風坂下のあたりで、子院の僧らしいのが一人、こちらをいぶかしそうにながめている。

左手に笠をとった小兵衛が、男の子をゆさぶった。恐怖のための失神だったらしく、男の子が目を開けて、

「アッ……」

泣き叫びそうにするのへ、

「これよ。わしが悪者どもを追いはらってやったぞ。お家へ連れて帰ってやろうな。坊のお家はどこなのじゃ?」

にっこりと笑いかけるや、男の子は、たちまちに安心をしたらしい。

「明神さまの前の、えちごや……」

と、こたえた。

「明神さま……神田のかえ?」

「ハイ」

「そうか、よし、よし……」

「じいやが……じいやが……」

「爺やじゃと! あ、そうか。忘れていた、忘れていた。さ、坊や。この笠を持っていておくれ」

車坂をのぼり返して、凌雲院と見明院の間の道へ出たとき、秋山小兵衛の足がぴたりと止った。

向うからやって来る編笠の侍がひとり、これも小兵衛を見て足をとめた。

袴もつけ、身なりもきちんとしているが、浪人に間ちがいはない。編笠に隠れた顔貌は知るよしもないが、筋骨たくましい体軀には一点の隙もなかった。

ゆっくりと近づいて行きながら、小兵衛は男の子の顔を、わが肩のあたりへ伏せさせた。

そして左腕ひとつに子供の体を抱き、右腕を垂らしたまま、静止したままの浪人と擦れちがいざま、

「何ぞ、御用かな?」

しずかに声をかけた。

その瞬間に、浪人の体がうごいた。

小兵衛へ背を見せて、車坂を下って行ったのである。

その後姿からは、近づく小兵衛を笠の間から凝視していたときの殺気が消えている。

（はて……？）
どうも、わからぬ。
それから、先刻、男の子が「爺や」とよんだ男が倒れた道へ出て見ると、子院の本覚院の門前へ、僧が四人ほど出ていて、大さわぎになっているではないか。
「爺や」は、血まみれになって倒れ伏していた。
まさか……と、おもっていたが、刃物で突き刺されていたのだ。
小兵衛の腕の中で、男の子が、
「爺やが……爺やが……」
と、指さして泣き叫びはじめた。
「爺や」は、本覚院の門前へ這って行き、救いをもとめているうち、息絶えたらしい。

三

無頼どもに誘拐されかかった子は、まさしく、神田明神門前の蠟燭問屋〔越後屋半兵衛〕の孫にあたる伊太郎（八歳）であった。
伊太郎につきそって殺害されたのは、下男の藤八といい、越後屋には二十年も奉公をしている実直な男である。
この日は、伊太郎が藤八にせがみ、不忍池から上野山内の桜ケ岡へまわり、茶店で白玉を

食べたりしてから、本覚院前の道へ出たところへ、突然、二人の無頼者があらわれ、伊太郎を背負った藤八を木立の中へ引き擦り込んだらしい。
藤八は死んでしまったし、そのときの状況を語ったのは八歳の伊太郎なのだから、
「様子が、よく、わからないらしいのでございますよ」
と、翌々日に鐘ケ淵の隠宅へあらわれた御用聞きの文蔵が小兵衛へ報告をした。
上野の北大門町に住む文蔵は、四谷の弥七とも親しく、秋山小兵衛もよく知っている。そこで、あのとき、小兵衛は先ず、本覚院の僧にたのみ、文蔵に来てもらったのだ。
上野山内の殺人事件となれば、いうまでもなく寺社奉行所へ届け出なくてはならぬ。その調べが終るまで現場に待たされていては、
（たまったものではない……）
と、おもい、北大門町の文蔵に、
「後をたのむよ」
いい置いて、伊太郎をあずけ、小兵衛は不二楼へ向ったのである。
文蔵は出張って来た役人たちへ、秋山父子と老中・田沼意次との関係をのべたらしい。それがもっとも、
（手っ取り早い……）
と、考えたからであろう。
越後屋からは、若旦那とよばれている半太郎が番頭をつれて駆けつけて来て、我が子の伊

太郎を引き取った。

「先生。越後屋が、こちらへ御礼に出ましてございますか?」

「いいや……」

「何てえことだ。いのちの恩人へ、先ず第一に駆けつけて来なくてはならねえのに……」

「怒るな、文蔵。わしはかまわぬよ」

「ですが、先生……」

いいさした文蔵が、

「どうも、あの越後屋というのは、妙な店だ」

ひとりごとのようにいった。

「妙な、とは?」

「いえ、その、紀州様をはじめ、諸方の御大名方の御用をつとめているというので、何事にも見識張って頭が高く、あのあたりでも、まことに評判が悪いのでございますよ」

「ほほう……そうかえ」

「神田明神のあたりは、湯島の長兵衛という御用聞きがおりますので、私も、くわしくは存じませんが……去年の、そうだ、ちょうどいまごろでございましたかね……」

「何か、あったのかえ?」

「越後屋の古狸なぞといわれている番頭の喜右衛門が、大川へ身を投げて死んだのでございますよ」

「ふうん……」

「どこから飛び込んだものかわかりませんが……死体は、御蔵の二番堀へながれ着いたのだそうでございます」

〔御蔵〕とは、浅草にある幕府の御米蔵のことで、一番から七番まで、米を出し入れする舟の入り堀が大川(隅田川)に面して設けられてある。

「そりゃ文蔵、何かえ、その大番頭が自殺をするような理由があったのかえ?」

「さあ、よくは存じませんが、何しろ、越後屋の大番頭といえば大したもので……金沢町に家がありまして、息子夫婦もいれば孫もいて、店へ出て来れば、いまの越後屋の旦那も一目を置くほどなんでございますから、私にいわせりゃあ、どうも、ふしぎでなりません」

「なるほどのう……」

「それにしても怪しからねえやつどもだ。ようござんす、これから越後屋へ行き、叱りつけてやりますでございます」

「わしのところへ、礼に来ないからかえ?」

「きまっているじゃあございませんか。こんなことじゃ、おひざもとの暮しが成り立ちません」

「まあ、よい。放っておきなさい」

「ですが、先生……」

「それよりも文蔵。ちかごろ、四谷の弥七に会ったかえ?」

「いえ、このところ、さっぱり……」
「そうか。では、そのうちに三人で、いっぱい飲ろうじゃないか」
「こいつは、どうも……」
「いずれ、日を知らせるから、そのときは何をおいても来ておくれよ」
「へい。かならず、駆けつけますでございます」
うれしげに文蔵がいった。
文蔵が帰ってから、小兵衛は昼寝をした。
大川の川面から吹いて来る風が涼しく、とろとろとまどろんではさめ、さめてはまどろむという……夏の一日のうちで秋山小兵衛がもっとも好む時間だといってよい。
(その大番頭は、われから大川へ飛び込んだのではあるまい。飛び込まされたのだ。つまり、殺されたのじゃ)
まどろみからさめ、あらためて小兵衛は、そうおもった。
(それに、あのとき、上野山内で出合うた編笠の浪人者……あれは、いったい何者なのか?)
このことが、小兵衛の脳裡から消え去らないのだ。
(あいつは、伊太郎を抱いて車坂をあがり切ったわしを斬るつもりでいた。これに間ちがいはない。斬らんとして斬り得ず、あきらめて去った。あの折の身の構えといい、殺気といい、なまなかの腕前ではない)

だが、その浪人者のことを、小兵衛はだれにも洩らしてはいなかった。
(あいつは、わしを斬って捨てて、あの子を……越後屋の伊太郎を奪い取るつもりでいたのではないか……?)
どうも、そのような気がしてならぬ。
とすれば、下男の藤八を刺し殺し、伊太郎を勾引した無頼の者たちと浪人者は、
「一味同類の者……」
と、看てよいことになる。
そのうちに小兵衛は、今度は本当に、ぐっすりと寝込んでしまった。
「もし……もし、起きて下さいよう」
ゆり起されて目ざめた小兵衛に、おはるが、
「越後屋さんの番頭さんという人が見えましたよう」
「いよいよ、来たかえ」
「何がいよいよなんですよう?」
「ま、いい。縁側のほうへまわってもらいなさい」
いつの間にか夕闇が淡くただよっていた。
庭の何処かで、しきりに蛙が鳴いている。
庭先へまわって来たのは越後屋の番頭のひとりで、名は庄三郎といい、四十前後の、いかにも如才ない男らしく見える。

「越後屋さんの番頭さんが、わざわざ、何をしに来たのだえ?」
「あがれ」ともいわずに、小兵衛がいきなりいったものだから、番頭の庄三郎はどぎまぎして、
「あの……御礼にうかがうのが遅うなりまして、まことにもって、申しわけもございませぬ」
「何の礼に来なすった?」
「へ……あの……はい。私どもの主人の孫にあたりますものが、危ういところをお助けいただきまして……」
「おお、あのことかえ」
「はい、はい……」
「越後屋半兵衛というお人は、わが孫の危難を救った者へ、奉公人をつかわして礼をするようなお人なのかえ」
「は……」
　番頭の顔が、見る見る変った。
「そういう主人の許ではたらくのも、なかなか辛いことだろうな、ええ……」
と、煙管に煙草をつめながら、小兵衛が、にべもなく、
「お帰り」
と、いった。
「はい、あの……」
　番頭は、縁側へ、立派な菓子箱の包みを置き、

「まことにもって、行きとどきませぬことでござりますが、御礼のしるしでござります。お納め願いとう存じます」
　おろおろという。
「そうかえ。では、其処へ置いて行くがよい」
「あの……あの……」
「まだ、口上が残っているのか?」
「はい、はい……」
「ならば、早くいうて、さっさとお帰り」
「実は、あの……」
「あのはもういい。早く、いいなさい」
「はい、はい。実は、このたびのことでございますが……」
「越後屋の下男が曲者どもに殺害され、おもりをしていた子供が勾引されようとしたことか?」
「はい。そのことでござります」
「それがどうした?」
「何とぞ……何とぞ、御内聞に願わしゅう存じます。あの、御内聞に……」
「ふうん……」
　ここにいたって小兵衛の眼が、煌りと光った。

「内証にしろと、お前の主人が申すのか?」
「はい、はい」
「だが、あのことを見た者は何人もいるのじゃ。子院の坊さんたちゃ、寺社方の役人も、御用聞きも、みな知っているぞよ」
「その、みなさま方へも、いちいち、おたのみをいたしまして……」
「ほう……なるほどのう」
「では、よろしゅう、お願いを……」
「待て。それは菓子箱じゃな」
「は、はい……」
「蓋を開けろ」
「へ……?」
「中身が見たいのじゃよ」
「は……」
おずおずと、番頭が菓子箱の包みを開き、蓋を外した。
神田・三河町の菓子舗〔笹屋林右衛門〕方で売っている南京粔が桐の箱に詰めてあり、包装にも念が入っている。
と……小兵衛が縁側へ来て、煙管の雁首を菓子箱の下へ突き入れるや、
「それ……」

声をかけて、菓子箱を引っ繰り返したものである。
中身の南京粔の底から、大変なものがあらわれた。小判であった。一両小判が五十枚、菓子の底に敷きつめてあったのだ。
「この菓子箱は重かったろうな」
小兵衛にいわれて番頭の庄三郎が死人のような顔色となり、わなわなと震え出した。
「帰って主人に申せ。このようなまねをしても、人の口を閉じることはできぬぞ。そもそも奇妙なことではないか。悪漢に奉公人を殺され、さらには可愛い孫までが勾引されそうになったことを何で内証にせねばならぬ。それとも、あの事件が世間の口にのぼってはまずいことにでもなるのか、どうじゃ?」
「………」
「いま一つ、今度の事件は、去年のいまごろに大川へ死体が浮いたという大番頭の喜右衛門とも何ぞ関わり合いがあるのか」
小兵衛にたたみかけられて、庄三郎はじりじりと後ろへ退りながら、
「お願いでございます、お願いでございます……」
泣くようにいい、両手を合わせて小兵衛を伏し拝むかたちになった。
「これ、此処へ来い。この菓子箱へ小判を詰め直して、持って帰るがよい」
「お願い……お願い—
「何処へ行く、これ……」

小兵衛がよびかけるのを振り切るように、番頭・庄三郎が堤の方へ通じている小道を駆け去って行った。

「あれまあ……」

台所から茶を運んであらわれたおはるが、

「こんなに小判が……ど、どうしたんですよう?」

「これ、手をつけてはいけない」

「だって、何かの御礼だといってたよう」

「いや、いけない。小判と菓子を箱へ詰め直しておけ。返すのじゃ」

「もったいない……」

「まったくじゃ。江戸でもそれと知られた大店のあるじが、いちいち、こんな金を振りまいているのは、よほどの事があるにちがいない。悪者どもも血迷っているなら、越後屋も血迷っているらしい」

「何のことですう?」

「風呂は沸いたかえ?」

「あい」

「いっしょに入ろう、どうじゃ。久しぶりで背中のながしっこをしようか……」

「あい、あい」

その翌朝であった。

小兵衛の隠宅の近くの木母寺の境内にある茶店の亭主がやって来て、

「秋山先生。大変でございますよ」

「どうした?」

「渡し場の近くで、人が殺されていたのでございますよ」

「ほう……」

小兵衛の脳裡に、閃くものがあった。

「そうかえ。では、ちょいと見物に行ってみようか……」

「御案内いたします。まだ、お役人も見えておりませぬ」

「よし、よし……」

その渡し場は、木母寺の先の隅田村の岸から対岸の浅草の橋場へ大川をわたる渡し舟の発着所である。

死体は、渡し場の近くの葦の中に横たわっていた。

発見したのは、今朝早く、橋場から舟を着けた船頭であった。

土地の者が五人ほど、死体のまわりにいて、死体には菰がかぶせてある。

人びとは、小兵衛を見ると口ぐちに挨拶をした。いずれも顔見知りの連中ばかりだ。

「これかえ?」

「へい。たった一太刀で殺られておりますよ」

「ほう……」
小兵衛がうなずくのを見て、一人が菰をめくり、
「このとおりでございますよ」
「ふうむ……」
小兵衛の予感は狂わなかった。
まさに、昨日の夕暮れに隠宅を訪れて来た越後屋の番頭・庄三郎であった。
左のくびすじから胸にかけて深ぶかと切り割られた一太刀で、庄三郎は即死をしたにちがいない。
あざやかな手口ではある。
このとき、秋山小兵衛の脳裡を過ったのは、あの日のあのとき、越後屋の孫を抱いた自分と無言の対峙をした編笠の浪人の姿であった。

四

それから五日後の夕暮れどきに、秋山小兵衛は、浅草駒形堂裏の河岸に店をひらいている〔元長〕へ出かけて行った。
もとは橋場の不二楼にいた料理人・長次と座敷女中のおもとが夫婦になってはじめた小さな料理屋だ。

「ごめんよ……」
小兵衛が入って行くと、おもとが、
「親分方は、もう、お見えになっていらっしゃいますよ」
「そうかえ、よし、よし」
階下の、十坪ばかりの入れ込みの座敷には、かなりの客が入っている。
「いつも繁昌で結構なことじゃ。長次にな、うまいものをたのむといっておくれ」
「はい、はい」
二階の小座敷へあがって行くと、四谷の弥七と北大門町の文蔵が顔をそろえて、小兵衛を迎えた。
「遅くなってすまぬ」
「とんでもございません」
「ま、今日は、ゆっくりとやっておくれ」
「わざわざ、お招きをいただきまして……」
「いや何、礼をいうのはわしのほうじゃ。文蔵、いろいろと面倒をかけたのう」
と、小兵衛がいったのは、文蔵にたのんで、金五十両入りの菓子箱を越後屋へ返しに行ってもらったからだ。
越後屋の番頭・庄三郎が渡し場の葦の中で斬殺されていた、その日の昼下りに文蔵が隠宅へ駆けつけて来た。

文蔵のところへも、越後屋の使いが来て、金三十両入りの菓子箱を置いて行き、事件の口止めをたのみに来たという。

「ふざけちゃあいけねえ」

文蔵は、その場で、

「叩き返してやりました」

と、小兵衛へ知らせに来たのであった。

北大門町の文蔵は、秋山小兵衛にいわれたとおりの口上を、越後屋の主人・半兵衛につたえた。

「こんなことを申すのもどうかとおもいますがね、越後屋の旦那。あの、秋山小兵衛様とおっしゃるお方の御子息は、御老中の田沼様の御屋敷へ剣術の指南に出ておいでになるのでございますぜ。そこへ、あのような口止めの金を持って行ったのでは、かえって、こちらが怪しまれることになりましょう」

文蔵が、そういうと、越後屋半兵衛の老顔が紙のように白くなってしまった。もしも文蔵が、大治郎の妻・三冬が田沼老中の妾腹のむすめであることを告げたなら、半兵衛は驚愕のあまり、気をうしなったやも知れぬ。

「そこで旦那。秋山先生がおっしゃるには、何か心配事があるならば、包み隠さずにいってごらんになるがよい。事と次第によっては、いくらでもちからになろうと……ま、このようにいって下すっているのですから、旦那も、その胸の内を秋山先生へ打ち割ってみたらいか

がなもので……?」

と、文蔵がいった。

すると越後屋半兵衛は、

「打ち割るにも何も、悪者どもが勝手にしていることゆえ、何やら、わけがわかりませぬ」

「それでは何で、大金を振りまいてまで、事をお隠しになるので?」

「そ、それは親分。あの事が世間へひろまると、店の信用にもかかわりますし、それに……それに、悪者どもを怒らせて、かえってまた、困った事がもちあがりはしないかと、心配をいたしたまででございます」

と、妙なことを、しどろもどろにいい出したそうな。

そのとき文蔵は、小兵衛に念を押されたこともあって、あまり深く詮索することをやめ、間もなく引きあげて来たのである。

文蔵の報告を聞きとったのち、秋山小兵衛は四谷の弥七をもよび、金二十両を二人の御用聞きにあたえて、こういった。

「わからずやの越後屋半兵衛などは、どうでもかまわぬが……聞けば、越後屋には、わしが救うた伊太郎のほかに、お千代という六つの子もいるそうな。打ち捨てて置くと、罪とがもない幼い子に害がおよぼう。すまぬが、お前たちで、越後屋の内情を探ってみておくれ。これはすくないが、その費用じゃ」

小兵衛が乗り出すまでもなく、これだけの事件なのだから、当然、町奉行所の調べもおこ

なわれつつあるにちがいない。

それはさておいて、北大門町の文蔵がいうには、

「越後屋へ出入りをしている御用聞きの、湯島の長兵衛が万事を取りしきって、八丁堀の同心方を、いいようにあしらっているのではございませんか」

「そんな奴なのかえ、その御用聞きは……」

「四谷の弥七さんのような人は、めったにいるものじゃあございません」

「おいおい、北大門の……何をいいなさるのだ」

「だって、そのとおりだから……」

「そりゃあ、お前さんのことだよ」

「ま、二人とも、わかった、わかった」

おそらく、湯島の長兵衛は自分の手で曲者どもの居所を探り、突きとめて、自分の手で彼らを始末してしまい、表向きには何事もなかったように事をおさめようとしているのではないか……と、文蔵と弥七はいった。

それが、また、越後屋半兵衛の希望なのでもあろう。

「大きな声では申せませんが……」

と、文蔵が、

「私どもの稼業の裏は、そりゃもう、ひどく汚ねえものなのでございます。弥七さんや私なぞは、女房どもが商売をして暮しを立ててくれますから、おもいきって御用をつとめること

もできますが……それもまた、いのちがけなんでございます。中にはその、どっちが盗人か、わからねえような御用聞きもおりますので……」

「湯島の長兵衛も、その一人かえ？」

弥七と文蔵は顔を見合せたきりで、返事をしてよこさなかった。

そして、いま、秋山小兵衛は、あれから後の二人の探りの報告を元長の二階座敷で聞き取ろうとしているのであった。

「伊太郎とお千代の二人の子は、いま、越後屋にはおりません」

と、四谷の弥七。

「ふうむ。曲者に勾引されるのを恐れて、どこかへ隠したのじゃな」

「そのとおりでございます。それが、おどろくじゃあございませんか。三冬さまが、いつもおいでになる根岸の和泉屋さんの寮の近くなので」

「では、越後屋の寮も、根岸にあったのかえ？」

「さようでございます」

「どうして、つきとめた？」

「越後屋の乳母が、二度ほど、寮と店の間を行ったり来たりしましたのを、傘屋の徳次郎がつけて行きましたので」

「乳母がひとりでかえ？」

「いえ、その前後を、湯島の長兵衛の手の者が護っていたそうですが、なに、そんなことは

傘徳にとっては何でもございません」
「そうだろう、そうだろう。徳も、このごろはしっかりしたものよ。ふむ、それで……?」

五

それから七日の間に、四谷の弥七と北大門町の文蔵はちからを合わせて越後屋方へ探りをかけた。

二人が使っている腕利きの手先の者も、傘屋の徳次郎をはじめとして六人ほどを投入し、密かに探索がつづけられたのである。

何しろ、越後屋は、家族と奉公人を合わせて五十人におよぶ大店だ。それらの人びとのみではなく、たとえば、去年に大川へ死体となって浮んだ大番頭の喜右衛門の家族や、出入りの職人や下男下女に至るまで、弥七と文蔵は見逃さなかった。

越後屋に、
(何やら秘密がある……)
ことに、間ちがいはない。

その秘密ゆえに、越後屋半兵衛は二人の孫のいのちが危険にさらされることも、あえて承知の上で、町奉行所に対して、
「まったく、身におぼえのないことでございます」

と、いい切っている。

それゆえ、奉行所にしても、越後屋からは捜査の足しになるものが得られぬため、
「越後屋の孫を勾引し、身代金を奪うつもりだったのであろう」
ということになってしまった。

ところが、逃げ去った曲者の行方は依然としてわからぬ。

そうなると、ちかごろの町奉行所は面倒になるのかして、短時日のうちに、捜査を打ち切ってしまう。他に事件が山ほどあるのだし、見込みのない捜査をねばり強くつづけるほどの熱意もなければ人手もないのだ。

ことに、今度の事件では、以前から親しく越後屋へ出入りをしている御用聞きの湯島の長兵衛が、
「万事、心得顔に……」
取りしきっているわけだから、奉行所の役人たちも、
「越後屋の事は、長兵衛にまかせておけ」
ということなのだ。

さて……。

弥七と文蔵が七日間の探索の後に、秋山小兵衛へ報告をした件は種々あったが、その中で、もっとも小兵衛の耳を敧たせたのは、一昨年の夏に起った一事件であった。

それは、越後屋の手代で宗吉（当時二十歳）という若者が、越後屋の奥庭の蔵の中で、縊

死をとげたことである。むろん、自殺だ。自殺として処理された。

何故、首つり自殺などをしたかというと、越後屋半兵衛の末のむすめの、お弓（当時十八歳）と、いつの間にやら、

「ぬきさしならぬ仲……」

となり、お弓は宗吉をさそい、自分が幼女のころの乳母だったお兼の家へ逃げた。

けれども湯島の長兵衛が、すぐさま嗅ぎつけてしまい、巣鴨村の乳母の家へ出向き、お弓と宗吉を越後屋へ引きもどしてしまった。

そのときの越後屋半兵衛の怒りは非常なものだったそうな。

半兵衛には跡取りの長男・半太郎がいて、妻お妙との間に伊太郎・お千代の二人の子が生れている。半太郎の妻は十年ほど前に病歿していた。

この妻は、半太郎のほかに二人の子を生んだが、いずれも早く亡くなっている。

だから、末のむすめのお弓は半兵衛の妾腹の子というわけだ。

お弓の母親も、すでに、この世にいない。

半兵衛が、お弓を溺愛する態は、

「ひととおりのものではなかった……」

そうである。

それだけに、自分の目を盗んで、手代風情とただならぬ仲になったと知ったときの越後屋半兵衛の激怒がどのようなものだったか、およそ知れようというものだ。

お弓は、すぐさま根岸の寮（別荘）へ移され、宗吉は蔵の中へ監禁されてしまった。

「さ、そのときに、蔵の中で、越後屋の旦那からいいつけられた大番頭の喜右衛門と湯島の長兵衛から、ずいぶん、ひどい折檻を受けたそうでございますよ」

と、四谷の弥七がいった。

これは、越後屋の下女が、お弓の乳母のところへ行って洩らしたことだ。弥七は、乳母を訪ねて聞き取ったのである。

「なんでも、蔵の中から、宗吉の凄い呻き声が聞えたそうで……いえ、宗吉が口にするものは、長兵衛の手先がいちいち運んだといいます」

「ふむ、それで？」

「それから十日もしてから、宗吉が蔵の中で首を吊って、死んでいたというのでございますよ」

「ふふうん……」

「宗吉が行先にのぞみをなくして、首を吊ったということは、越後屋の奉公人も、うたぐってはおりませんようで」

と、文蔵。

「ふうん……そうかのう……」

秋山小兵衛の声には、あきらかに否定の意味がこめられている。

弥七と文蔵は、目と目を見合せ、うなずき合った。

彼らもまた、小兵衛と同じおもいだったのであろう。

「で、宗吉の身寄りは？」

「母親がひとりおりましたが、ひとり息子の宗吉が亡くなったあと、これも首を吊って……」

「死んだかえ？」

「はい」

小兵衛が、するどく舌打ちをした。

宗吉の亡父は、浅草の元鳥越町に住んでいた腕のよい袋物師だったという。

それから尚も、小兵衛は二人の御用聞きの告げることに耳をかたむけていたが、最後に、

「弥七、文蔵。これは少々、手荒に事をすすめなくては、どうにもなるまいぞ」

と、いったものである。

「で、どういたしましたら？」

「さて、なあ……」

小兵衛は、しばらく考えていたが、気を変えて、

「おはる。そろそろ酒を運んでおいで。のみながら、ゆっくりと打ち合せをしようではないか」

「いえ、とんでもございません」

「いつもいつも、御馳走になるばかりで……」

「ま、よいわさ。のまなくては、よい思案も浮ばぬわえ」

六

上野の山とは地つづきの、谷中の日暮里台に諏訪明神の社がある。その境内の崖の淵に〔吉野屋〕という茶屋があって、ここの女主人のお金は、湯島の長兵衛の妾であった。

崖下は一面の田圃や木立がひろがってい、晴れた日には、彼方に日光の連山や筑波山を望む景観を、吉野屋の奥座敷から、

「ほしいままに……」

することができる。

湯島の長兵衛が吉野屋を買い取り、妾のお金に経営をまかせたのは、もう十年も前のことだ。

ところで……。

その日の夕暮れどきに、吉野屋の奥座敷へあらわれた湯島の長兵衛を迎えたのは、六人の男たちである。

この六人の男たちの中の三人を、秋山小兵衛が見たら何としたろう。

すなわち、越後屋の孫の伊太郎を誘拐せんとした無頼の者二人と、かの編笠の浪人であった。

あとの三人のうちの一人は、長年、湯島の長兵衛の手先をつとめている伝蔵という男だ。
「伝蔵。桶屋の石松が見えねえが……」
盃を手にした湯島の長兵衛がそういった。
低くて、妙にやさしげな声をしている長兵衛は、細身の細面の、とても四十五という年齢には見えぬいい男なのだ。町奉行所での評判もよく、越後屋の大旦那の半兵衛の信頼は非常なものだといってよい。
何か面倒な事が起きると、すぐに、
「湯島の親分に来てもらいなさい」
であった。
長兵衛の父親も、お上の御用をつとめていたそうだが、そのころは越後屋への出入りもなく、長兵衛の代になってから、越後屋へ取り入ったのである。
「それが親分。石松は昨日の昼すぎに出たっきり、家へ帰って来ねえと、野郎の女房がいっておりますんで」
と、伝蔵がこたえた。
「ふうん……奴め、また、品川へでも出かけて流連をしているのじゃあねえか？」
「大きに、そんなところかも知れません。ともかく三日も女を抱かねえと気が狂いそうになるのだそうで」
「てっ。女房ですませておけばいいによ」

と、無頼者のひとりがいった。
「すこし、ふところが暖まると、すぐにこれだ」
と、伝蔵が舌打ちをした。
「ま、いい。石松がいなくとも、手不足というわけではねえし……」
「ですが親分。親分はどうも、野郎をあまやかしていなさいますぜ」
「ま、そういうな。あいつは、ここのお金の甥っ子なのだから、大目に見てやってくれ」
「ええ、ですから私も、虫をこらえているのでござんす」
「すまねえな、伝蔵」
湯島の長兵衛は、親分風を吹かせて威張るようなまねをしないのだが、ちらりと見やる眼の光が刃物のように冷たく冴えていて、その一瞥を受けると、したたか者の伝蔵も沈黙せざるを得ない。
とても御用聞きとはおもえぬ容貌の、この親分の凄さがどんなものかを、伝蔵は骨身にしみてわきまえている。
「さて、明日の夜のことだが……」
と、湯島の長兵衛が口にふくんだ盃を置き、酌をしかけるお金へ、
「お前、廊下にいて、此処へはだれも近づかねえようにしておくれ」
「ようござんす」
お金は、すぐに、廊下へ出て行った。

田の面を吹きぬけて来る風が、もったいないほどに涼しい。

「清水先生。ま、もっと、こっちへ寄っておくんなさい」

「うむ……」

うなずいて、編笠の浪人が躙り寄って来た。いまは笠をかぶっていないこやつは三十四、五歳に見える。引きしまった、いかにも剣客らしい風貌をそなえてい、左の眉尻のあたりから頬にかけて一すじの刀痕が刻まれている。

「清水先生。今度こそは、上野の山のような失敗をなすっては困りますよ」

「親分。今度は、どう考えても大丈夫だ。あのときの爺いのような邪魔が入るわけでもなし……」

いいさした浪人剣客は、苦にがしげに、

「それにしても、あの爺い。どこの爺いなのか……恐ろしい爺いがいたものよ」

「清水先生が、そんなにいいなさるのだから、嘘ともおもえないがね」

「親分。見なくてはわからぬ。いや、ちょっと見ただけでは、あの爺いの恐ろしさはわかるまいが……」

「ともかくも、今度は、その爺さまの出る幕はない」

「そのとおり」

「それでね、先生。明日の夜ふけにやってしまいましょう」

「よし。わかった」

「みんなもいいね?」

男たちが、うなずいた。

「今度は、お前たちにも、いいおもいをさせてあげられるだろう。そのつもりで、しっかりやっておくれ」

「それにしても、親分……」

「何だね?」

「かえって、うまいぐあいになったともいえる。伊太郎のみか、お千代も共に勾引すことができるのだから……」

「まあ、それは……」

「こういうことは、長引かぬうちにやってのけたほうがよろしい。いや、親分に、わしが申しあげるまでもあるまいが……」

長兵衛がうすく笑ったのを見た伝蔵が、他のやつどもへ、

「根岸の寮をまもっているのは、三人ともうちの手先だから、わけもねえことさ」

と、いった。

それから、何やら打ち合せをすましたのち、酒肴が運ばれ、一刻ほどのちに、伝蔵と浪人剣客を残し、他の四人は吉野屋から去った。

「先生と伝蔵は、此処へ泊って行くがいい」

湯島の長兵衛は、お金をよんで、

「もっと、酒を……」
と、いいつけたのち、
「ねえ、清水先生……」
「む?」
「寮にいるうちの手先たちも、あの世へ送って下さい」
「かまわぬのか?」
「かまいませんとも。それを、寮番や女中どもに見せておくのだ。そうすれば、こっちの正体がさとられることもありますまい。まあ、念には念を入れろということさ」
「そのとおりだ。わしにいわせるなら……」
「何でしょう?」
「二人の子供を勾引したあとで、先刻、ここにいた四人にも、いっそ、あの世へ行ってもらったほうがよいのではないか……」
長兵衛が、にやりとして、
「先生が、そうしておくんなさいますかね?」
「してもよい。そのかわり、分け前は……」
「じゅうぶんにさせていただきましょう」
「それで、身代金を受け取るのと引き替えに、子供たちは越後屋へ帰してやりなさるのか?」

「さあ……そいつは、そのときになってから考えればようござんしょう」
「うむ。まあ、な……」
「では、これで、私は湯島へ帰ります。伝蔵、先生のおもてなしをたのむよ」
「承知いたしました」
「では先生。ゆっくりと飲って下さい」
湯島の長兵衛が帰って行ったあとで、清水浪人と伝蔵はひそひそと語り合いながら、時をすごした。
夜がふけてから、伝蔵は別の部屋へ去った。
清水ひとりが、奥座敷へ残り、酒をのんでいる。
しばらくして、廊下に女の影が立った。
「入れよ」
と、清水。
入って来た女は、長兵衛の妾のお金である。
お金は、清水へ寄り添うようにしてすわり、共に酒をのみはじめる。
清水が顔をさしよせ、お金の唇を強く吸った。お金は抵抗もせず、かえってそそられたように体をゆすりながら清水のくびすじを双腕で巻きしめた。
「いよいよ、明日の夜だ」
呻くようにささやき、清水は、たまりかねたように、お金を抱き倒した。

「ええ、明日……伝蔵も、こっちの味方なのでござんすね？」
「うむ。安心をしていろ、お金……」
「ええ……」
お金は、あえぎはじめている。
清水が立ちあがって、二つの行燈のあかりを吹き消した。
帯を解く音が、闇の中に起った。

七

根岸にある越後屋の寮が、曲者どもに襲われたのは、翌日の四ツ半（午後十一時）すぎであった。
越後屋の寮は、時雨岡の不動堂と小川をへだてた南側にある。
越後屋半兵衛は、湯島の長兵衛のすすめによって、可愛い二人の孫の伊太郎とお千代を、この根岸の寮へ隠した。
いうまでもなく、曲者どもによって誘拐されることを怖れたのだ。寮番が一人に屈強の下男が一人、女中二人がつきそい、これに長兵衛配下の手先が三人も泊り込んでいることだし、
「なに、いますこしの御辛抱でございますよ。どうやら、悪者どもの尻尾をつかみかけておりますから、間もなく、一人残らず御縄にかけてごらんに入れます」

と、自信ありげにいう湯島の長兵衛の言葉を、越後屋半兵衛も、若旦那とよばれている長男の半太郎・お妙の夫婦も信じきっていた。
長兵衛の手先が根岸の寮をまもっていてくれることは、取りも直さず、
「お上が、まもっていて下さる……」
ことになるのだから、
「これほど、安心なことはない……」
と、おもい込んでいるのである。
曲者どもの襲撃は「あっ……」という間に終った。
当然であろう。
寮をまもっている長兵衛の手先が、曲者どもを手引きし、屋内へまねき入れたのだからたまったものではない。
しかし、まねき入れた三人の手先は、風のように飛び込んで来た黒覆面の一刀を受け、殺害された。
まねき入れておいて、わざと縛られ、猿ぐつわで口を封じられてのちに斬られたのだから、三人とも悲鳴さえあげることができなかったのだ。
こんなはずはないと、殺された彼らは親分の長兵衛を恨んだことだろうが、それも一瞬の間のことだ。
この間に、六人の覆面の曲者が寮番たち四人を棍棒で撲りつけ、昏倒させてしまっている。

泣き叫びかけた伊太郎とお千代は、たちまちに猿ぐつわをかまされ、手足を縛られ、大きな葛籠の中へ投げ込まれた。

寮の外に小振りの荷車が一つ。

これへ葛籠を積み込むと、

「それ……」

清水浪人の声で、曲者どもは小川をわたり、田圃道を北へ逃走しはじめた。

曇っていて、月もない暗夜である。

彼らは、ひろい田の面を北へ北へと向っていた。

このまま、どこまでも行けば、荒川の岸へ出てしまうことになる。

「せ、先生……」

提灯も持たずに荷車の先へ立っていたのが、はっと立ちどまり、清水浪人を低い声で呼んだ。

「どうした?」

荷車の傍につきそっていた清水が近寄って行くと、

「あ、あれを……」

「何……?」

見ると、前方の右手寄りの木立のところから、一つ、二つ、三つと、提灯のあかりが闇の中をこちらへ近づいて来るではないか。

「や……?」

振り向くと、後方の闇の中にもいくつかの提灯のあかりがゆれうごいている。

「ま、まさか……?」

「手がまわったわけじゃあねえだろうな」

「そ、そんなこと、あるはずがねえ」

曲者どもが口ぐちにささやき合った、そのとき、

「おい、年貢のおさめどきじゃぞ」

闇の底から滲み出たように、小さな人影が田の道へあらわれた。

「おっ……?」

「わしじゃ。先ごろ、上野山内で出合うた爺いよ」

「あ……」

飛び退いた清水浪人が大刀を引き抜きざま、

「みんな、逃げろ!!」

と、叫んだ。

六人の曲者どもは荷車と共に、西へ伸びている田の道を走り出した。

それを追って、四谷の弥七と北大門町の文蔵が指揮する捕方の提灯が、いっせいにうごきはじめる。

秋山小兵衛は右手の提灯を左手に持ち替え、

「おのれらの手先で、桶屋の石松というものをな、一昨日の夕暮れに、品川で捕まえ、すっかり泥を吐かせてしもうたぞ」
「あ……」
「いまごろは、湯島の長兵衛方へも捕方が向っているはずじゃ。お前も観念して刀を捨ててしまえ」
「ぬ……」
清水浪人は晴眼につけた刀を八双に構え直し、じりじりと小兵衛へせまる、
「やるかえ……」
いうや否や、小兵衛の左手の提灯がふわりと宙に舞いあがった。
提灯のあかりに浮んでいた小柄な老人の姿が颯と闇に消え、そのかわりに清水の目の前へ提灯が落ちて来て、燃えはじめたのである。
「うぬ!!」
清水は、提灯が燃えはじめるのを見たか、どうか……。
闇に消えた小兵衛の姿を追いもとめつつ、身をひねって、右の田の面へ目を凝らした清水浪人のうしろで声がした。
「おい、こっちだよ」
「う……」
振り向いたときが、清水の最後であった。

ぴゅっ……と、一閃。
清水浪人の頸動脈を一太刀に切ってはねた秋山小兵衛は、愛刀・藤原国助の血のりを懐紙でぬぐいつつ、地ひびきを打って倒れ伏した清水浪人を見まもっている。
彼方で、乱闘の響みが起った。
捕方たちが曲者どもに追いついたのである。

八

一昨年の夏。
越後屋半兵衛の末むすめ・お弓と駆落ちをし、捕えられて蔵へ閉じこめられた手代の宗吉を、半兵衛が怒りにまかせて折檻を命じたのはよいが、湯島の長兵衛と大番頭の喜右衛門、それに手先どもの度がすぎて、宗吉は急所を棍棒で強打され、死んでしまった。
これでは、越後屋半兵衛が「宗吉殺し」の張本人ということになってしまう。
あわてた半兵衛に、湯島の長兵衛が、
「万事、まかせておいて下さいまし」
と、いい、宗吉が首吊り自殺をしたように見せかけ、うまくおさめた。
このままにしておけば、どうということもなかったろうが、湯島の長兵衛は、自分の悪業を種にして、越後屋半兵衛から大金を奪い取ろうと考えたものだ。

すなわち、一年がすぎた去年の春ごろから、
「自分は、亡き宗吉の遠縁にあたる者だが、宗吉と母親の恨みを屹と、はらさずにはおかぬ」
という脅迫状を送りつけておき、先ず大番頭の喜右衛門を殺して、大川へ投げ込んだ。一つには、秘密を知っている大番頭の口をふさぐことにもなるからだ。
それから、伊太郎とお千代をつぎつぎに誘拐し、合わせて二千両の身代金を引き出そうとはかったのである。
ところが、越後屋半兵衛は衝撃のあまり、家族たちの外出を禁じたりして警戒厳重となったので、湯島の長兵衛も、
「いま、手を出してはまずい」
と、おもい直し、さらに一年がすぎた今年になり、計画を押しすすめた。
今度は脅迫状も送らず、いきなり、伊太郎を誘拐しようとした。
越後屋では、この一年の間、何事もなくすぎたので安心もしたし、それゆえ油断も出た。
浅草の盛り場や、上野の山が好きな子供の伊太郎を、いつまでも閉じこめておくわけにもまいらぬ。それで、長兵衛の手先がつきそって、家族たちも外出をするようになった。
何事も起らぬ。
もう、大丈夫……ということになる。
それに、奉公人たちは何も知らぬのだから、下男の藤八が伊太郎にせがまれると、これを

背負って、近くの上野の山へ出かけることなど、わけもないのだ。
そこを、襲われた。
だが、秋山小兵衛の出現により、これが失敗に終ったので、湯島の長兵衛は、この上、長引いてしまっては機会を逸すると看て、さらに番頭の庄三郎を殺害して、越後屋半兵衛の恐怖をあおっておき、越後屋を説きつけ、二人の孫を根岸の寮へ移させ、一挙に事を起したのであった。
「あの、湯島の長兵衛というやつはな、なまじ、小悧口ゆえ、おのが悪事に策を弄しすぎたのじゃよ。二年がかりで二千両を奪ろうというのだから、仕組みに念が入りすぎて、味方とおもうていたあの浪人と、おのれの妾にも裏切られ、すんでのことに、おのれの寝首を掻かれるところであったそうな。まあ、いずれにせよ、近いうちに打ち首になろうがな……」
と、小兵衛が、弥七と文蔵にいった。
「それにしても、ひどい奴じゃ。越後屋の寮をまもらせておいた、おのれの手先まで殺すような奴じゃ。下手をすると罪もない寮番や女中までも危ないところだったわい」
弥七と文蔵が捕えて来た長兵衛の手先の桶屋の石松を責めぬいて、すべてを白状させた小兵衛は、根岸の寮の見張りをおこたらなかった。
それには、三冬が、もと住んでいた〔和泉屋〕の寮が近くにあったので、小兵衛はすぐさま泊り込み、弥七と文蔵は、ここが見張りの根城となったのである。
弥七と文蔵は、いざというときは、すぐに駆けつけられる根岸の西蔵院という寺へ、十名

の手先を入れておいたのだ。

いまは、すべて始末がついた。

湯島の長兵衛と、その一味は捕えられ、奉行所の取り調べを受けているが処刑はまぬがれまい。

「越後屋半兵衛とて、このままにはすむまいぞ」

と、小兵衛はいった。

いま、越後屋は店の大戸を下ろし、営業を停止し、凝と、しずまり返っていて、奉行所の見張りがつき、家族も奉公人も外出を禁じられているそうな。

今度の事件で、弥七と文蔵の手柄については、町奉行所も、これを評価せぬわけにはまいらぬ。

そして、湯島の長兵衛が親しく取り入っていた役人たちは、長兵衛一味の取り調べがすすむにつれ、

「累が我が身におよぶ……」

ことを怖れ、戦々恐々たるありさまだという。

「あは、はは。よい気味じゃ」

小兵衛は、さもうれしそうに、

「ところで弥七。その、殺された手代と駆落ちをした越後屋の末のむすめの、お弓とかいうのは、いま、どうしているのじゃ?」

「お弓は生みの母親の弟の……つまり、実の叔父にあたる人のところに、去年から身を寄せているそうでございます」

「浅草の東仲町に、小ぎれいな店を出しておりますよ。はい、仲本屋という小間物屋なので」

と、文蔵が引き取った。

「どうしているかな、そのむすめ……?」

「昨日、弥七さんと二人で、仲本屋の前を通りましたら、お弓が店先で、客の応対をしておりましたっけ」

「ほう、ほう……」

「すっかり元気になったらしく、まるで、実の父親の越後屋のことなど忘れたような笑い顔でございました」

「だが、今度の事では、その仲本屋へも奉行所の調べが行ったのだろう?」

「はい。ですが、仲本屋は何の関わり合いもございません」

「ふむ。なれど……」

「お弓は、越後屋半兵衛を憎んでいこそすれ、心配なぞ、してはおりませんようでございます」

「それはまあ、好きな男との間を引き裂かれたのだものなあ……」

「はい」

「そのうちに、わしも仲本屋へ何か買物に行き、お弓とやらの元気な顔を見て来ようわえ。女はな、ことに若い女は強いものよ。過去(むかし)のことなぞ、すぐに忘れてしまうものなあ……」

おはるが台所から顔をのぞかせ、

「若い女が、どうかしたのですかよう？」

と、小兵衛をにらみつけた。

弥七と文蔵は、笑いをこらえた。

小兵衛は憮然(ぶぜん)として、暮れなずむ庭先に咲いている夏菊の群れへ目を移した。

決闘・高田の馬場

一

その日の早朝。

秋山大治郎(あきやまだいじろう)は、門人の笹野新五郎(ささのしんごろう)をつれて、日本橋・本銀町(ほんしろがねちょう)四丁目にある間宮(まみや)道場へおもむいた。

間宮孫七郎(まごしちろう)も、秋山父子(おやこ)の亡師・辻平右衛門(つじへいえもん)直正(なおまさ)の門人で、秋山小兵衛(こへえ)にとっては、

「弟弟子(でし)」

と、いうことになる。

人格が立派な上に、教導の仕方が巧妙な間宮孫七郎は、門人の性質をそれぞれに看ぬいて、その特徴を生かした剣術を身につけさせる。

なればこそ、小兵衛が、

「間宮が引き受けてくれたので、わしは安心をして隠居できる」

と、江戸の剣術界から引退した折には、わが門人の大半を間宮道場へ依託したのであった。

「いうところの、名人でも豪傑でもない」

と、小兵衛に評された間宮孫七郎だが、秋山大治郎は、

「間宮さんには、教えられることが多い」

かねてから妻の三冬にも、洩らしていた。

この朝。笹野新五郎をつれて、間宮道場をおとずれたのも、

「私が、田沼様御屋敷へ稽古にまいる日は、間宮道場へまいって、稽古を見ていただくがよい」

このことを、間宮孫七郎へたのむためであった。

いまの大治郎の門人といえば、田沼家の家来たちは別として、飯田粂太郎と笹野新五郎の二人のみである。

いまのところ、飯田粂太郎は田沼家に奉公する身でもあり、日々、大治郎に付きそっているわけだが、

「いずれは、粂太郎も間宮道場へ通わせるつもりでいる」

と、大治郎は、不満そうな笹野新五郎にいった。

「おぬしと粂太郎が私のたいせつな門人であることに、いささかも変りはない。なればこそ、私は、若くて至らぬ自分に不足しているものを、間宮さんによって、おぬしへ与えたいのだ」

こういわれて、新五郎もようやく納得をしたようだ。

今年の初夏のころ。

六百石の笹野の家を義弟へゆずりわたした新五郎は、あのときの忌わしい事件を、すっかり忘れきったような明るい顔貌になり、小兵衛の口ききにより、いまは本所亀沢町の町医者・小川宗哲宅へ寄宿させてもらっている。

「これは、よい人が来てくれた」

と、宗哲は大よろこびであった。

なぜなら、笹野新五郎は碁も将棋もよくする。

「こういう碁敵が傍にいてくれれば、わざわざ、鐘ケ淵の古狸を訪ねることもない」

夜になると宗哲は、新五郎を碁盤の前からはなそうともせぬとか……。

笹野新五郎を間宮道場へ残し、やがて秋山大治郎は、神田橋御門内の田沼意次邸へ向った。

すでに夏の太陽が昇りきって、道行く人びとの顔には汗がにじみ出している。

江戸でも屈指の商業地区の中にある剣術道場はめずらしかった。このあたりでは間宮道場のみといってよい。

神田堀の南岸、地蔵橋のたもとにある間宮道場を出た秋山大治郎が、江戸城の外濠へ向って歩みはじめた。

大治郎の額には、うす汗さえも浮んでいない。

そのとき、今川橋の方から、こちらへ向って来る四十前後の侍を逸早く見つけた大治郎が、

「吉村さん……」

と、呼びかけた声を呑んだ。

その侍は、吉村弥惣治といい、父・小兵衛の古い門人なのである。

小兵衛も吉村弥惣治には、相当に深いところまで、きびしく教え込んでいたし、

「先ず、わしが弟子の中では、わしに恥をかかせぬやつよ」

などと、いっていたものだ。

いまも弥惣治は、折にふれて、鐘ケ淵の隠宅へ、恩師の機嫌うかがいにやって来るそうな。

「ありゃ、浅蜊の佃煮じゃ」

などと、口の悪い小兵衛が綽名をつけたほどの色の黒い顔をうつむけ、両腕を組み、唇を一文字に引きむすんだ吉村弥惣治は、本銀町三丁目の蠟燭問屋〔大隅屋〕の前で大治郎と擦れちがったが、こちらを見向きもせず、間宮道場の方へ黙念と歩いて行く。

(はて……?)

大治郎は、解せなかった。

肩と肩とが擦れ合ったほどなのに、

(私に気づかぬ吉村さんではないはずだが……)

このことである。

そもそも弥惣治ほどの剣士が、何事かおもいつめていて道行く人びとにも気をつけることなく、むしろ虚脱の面もちで歩行をしているというのが大治郎にはうなずけぬ。

秋山小兵衛引退後の吉村弥惣治は、他の門人たちと共に間宮道場へ移り、いまでは間宮孫七郎も弥惣治を何かにつけて、

「たよりにしている」

とのことだ。

何本もの針金を縒りに縒って打ち固めたかのような、体軀は細いが、弥惣治の鍛えぬかれた筋肉のすばらしさは大治郎もよく知っている。

おもわず、大治郎は踵をめぐらし、吉村弥惣治の後からついて行った。

弥惣治は、どうしたことか、間宮道場へ入ろうともせず、通りをへだてた薬種問屋〔大和屋〕の軒下に佇み、何やら沈思しているではないか。

向い側の表具師と、〔播磨屋〕という旅籠の間の細道を入り、突き当ったところが間宮道場なのだ。

「どうなされた？　吉村さん」

以前の秋山大治郎ならば、

声をかけたにちがいない。

だが、このごろの大治郎は父ゆずりの思慮がはたらくようになってきて、いまここで自分が声をかけることにより、吉村弥惣治に新たな動揺をあたえることになってはならぬと、直感したようだ。

弥惣治は、三度ほど、間宮道場への細道へ入りかけてはためらい、そのたびに大和屋の軒

下へもどって来る。
弥惣治は、何やらの苦悩にさいなまれているらしい。
間宮孫七郎との間に、何か紛争でも起ったのか……。
（いや、そうではあるまい）
と、大治郎はおもい直した。
このとき、吉村弥惣治が大和屋の軒下をはなれた。
弥惣治は、地蔵橋をわたり、紺屋町の方へ去った。
秋山大治郎も、田沼屋敷での稽古の時間がせまっていることだし、いつまでも弥惣治の後をつけて行くわけにもまいらぬ。
あきらめて、大治郎は身を返した。
その翌朝……。
浅草橋場の道場へあらわれた笹野新五郎へ、大治郎が、
「昨日は、どうだったな？」
「はい。間宮先生が直き直きに稽古をつけて下さいました」
「それは、よかった」
「はい」
「ときに、重だった門人衆には引き合わされたのだろうな？」
「はい」

「その中に、むかしは私の父の門人で、吉村弥惣治という人はいなかったか？」
「おいでになりませんでした」
「おぬしは何刻まで、道場にいたのだ？」
「はい。七ツごろまでおりましたが……」
七ツといえば午後四時である。
となると、吉村弥惣治は、あれからも間宮道場へあらわれなかったことになる。
大治郎は、飯田粂太郎と笹野新五郎へ稽古をつけたのち、昼餉をすませてから、妻の三冬へ、
「鐘ケ淵へ行ってまいる」
「はい。父上へよろしゅう」
「うむ」
父の隠宅へ着くと、秋山小兵衛はおはるの膝枕で昼寝をしていた。
「アレ、いやだよう若先生。急に庭から入って来て、びっくりした」
おはるが顔を赤らめ、台所へ走り込んで行った。
「なんだ、せっかく、よいこころもちになっていたのに……」
「相すみませぬ」
「どうした？　何か急な用かえ？」
「実は、父上……」

大治郎が昨日のことを語るのを聞き終えて、
「ふうむ……そりゃ、弥惣治に似合わぬことじゃな」
「父上も、さようにおもわれますか」
「おもう」
愛弟子の一人だけに、小兵衛も気がかりな様子で、
「何か悩み事があるなら、何故、わしのところへ来ぬのか……」
「はあ……」
「これは、尋常のことではないらしいな」
「私も、さようにおもいます」
「ともかくも、ありがとうよ。よしよし。退屈しのぎにちょと当ってみるかのう」
吉村弥惣治は、神田の駿河台に屋敷を構える八千石の大身旗本・高木筑後守元好の家来である。
高木筑後守は非常に武芸を好み、みずからも宝蔵院流の槍をつかうだけあって、吉村弥惣治が剣術にはげむことをよろこんでいるという。

二

（それにしても、おれの武芸が、このような大事に関わり合うとは、おもうてもみなかった。

剣術なぞ、やらねばよかったのだ。取り返しのつかぬことになってしまった……）
高木筑後守の屋敷内にある自分の住屋で、吉村弥惣治は、またも、
「眠れぬ夜」
を迎えた。
この四、五日は、ほとんど眠れぬ。
そのため、
「間宮道場へ行く……」
ということにして、浅草の平右衛門町にある船宿〔吉野屋〕へまわり、二刻（四時間）ほど、うつらうつらと仮眠をとることにしている。
吉野屋は、以前、恩師の秋山小兵衛がひいきにしていた船宿で、その当時は、たびたび弥惣治が供をして来たものだ。
隠居してからの小兵衛は自前の小舟を所有し、おはるが舟をあやつるものだから、吉野屋へも、
「めったには、お見えになりませぬ」
とのことだ。
だからこそ弥惣治も、安心をして、吉野屋の二階の小座敷へ入り、酒をのんで、夜の不眠を取り返そうと努力している。
（おれは……おれは、このようなことのために、剣術をまなんだのではなかった。秋山先生

が、このことを耳になされたら、何とおっしゃることか……)

むろん、以前の恩師である秋山小兵衛にも、現在の師・間宮孫七郎へも、今度の大事を打ちあけて、教えを請いたいとおもったか知れぬ。

しかし、二十何年もこの道に励んで来て、いまは間宮道場の代稽古をつとめているほどの自分が、

「これこれで、まことに困惑しております。いかがいたしたらよろしいでしょう?」

と、相談をもちかけるのは、

(まことにもって、恥ずべきこと……)

ではないか。

要するに、今度の試合において、

(おれが勝てばよい)

ことなのである。

それで、こちらの方は万事、うまくおさまるのだ。

そのかわり、相手方では、ひどい犠牲が出る。

真剣の勝負をするわけではないが、勝負のあとで、双方のどちらかに一大事が起る。

もしも、吉村弥惣治が負けたときは、主人の高木筑後守元好は、

「生きてはおられぬ」

はっきりと、弥惣治にいいわたしたものだ。

また、弥惣治と木太刀をまじえる相手の羽賀儀平が負けたときは、羽賀の主人の久世帯刀も、おそらく、

(生きてはおられまい……)

と、弥惣治は看ている。

久世帯刀は、芝の愛宕下に屋敷を構える七千五百石の大身旗本で、これも非常な武芸好みなのだ。

高木筑後守も久世帯刀も、寄合組(大身旗本で幕府の役職に就いていない人びとによって編成されている)に列しており、共に肝煎をつとめているところから交際もあり、さらには二人とも武芸好みゆえ、はなしも合うということなのだ。

ところが、七日ほど前に……。

高木筑後守が久世帯刀邸へ招かれた折、久世の家来・羽賀儀平その他が庭前において剣技を披露した。

「いかがでござる」

と、久世帯刀は得意げに高木筑後守を見やった。

かねてから、筑後守が、家来の吉村弥惣治の剣技をほめそやしてやまぬことを、帯刀は、

(なんの。いかな達者といえども、わしの羽賀儀平に敵うものか)

と、ひそかにおもっていたのだ。

そのおもいが、羽賀の剣技披露となったらしい。

いや、五人を相手にして、これを瞬く間に打ち倒す羽賀儀平のあざやかな手練を見せつけるために、わざわざ高木筑後守を招待したのやも知れぬ。

「何の……」

高木筑後守が奮然として、

「まさに見事なる手なみなれど、身どもが家来・吉村弥惣治にはおよぶまじ」

と、やった。

二人とも、かなり酒が入っていた所為もあり、久世帯刀も、このまま黙っているわけにまいらなくなってきた。

「いやいや、羽賀儀平に打ち勝てようとはおもわれぬ」

「何の!!」

「何の!!」

たがいに高声を発した結果、ならば羽賀と吉村に勝負をさせてみようではないか、と、いうことになってしまった。

こうなれば双方ともに、後へは引けぬ。

試合の場所は、城北・高田の馬場と決った。

高田の馬場は、かの赤穂義士の一人・堀部安兵衛武庸が義理の叔父の助太刀をした名高い場所であって、わざわざ、こうした場所を選ぶところに、二人の〔殿さま〕の誇大感覚が看てとれる。

秋山小兵衛にいわせれば、

「世の中のことも、人のこころもわからぬお坊ちゃまが、大人になっただけのことよ」

と、いうわけである。

そして、羽賀・吉村の試合だけで、はなしがすんだのならよかった。

それならば吉村弥惣治も、何ら苦悩することはない。

ただ、渾身のちからをかたむけて、羽賀儀平と勝負を決するの一事あるのみだ。

ところが、久世帯刀の屋敷から帰邸した高木筑後守は昂奮さめやらぬままに、一通の書状をしたためて、

「これを久世帯刀殿へ届けよ」

と、命じた。

すなわち、

「もしも吉村弥惣治が負けたるとき、自分は、わが家の先祖が神君より賜わった政常の銘刀を差しあげる。そのかわり、吉村が勝ちたるときは、貴殿の家宝の国光の短刀を申し受けたい」

と、書き送ったのだ。

高木筑後守の先祖・伝七郎元国が、徳川初代将軍・家康から拝領したという相模守政常一尺二分二厘の脇差は、徳川将軍の家臣として、それこそ家重代の宝物というべきものだ。

これは、久世帯刀の先祖・十左衛門景行が、これも徳川家康から拝領した新藤五国光七寸

五分の短刀にしても、同じことなのである。

両家の名誉と誇りが、拝領の刀にこめられている。

この宝剣を手ばなしたことがわかれば、徳川将軍の臣として、

「切腹は、まぬがれぬ」

ことになる。

「なればこそ、かならず後れをとってはならぬぞ」

と、高木筑後守は、ひそかに吉村弥惣治をよんで厳命を下した。

おそらく久世帯刀も、羽賀儀平へ同じような厳命を下したにちがいあるまい。

（殿は、また、なんという賭を為されたのだ……）

弥惣治の苦悩は、ここに在った。

七千石、八千石の大身旗本といえば、小さな大名のようなもので、役職に就くときは将軍側近の役目が多い。およそ三千坪の屋敷を構え、家来も十数人。奉公人を合わせれば、五、六十人の主ではないか。それが、家来の武芸を誇るあまりに試合をさせ、しかも家重代の宝物を賭けるとは何ということだ。

そもそも大身の旗本ともなれば、

「人の模範」

ともなるべきはずであった。

それが、いのちがけの賭をするというのは、弥惣治にとって、

（うらめしきかぎり……）

のことである。

こちらが負けても相手が負けても、主人が切腹となれば、必然、事のしだいが幕府の耳へ入る。

入れば、当然、双方の家は取りつぶされてしまう。

双方の家族も奉公人も、

「路頭に迷う……」

ことになりかねないのだ。

（剣術の試合が、このように、他へ悪しき影響をおよぼしてよいものか、どうか……）

吉村弥惣治の悩みは、ここにあった。

高木筑後守も久世帯刀も、家宝の刀を賭けたことのみは他へ洩らしていないけれども、双方の屋敷では、試合の事を知った奉公人たちが、それぞれに金品を賭け合い、試合の日を待ちかまえているそうな。

それも弥惣治にとっては苦にがしい。

「ああ……」

おもわず深いためいきを吐き、寝返りをした吉村弥惣治の耳へ、

「もし……もし……」

襖の向うから、妻の三津の、ひそやかな声がきこえた。

この年、四十一歳になる弥惣治は、三津との間に清という十五歳のむすめをもうけていた。
「もし……もし、旦那さま……」
三津も清も、毎日、交替で神田明神へ通いつめ、弥惣治の勝利を祈念しているらしい。
「もし……まだ、おやすみになれませぬのか？」
弥惣治は呼吸をつめて、こたえなかった。
「もし、もし……」
やがて、妻のささやきは熄んだ。
試合の当日は、四日後にせまっている。

三

伜の大治郎から、吉村弥惣治の不可解な様子を知らされた翌朝になって、
「おはる。ちょいと出かける。飯の仕度を急いでおくれ」
起きるとすぐに、小兵衛がいった。
雨戸を開けると、朝の微風が冷んやりと居間へながれ込んできた。
「先生。日中は、また、暑くなりますよう」
「ああ、覚悟をしている」
「暑いときは、昼寝していなさるがいいとおもうのだけどねえ」

「わしだって、そうしたいさ」
「いったい、どこへお出かけなんですよう？」
「ちょいと、吉村弥惣治のことでな……」
「アレ、何か、あったのですかよ？」
「昨日、大治郎から耳にしたことがある。ちょいと心配になってのう」
「アレ、まあ……」
おはるは、吉村弥惣治に好感をもっている。
関屋村の百姓・岩五郎の次女に生れたおはるは、十七のとき、四谷の小兵衛宅へ下女に雇われた。
すると、どこが気に入ったものか、すぐに小兵衛が手をつけてしまい、
「ああ、この年齢になって、こんな相手ができたのだから、剣術なんぞやっている暇はなくなったぞ」
などと、小兵衛がいい出し、道場をたたみ、鐘ケ淵へ隠棲することになった。
そして、そのまま、おはるは四十も年上の、小兵衛の妻となったわけだが、下女のころのおはるを知っている吉村弥惣治は、こうなると、あくまでも恩師の妻として敬うようになる。
それが何としても、
「くすぐったい……」
おはるなのだが、そこは女だ。うれしくないはずはないのである。

それ以上のことは立ち入って尋こうともしなかったが、おはるは、いくらか緊張の面もちとなり、朝餉の仕度を急いだ。

今朝も暗いうちに、たんねんに出汁をとってこしらえた味噌汁を鍋ごと大きな笊に入れ、裏の石井戸の中へ吊し下ろし、よく冷やしておいた。

小兵衛はこれを「冷やし汁」などとよんで、夏の大好物の一つにしている。

この冷やし味噌汁の中には、絶対に実を入れない。

それと、これも早くから炊きあげて冷ましてある飯。

ほどよく漬けた茄子の香の物へは、溶き芥子をそえ、それに葱をきざみこんだ炒卵で、小兵衛が飯を三杯もおかわりしたものだから、

「そんなに食べて、大丈夫かね、先生……」

「年寄りが日盛りの町へ出て行くのじゃ。これほどにしておかなくては、精気が失せて霍乱を起してしまうわえ」

「アレ、いやだよう、先生……」

「もし、そうなったらどうする？　二度と、お前をかまってやれなくなるぞよ」

「困りますよう」

「ならば、せいぜい、うまいものを食べさせることじゃ」

「あい、あい」

白い帷子に軽衫ふうの麻の袴をつけ、今日の小兵衛は大小の刀を腰に帯し、真新しい菅笠

を日よけにかぶり、竹の杖を持ち、隠宅を出た。

ときに五ツ（午前八時）ごろであったろうか。

小兵衛が、両国橋をわたるころには、日も高くなり、今日もまた快晴である。

（もしやして、大治郎の、おもいすごしなのではあるまいか……？）

吉村弥惣治の苦悩については、何一つ知らぬ小兵衛だけに、

（もしも、弥惣治が、おのれ一人でさばきかねる悩み事などあれば、わしのところへ相談をもちこんで来るはず……）

なのだが、めったに、こうしたことを父の自分へ告げには来ぬ大治郎の言葉を、

（大形な……）

と、聞き捨てるわけにもゆかぬ。

（伜の看たことじゃ。たしかに弥惣治の身に、何やらの異変が起ったのであろう）

両国橋をわたり、広小路の人ごみを避け、米沢町三丁目の商家に沿って歩む秋山小兵衛へ、

「もし……もし、秋山先生ではございませんか」

声をかけたものがある。

笠をあげて振り向いた小兵衛が、

「おお。近江屋さんかえ」

「毎日、お暑うございますなあ」

と、近寄って来たのは、近くの薬研堀に店舗を構える書物問屋の主人・近江屋伊助であっ

た。

　伊助は、まだ四十をこえたばかりだが、小川宗哲宅へ出入りをし、医書などをおさめていて、宗哲の碁敵の一人なのだ。

　小兵衛にいわせると、

「伊助のほうが、まだしも宗哲先生より、歯ごたえがあるわえ」

　とのことで、小兵衛宅へもやって来ては碁盤を囲むようになった近江屋伊助だが、おはるは、この近江屋の来訪を非常によろこぶ。

　なぜなら、薬研堀不動門前の料理屋〔草加屋〕の立派な折詰を、かならずみやげに持って来てくれるからだ。

「このところ、すっかり御無沙汰をいたしております。何しろ、こう暑くては碁石をつまむのも億劫になりましてな」

「わしも、さ」

「宗哲先生のお宅へも、それではお出かけになりませぬので？」

「とんと行かぬ」

「それでは宗哲先生、さぞ、じりじりしておいでてございましょうな」

「いや、それがな。近ごろは、よい相手ができて、毎夜々々、碁盤に向っているそうな」

「へへえ。そりゃ大したもので」

「しかも、その男は住み込みで、すこしも嫌がらずに相手をしてくれるそうじゃよ」

「そりゃまた、どこのお方なので？」

「まあ、宗哲先生を訪ねてごらん。そうじゃ、お前さんにも、ちょうどよい相手じゃろうよ」

「ときに先生。今日は、どちらへ？」

「いや、それがな……一応は、神田の……さようさ、駿河台のあたりまで行って見ようか、それとも本銀町のあたりまで出かけようかと、おもっているのじゃ」

「へへえ……？」

　近江屋が、いぶかしそうに、小兵衛をながめた。

「では、ごめん」

「まあ、先生。ちょいとお立ち寄り下さいまし。ひとやすみなされまして、行先がはっきりと決ったところで、駕籠をよびますでございます」

　と、近江屋伊助が小兵衛の腕をとらえ、

「それに、ぜひ、先生のお耳へ入れたいこともございましてな」

「何のことじゃ？」

「はい。私のむすめが、愛宕下の久世様の御屋敷へ御奉公にあがっていることは、先生も御存知でございましたな」

「ああ、聞いた」

「それが、先生……」

と、小兵衛の腕をとらえて、すぐ近くの自分の店へ歩み出しつつ、近江屋が、

「ちかごろ、おもしろい、ばかばかしいことなので……」

「ふうむ……」

「久世様の御家来が、何でも、高木筑後守様の御家来と、剣術の試合をなさるのだそうで……」

「……?」

笠の内で、小兵衛の目が煌りと光ったのを、近江屋伊助は、すこしも気づかぬ。

「一昨日から昨日にかけて、むすめが特別に宿下りをゆるされ、帰ってまいりましたので、むすめの口から耳にいたしました」

近江屋伊助の妻が、この梅雨どきに体をこわし、寝込んでしまっているので、その見舞いに、むすめのお初が実家へ帰ることをゆるされたものらしい。当時の商家のむすめが大身の屋敷へ行儀見習いの奉公にあがることは、大切な嫁入り道具の一つといってもよかった。つまり、箔がつくことになるからだ。

「先生。高木筑後守様は、八千石の御大身だそうで」

「そうだったか、な……」

「ま、お入り下さいまし。こりゃ、まかり間ちがうと、うちのむすめも、お屋敷にはいられなくなるかも知れませぬ」

そういった近江屋伊助の顔は、さも、おもしろげに笑いくずれていた。

四

近江屋伊助が語るところによると、

「羽賀儀平は、かならず勝つ!!」

と信じきっている主の久世帯刀は、

「わしはな、高木筑後守殿と賭をいたしたのじゃ」

家来たちに、いい放ったらしい。

さすがに、賭けた物が何であるかは洩らさなかったけれども、

(筑後守は、とんだことをいい出されたものじゃ。もはや、引くに引けまい。神君より拝領の脇差をわしに差し出した後になって、筑後守は、いったい何とするつもりなのであろう……)

いまから、そう、おもいこんでいる。

中小姓をつとめる羽賀儀平は、まだ独身で、当年二十五歳。

御徒町に道場を構える東軍流・斎藤五郎左衛門兼継の許へ十歳のころから入門し、斎藤道場では五指に数えられるほどの剣士だ。

六尺におよぶ堂々たる体軀には、立ち向って面をそむけざるを得ぬほどの若わかしい活力がみなぎりあふれ、体毛が濃くて、眼光は何時も炯々としており、屋敷の侍女などは向うか

ら羽賀儀平がやって来ると、
（おお、怖……）
物蔭に隠れて、羽賀が行きすぎるのを待つというありさまなのだ。
武芸好みの〔殿様〕にとって、羽賀儀平は、家来の中でも、
「愛いやつ」
ということになるわけだが、折があると、殿様の久世帯刀は、家来たちをあつめて羽賀と闘わせ、酒盃をかたむけつつ、これを見物する。
闘うといっても、はじめから勝負にならぬのだ。
そこで、殿様が、
「今日は二人一度に立ち向え」
とか、
「今日は、三人で羽賀の相手をいたせ」
とか、いろいろに趣向を変えて見物をたのしむ。
二人でかかっても三人でかかっても、羽賀儀平の激烈な打ち込みをくらって、瘤をこしらえるのが関の山なのである。
相手をさせられる家来たちにとっては、
「おもしろくない……」
のも、当然であったろう。

そのためか、
「おれは、高木筑後守様の家来・吉村某が勝つとおもう。いや、ぜひとも勝たせたい」
ひそかに意気ごむ家来たちがすくなくない。
また、
「いや、いかに吉村弥惣治が強くとも、うちの、あの化け物には敵うまいよ」
と、いうものもいる。
「よし。では、賭けてもよいぞ」
「何……」
「殿様も高木筑後守様と、何やらをお賭けあそばしたというではないか」
「うむ、聞いた」
「ならば、どうだ。おぬしが、さほどに、うちの化け物の勝利を信ずるならば、どうだ、賭けてみるか」
「よし。何を賭ける？」
「金一両」
「ばかな……」
「では二分」
「それなら、よし」
「おれもだ」

「私も賭けよう」

というわけで、これが家来たちから、足軽・小者にまでひろがってしまった。

それのみか、奥向きの侍女までが、これはさすがに金ではなく、大切にしている簪や笄などを賭け合って、

「あの憎たらしい羽賀さまなど、負けておしまいになればようございますのに」

「いえ、それはそうですけれど、とてもとても、あの化け物さんには敵いませぬ」

などと、夢中になっているらしいのだ。

「いえ、秋山先生。うちのむすめは、決して、そんなまねをいたしてはおりませぬが……」

と、近江屋伊助が小兵衛に念を入れた。

吉村弥惣治が、以前は小兵衛の門人であったことを、むろん、近江屋は知っていない。

「なるほどのう……」

聞き終えて、秋山小兵衛が、

「将軍家の家臣の中でも、それと知られた方がたの御屋敷内で、そのようなことがおこなわれ、おぬしの耳へも洩れ聞えるとあっては……こりゃもう、世も末といわねばなるまい」

「えっ……?」

近江屋が、びっくりして、

「世も末と申されますと?」

「徳川将軍の世も末ということよ」

「な、何とおっしゃいます。そ、そんなことになったら一大事ではございませんか」

「なあに……」

小兵衛は、にやりとして、

「その後には、おぬしたちの世の中がやって来るさ」

「へえっ……?」

「金もあり、知恵もある、おぬしたち町人の世の中になろうよ」

「と、とんでもないことでございます」

「なあに、あわてるな。いまも金の世の中になってきている。かまわぬから、金のちからで天下を掻きまわしてしまえ」

「お、恐ろしいことをおっしゃいます」

「なあに、肚の中では、さほどに恐ろしいともおもっていないくせに」

「お声が、高うございますよ」

「鮒は安いな」

結局、小兵衛は近江屋の離れ座敷で、伊助を相手に碁を打ち、おそい昼餉をよばれたのち、

「さて、ぶらぶらと出かけようか……」

「お帰りでございますか?」

「いんや……」

「では、行先がお決りに?」

「うむ。駕籠をたのむ。神田橋御門外まで、な」
「かしこまりましてございます」
近江屋を出た秋山小兵衛は、神田橋門内の田沼意次邸へおもむき、大治郎が、邸内の道場の稽古を終えるまで待っていた。
「お待たせいたしました」
道場から出て来た大治郎と共に、田沼邸を出た小兵衛が、
「途々にはなそう。途中で、何か、うまいものを見つけたら、そこへ入ってもよい」
「はい。父上。吉村弥惣治のことでございますな」
「うむ。今日な、おもしろいはなしを耳にしたわえ」
「ははあ……」
「はなしはおもしろいが、こいつ、ちょいと面倒じゃぞ」

五

夜になって……というよりも、まだ、日が落ちきらぬうちに、木挽町六丁目の料理茶屋〔石河屋平八〕方へ、この暑いのに塗笠で顔を隠した中年の侍が入って行った。
高木筑後守の家老・坂西房之助である。
すこし遅れて、これも笠に顔を隠した老年の侍がひとり。

これは、久世帯刀の家老・谷万右衛門である。
坂西も谷も、石河屋のなじみの客といってよい。
それなのに、笠で顔を隠して来たのは、石河屋へ入るところを他人に見られたくなかったからだ。
二人の家老は、奥まった座敷で顔を合わせた。
昨日も一昨日も、この時刻に二人の家老は、この場所で密談をかわしていたのである。
「おお、遅れて失礼を……」
「何の、何の……」
「ときに坂西殿。いかがでござった？」
「上首尾でござる。昨夜、ようやくに、主人を説きふせ申した。そちらはいかが相なりましたか？」
「こちらも、上首尾でござる」
「まことに？」
「まことでござる」
「そりゃ、何より……」
「大慶至極」
期せずして、二人の家老は手を握り合い、うれしげに笑い出した。
笑いながらも、二人の目からは熱いものがふきこぼれてきた。

久世帯刀は羽賀儀平の勝利に、いささかも疑念を抱いていない所為もあったろうが、家康より拝領の短刀を、勝負に賭けたことを、さも得意げに、家老の谷万右衛門へ語ってしまった。

　聞いて、おどろいたのは谷家老である。

（このような事が、もしも、世間へ洩れたりしたら、取り返しのつかぬことになる。事もあろうに、東照宮様より御拝領の国光をお賭けあそばすとは、何という軽はずみな……）

と、谷万右衛門は、あわてた。

　もとより、自分の主人が思慮のあさい人物だということを、この家老はよくわきまえているだけに、このうわさがもしも世間へひろまり、幕府の耳へでも入ったなら、

（それこそ、一大事……）

だとおもった。

　たとえ、羽賀が相手の吉村に勝ったとしても、主人が幕府から咎めを受けることは必定である。

（そもそも御家柄をも、おわきまえあそばさず、賭事をあそばすとは、もってのほかじゃ）

　剣術の試合をとどめるわけにもまいらぬが、家宝の短刀を賭けることだけは、なんとしてもやめさせなくてはならぬ。

　しかし、

「もってのほかのことでございます!!」

と、正面から、諫言をしたのでは、わがままで短気で強情な主人が素直に聞き入れてはくれまい。

　そこで、谷万右衛門は、高木筑後守の家老・坂西房之助へ使いの者を送り、

「高田の馬場における試合の件につき、打ち合せをいたしたく、ついては、木挽町の石河屋まで、お出むき下されたい」

と、つたえさせた。

　かねてから交際のある両家の家老だけに、いうまでもなく面識のある二人だ。

「坂西殿も、筑後守様より、お聞きおよびのことでござろうが……」

　谷家老が殿様どうしの賭事について語るや、

「ええっ……」

　坂西房之助は、驚愕して、

「そ、それは、まことのことで?」

「では、御存知なく……?」

「はて……」

「あるじ、筑後守は何も申しませなんだ……」

「いや、谷殿。これは何としても、おとどめいたさねばなりますまい」

「いかにも」

「よく、打ち明けて下された」

「たがいに、苦労が絶えませぬなあ」
「ごもっとも、ごもっとも」
二人は、その翌日も石河屋で密談をおこない、ようやく、一つの結論に達したのである。
翌朝になって……。
坂西房之助は、高木筑後守の居間へおもむき、
「こたびの試合にて、久世様と賭事をあそばしたそうにございますな」
「何……たれに聞いたぞ?」
「実は昨日、久世様の家老・谷万右衛門殿より、ひそかに申し出がございまして……」
「何じゃと?」
「久世帯刀様は、殿と件の宝刀をお賭けなさる御約束をなされました、その後で、後悔をなされましたそうでございます」
「ほう……」
「なにぶんにも、お賭けあそばしたものが、東照宮様より御拝領の……」
「それが、いかがした?」
「このことが万一、世上へ洩れ聞えましたるときは、徒事ではすまぬことを、お気づきなされたのではございますまいか……」
「ふむ……」
おもてには出さぬが、実は筑後守も、自分から申し入れたことなのに、

(いささか、軽率であった……)
悔むこころが日毎につのり、その不安を、
(かくなれば、何としても弥惣治に勝ってもらわねばならぬ)
おもいつめていたところなのである。
「久世様は、御約束を……」
「いまさら、約束を破ると申すのか?」
「殿。これは、こちらにも、ちょうどよい折ではございますまいか」
「何を申す。武士たるものが、いったん約束をなしたるからは……」
「他の品物をお賭けあそばせ。これは、たとえ試合に勝ちましても、俗に申す帳消しには相なりませぬ。のちのち、世間へ洩れましたるときは、何となされまする?」
「むう……」
「せっかくに久世様の方より申し出られたのでございますから、殿も、ここは、こころよく御承知をなさいますれば、久世様も、どのようによろこびなされますことか」
「久世帯刀め。意気地のないやつ」
「久世様は、後悔なされておわします」
「わしは、後悔などしておらぬぞ」
「久世様を、おゆるしなされませ。ここは何もなかったことにいたされるがようございます」

「久世をゆるせと申すか?」
「そのとおりでございます」
「ふむ……、いや、それはな、ゆるしを請うているのなれば、ゆるしてやらぬものでもない」
「では、そのように、久世様の家老へ申しつたえまする。よろしゅうござりましょうな?」
「む……まあ、それならば、いたしかたあるまい」
と、胸を張り、威張って見せた高木筑後守だが、内心は、ほっとしたにちがいない。
ちょうど、おなじころに……。
久世帯刀も、家老の谷万右衛門から、おなじようなことを聞かされ、
「ふむ。筑後守殿から、ひそかにゆるしを請うてまいったと申すのなら、これを受けいれぬわけにもまいるまい。それが武士たるものの度量と申すものじゃ」
「ははっ。さっそくのお聞きとどけ、さぞかし、高木様の家老・坂西殿もよろこばれましょう」
そして二人の家老は、それぞれに、双方の主人の体面もあろうから、この後に顔を合わせたときも、この賭事については沈黙をまもることを、
「お気の毒ゆえ、お口にはお出しあそばさぬよう」
と、念を入れ、二人の主人も、
「うむ。そこまで相手を苦しめるつもりはない」

と、いった。
いったが、しかし、高木筑後守は、
「なれど、試合が終るまでは、吉村弥惣治の耳に入れてはならぬ。弥惣治の気がゆるんではならぬゆえ」
と、厳命をした。
久世帯刀のほうも、同様であった。
「いや、まことにもって、試合をする両人には気の毒」
「いや、坂西殿。これも忠義の一つでござるよ」
「なれど、谷殿」
「何でござる?」
「この試合の決着が、また……」
「何の。それほどのことなら、貴殿とそれがしが、このようにちからを合わせているかぎり、たがいの主人をなだめることなど、わけもないことでござる。のう、そうではござるまいかな」
「いや、まことに……なにぶん、世間知らずの主人ゆえ……」
「赤子の手をねじるようなものでござるよ」
「あは、はは……」
「うふ、ふふ……」

「ともあれ、御拝領の品を賭けることとさえ押しとどめれば、あとは何とでも……」
「はい、さよう」
「ときに坂西殿。貴殿は、どちらが勝つとおもわれますな?」
「そりゃ、むろんのこと。わが吉村弥惣治が勝ちますぞ」
「何の。勝つは、われらの羽賀儀平でござる」
「では、何をお賭けなさるな?」
「負けたほうが、この石河屋の酒飯の代を……」
「よろしい。賭けましょう」
「いや、これは愉快千万」
「ともあれ、先ず、祝いの盃を……」
「頂戴いたす」
二人の老獪な家老の交渉が、うまく実をむすんだとは、吉村弥惣治も羽賀儀平もまったく知らぬ。
また、秋山小兵衛・大治郎父子も、これを知らぬ。
吉村弥惣治は、この夜も眠れなかった。
羽賀儀平は、大いびきをかいて熟睡している。
弥惣治は、おのれ一人の勝負のほかに、その影響が多勢の人びとへおよぶことをおもい、苦悩している。

羽賀儀平は、おのれ一人の勝利を信じてうたがわぬ。
そして、いよいよ、試合を明日の朝にひかえた夜が来た。
この夜。
吉村弥惣治は、夕餉の折に酒をのみ、
「では、先にやすむぞ」
妻とむすめへやさしく声をかけ、寝所へ入ると、たちまちに深い眠りへ落ちて行った。
ついに土壇場まで来て、弥惣治はすべてを放擲し、一個の剣士として闘うことに没入することを得たのだ。
それに引きかえ、この夜になって、羽賀儀平は妙に昂奮し、眠れなくなってしまっている。
いざとなって、不安が芽生えてきたのであった。
試合の審判を、自分の師匠の斎藤五郎左衛門がつとめることにも責任を感じはじめた。
今日、最後の仕上げに道場へ出むいた折、斎藤五郎左衛門がきびしい顔つきで、
「主人と師の顔を汚すまいぞ」
と、いってよこした。
その瞬間から、羽賀の胸がさわぎはじめたのである。
同じ夜。
秋山大治郎は、父の隠宅へ泊り、父と共に酒をくみかわし、まだ宵ノ口だというのに、父

と枕をならべ、ぐっすりと眠った。

六

城北・高田の馬場は、現・東京都新宿区高田馬場にあった。

鎌倉の時代に、源頼朝が此地に於て、軍の勢揃をしたことがあるそうな。そのころから、台地の上の草原であったにちがいない。

のちに、三代将軍・徳川家光は、この地に馬場を築かしめて、幕臣の弓馬調練のところとした。

高田の馬場は東西六町、南北三十余間といわれ、中央には〔追いまわし〕と称する堤が築かれてい、馬場の北側の松並木の美しさを賞でて、杖を引く人びとも少なくない。

戸塚村の台地にあるだけに、馬場からの眺望もよろしく、ひろびろと見晴らす田地の彼方に富士山をのぞむこともできる。

吉村弥惣治と羽賀儀平の試合は、当日の七ツ半（午前五時）と決められていた。

夏のことだし、夜明けも早い。なるべくは人の目にふれぬようとの配慮から、この時刻に決った。

弥惣治には、あるじの高木筑後守のほかに、家老・坂西房之助と家来二名がつきそい、羽賀には、久世帯刀に、家老の谷万右衛門と家来二名という、これも申し合せたことである。

高木筑後守一行は、まだ、あたりが暗いうちに駿河台の屋敷を出て、高田の馬場へ向った。

筑後守の配慮により、吉村弥惣治は駕籠に乗せられた。

筑後守は陣笠をかぶり、騎乗で駕籠につきそった。

「見よ、坂西」

と、筑後守が家老にささやいた。

「弥惣治の、あの落ちつきようはどうじゃ」

「いかさま、さようで……」

坂西家老も、同じおもいであった。

このところ、試合が近づくにつれ、緊張のためか吉村弥惣治の気色がすぐれぬことを、坂西は心配していたのだ。それがどうだ。昨日からの弥惣治は、

「まさに、神色自若……」

であって、この日の未明に屋敷を出るときも、坂西家老が、そっと、

「こころおきなく、な……」

ささやいたとき、弥惣治はにっこりとして、

「御家老。御案じなされますな」

しずかに、こたえてよこした。

（うむ。これならば大丈夫……）

と、あるじほどの昂奮状態ではなかった坂西房之助も、

（弥惣治は、かならず勝ってくれるにちがいない）
全身が、活と熱くなったものだ。
吉村弥惣治の脳裡に、いまは勝ちも負けもない。
ただひたすらに、恩師・秋山小兵衛よりつたえられた無外流の真髄を、
（至らぬながらも、自分の一剣をもってあらわそう）
その一念のほかのいっさいを、打ち捨ててしまっていた。
高木筑後守一行は、高田の馬場の外で馬と駕籠から下り、これを小者たちへあずけ、馬場の中へ歩み入った。
前夜は、このあたりに雷雨があり、馬場の土は充分に水気をふくみ、かなり濃い霧がたちこめていた。
竹矢来に沿って、東へ一町ほども行くと藁屋根の見所が建てられてある。
この馬場で弓術や馬術の試合がおこなわれるときは、見所を中心にして幔幕を張り、見物をすることになる。
相手方は、まだ到着していなかった。
家来は、戸が閉っている見所の前へ二つの床几をおいた。
「さ、これへ……」
と、高木筑後守が吉村弥惣治をいざない、自分と並んで床几へ腰をかけさせた。破格のことだが、弥惣治は悪びれもせず、あるじに一礼をし、ゆったりと腰をおろす。

堂々として、しかも恬静な、その態を見た家来のひとりが、のちに、
「どちらが八千石の殿様か、見間ちがいをするようだったぞ」
と、洩らしたという。
つまり、あるじの筑後守のほうが、ならんで腰をおろした吉村弥惣治よりも、
「貧弱に見えた……」
と、いうわけなのだ。
やがて……。
久世帯刀一行が、審判役の斎藤五郎左衛門と共に、試合の場所へあらわれた。
久世帯刀は、羽賀儀平へ駕籠はあたえず、そのかわり馬に乗せて来た。
家来たちが、弥惣治と羽賀の床几を見所の左右へ約十間をへだてて置き、両人は、これに腰をかける。いままで弥惣治が腰をかけていた位置に、久世帯刀が高木筑後守とならんで腰をおろした。
吉村弥惣治と羽賀儀平は、審判役の合図を受けて立ちあがり、身仕度にかかった。
朝の微風に、すこしずつ、霧がながれはじめた。
いつの間にか暁闇も消え、両人の試合には、いささかのさしさわりもない。
双方ともに相ゆずらぬ手練者の闘いであるから、撃ち合う得物は木太刀であっても、それは真剣と同じことだ。
襷をまわし、鉢巻をしめ、袴の股立を取った二人へ、斎藤五郎左衛門が「いざ……」と、

声をかけた。

うなずいた吉村弥惣治と羽賀儀平が木太刀を把って向き合い、ゆっくりと近寄る。

顔色が冴えて無表情の弥惣治に引きくらべ、羽賀の両眼は血走り、唇をかみしめた凄まじい面貌となっていた。

腰を落して一礼した二人が、ぱっと立ちあがって木太刀を構えた一瞬、これを見まもる人びとの緊張は最高潮に達した。

そのときである。

「わあい。何をやっとるのじゃい。阿呆くさいまねをするなよ、ああん!!」

突然、大声があがった。

おどろいて見る人びとの目は、向うの〔追いまわし〕の松の木蔭からあらわれ、吹きながれる霧の幕を縫って近づいて来る二つの人影をとらえた。

二人とも、男である。

大きい男と、小さな男である。

二人とも、乞食である。

乞食と見るより仕方もない風体であった。

共に、埃と汗と脂にまみれつくしたような単衣の裾を端折り、素足に草鞋をはき、破れかけた菅笠をかぶり、雑巾のような布をもって頬被りをし、手には太い棍棒を持っている。

「やあい、こいつら。阿呆くさいまねをするな!!」

大声を発しているのは、小男のほうであった。

その小男が、つかつかと、向き合っている吉村弥惣治と羽賀儀平の間に入って来たので、

「無礼者め!!」

「追い払え!!」

高木筑後守と久世帯刀が、傍らに控えている家来たちへ命じた。

ところが、それを、どう聞きちがえたものか、羽賀儀平が血相を変え、

「おのれ!!」

猛然と走り寄りざま、乞食の小男の頭上から木太刀を叩きつけた。

羽賀の目にも……いや、だれの目にも、つぎの瞬間には、この乞食が笠の上から脳天を撃たれ、悲鳴を発して転倒する姿が映ったことであろう。

しかし、

「うわ……」

叫んで、馬場の土へ叩きつけられたのは、何と、羽賀儀平なのであった。

人びとは、目をうたぐった。

さすがに羽賀は、すぐさまはね起き、飛び退いて木太刀を構え直そうとした。

したが、遅かった。

すっと身を寄せて来た小男の乞食が事もなげに、

「ほれ」

手にした棍棒を突き出すと、これが羽賀儀平の鳩尾の急所へ吸い込まれるようにして見事に入った。

「むうん……」

　木太刀を振り落した羽賀は、あまりにも呆気なく倒れ伏し、そのまま、気をうしなってしまったではないか……。

　人びとは、驚愕した。

　けれども、このまま、乞食たちの理不尽を見すごしておくわけにはまいらぬ。

「曲者!!」

　わめきざま、高木・久世両家の家来が合わせて四名、いっせいに走り出て大刀を抜きはらった。

「かまわぬ、斬って捨てい!!」

「わしがゆるす。斬れ、斬れ!!」

　床几から立った二人の〔殿様〕が叫んだ。

　この中にあって、ただ一人、吉村弥惣治のみは木太刀をひっさげたまま、やや後方に身を引き、この異変を凝と見まもっていた。

　いかに乞食の姿になっていようとも、わが恩師の姿を見誤るはずがない弥惣治であった。

　ただ、不審でならぬのは、

（何故、秋山先生が、この場に、あのようなお姿になられて出ておいでになったのか？）

　このことである。

　四人の家来の白刃の前へ、今度は大男の乞食がするすると近寄り、物もいわずに躍り込み、棍棒を揮った。

「うわ……」

「ぎゃあっ……」

「むうん……」

　白刃が、それぞれの手から落ち、四人が前後左右に、からみ合うようにしてよろめき、ばたばたと伏し倒れ、気をうしなった。

　それこそ、

「あっ……」

　という間の出来事であった。

　つぎに、やむなく、審判役の斎藤五郎左衛門が大刀を引きぬいて、大男の乞食の前へ出た。

「鋭!!　おおっ!!」

　斬りかかり、薙ぎ払う斎藤の大剣は、いたずらに朝の大気を引き裂くのみであったが、そのうちにこれも、大男の棍棒を急所にくらって失神してしまった。

　高木筑後守も久世帯刀も、両家の家老たちも茫然自失した。

　このとき吉村弥惣治が、木太刀を構えて大男の乞食の前へ迫った。

「おい、待て」

と、割って入ったのは、小男の乞食……秋山小兵衛である。
大男は……秋山大治郎は、炭の粉をまぶした黒い顔をほころばせて、父と入れかわった。
二人の〔殿様〕と家老は、最後の望みを吉村弥惣治へ托した。いや、托さざるを得なかった。
「さ、来い」
低くいって、小兵衛が棍棒を脇構えにかまえた。
微かにうなずいた弥惣治が、木太刀を晴眼につける。
いまは弥惣治も、おぼろげながら、事情がわかりつつあった。くわしいことは知らぬ。理屈でわかったのではない。
（ああ、これは秋山先生が、どこからか、自分の苦境をお耳になされ、若先生と共に、自分を救いに来て下されたのだ）
そのことが、一瞬の感覚として、吉村弥惣治の腑に落ちたのであった。
「たあっ!!」
晴眼の木太刀を押しつけるようにして、弥惣治は捨身に恩師へ迫る。
「む……」
じりりと退って、左へまわりこみつつ、小兵衛の棍棒が脇構えから下段へ移りかけた。
打ち込む機会は、この折をおいては二度となかったろう。
以前、四谷仲町の道場で、恩師に稽古をつけてもらっていたときの自分を、久しぶりに取

りもどした吉村弥惣治が、
「鋭!!」
地を蹴って、恩師の頭上へ木太刀を撃ち込んだ。
声もなく、秋山小兵衛の小さな老体が、地を低み飛ぶ燕のごとくひるがえったとき、
「う、うう……」
木太刀をつかんだままの吉村弥惣治が、がっくりと両ひざをつき、ゆっくりと伏し倒れて行った。
「すこしは、上達したようじゃ」
つぶやいた小兵衛が、
「大治郎。あの連中を逃すな」
と、いったものだ。
息をのみ、立ちすくんでいた四人の殿様と家老が、あわてて逃げようとしたが、もはや、どうにもならぬ。
筑後守も帯刀も、谷と坂西の両家老も、秋山父子の棍棒をくらって気をうしない、転げ倒れた。
「見よ、大治郎。これが八千石、七千石の大身の殿様だとよ」
「あきれ果てたものですな」
「だから、世も末じゃと申すのだ」

「これだけにしておけば、両家ともに、仲よく恥をさらしたのですから、二度とふたたび、愚かなまねはいたしますまい」

「そのことよ、そのことよ」

「うまく行きましたな、父上」

「この、わしとお前が着ているものを見よ。実に、ひどいものだ」

「母上と三冬が苦心の作です」

「まったく大したものじゃ。それにしても大治郎。弥惣治は、われらを見破ったらしいのう」

「それは当り前のことでしょう、父上」

「他のやつらは、よいあんばいに、わしらの顔を知らぬ」

「吉村さんも、大分に修行を積まれたと見えますな」

「そう、おもったかえ?」

「一瞬のことでしたが、父上を、あそこまで押し詰めたのですから……」

「さようさ……」

秋山小兵衛は、気をうしなっている愛弟子の顔をのぞきこんで、

「こいつ、うっとりとした顔つきで、ねむっているわえ」

と、いった。

霧は、ほとんど晴れた。

朝の光が馬場にゆきわたり、雀が囀りはじめた。

馬場の入口で、三頭の馬と一挺の駕籠と共に、試合がすむのを待っていた両家の小者たちが、

「まだ、やっているのかな?」

「わからぬ」

「気合声が聞えたようだが……」

「どうだ、そっと見物をしよう」

「いや、よしたがいい。殿様に見つかったら、それこそ大変だ」

「ここをうごいてはならぬと、おれたちは念を押されているのだからな」

「それにしても、気にかかる」

「まったくなあ……」

いずれも、試合に金を賭けているものだから、気が気ではないらしい。

そこへ……。

馬場の中から二人の乞食が出て来たものだから、

「やい、やい。おのれらは何だ。あっちへ行け、あっちへ……」

小者のひとりが怒鳴りつけるのへ、小男の乞食が、かたむけた笠の内から、

「おい。馬場の中で、殿様がおよびだぞ」

「な、何だと……?」

「早く行ってやれ。気つけの水を忘れるなよ」
笑いながら二人の乞食が、木立の向うへ消えて行くのを、小者たちは狐につままれたような顔つきで見送ったのである。

解説

常盤新平

秋山小兵衛は九十すぎまで生きることになっている。『剣客商売 隠れ簑』では冒頭の「春愁」で刀屋の嶋屋孫助に年齢をきかれて、「六十をこえたことは、たしかじゃよ」と答えた小兵衛は、「ならば、あと三十度は、桜花をごらんになれましょう」と言われる。

秋山小兵衛が、九十余歳まで長生きするとひとから言われたのは、その日がはじめてだった。『剣客商売』七冊目のこの『隠れ簑』まで、小兵衛にとって死は遠いかなたにあって、まことに元気があり、親子ほども年齢のはなれたおはるに、「久しぶりで背中のながしっこをしようか」と風呂に誘うのである。

じつに春風駘蕩としている。読者から見れば、秋山小兵衛は羨しい身分である。河畔に隠宅をかまえ、息子は立派な剣客に成長して、美貌の女剣士を嫁にもらい、本人には若い女房がいて、金の心配もなく、思いわずらうことは何一つない。

しかも、小兵衛は周囲の人たちにとっては神のごとき存在である。どんな難事件も自らの剣と英知とで解決してみせる。それでいて、傲慢になることはなく、金の遣い方を心得ていて、人情の機微にも通じている。

どこといって欠点もなく、だから、市井の神さまなのであるが、人びとから手の届かぬ小兵衛ではない。「春愁」では嶋屋が「御新造さまが、まだ、お若いのに」と言えば、この老剣客は大いに照れて、「それをいうな。はずかしいではないか」と人間臭い魅力にあふれている。

『隠れ簑』は『剣客商売』のシリーズのなかでも最も春風駘蕩とした物語が集まっている。「大江戸ゆばり組」では、絵師の川野玉栄に小兵衛は言っている。「毎日が退屈になるばかりでござるなあ」

だから、「たまさかには、こうした事件が起ってくれぬと」、生きているたのしみもない。こうして、小兵衛のもとに「こと」が舞いこんでくる。これは『剣客商売』全体にいえることだろう。はじめは、小兵衛は受身なのである。金についても受身であって、金銭についてはおそろしく恬淡としているのに、小兵衛は経済的に不自由することがない。たぶん、あまりに恬淡としているが故に、お金のほうで押しかけてくるかのようである。

「徳どん、逃げろ」では、小兵衛は自殺した金貸し、浅野幸右衛門の遺金、千五百両をあずかっている。自分の家が盗賊に狙われていると知ったとき、「こういうことがあるから、長生きをする甲斐もあるということよ」と小兵衛は膝を叩かんばかりに喜んでいる。ついでながら、そのとき、読んでいる私も実は嬉しいのである。私まで千五百両をあずかっている気分になってくる。

池波正太郎という作家は読者をいい気持にさせてくれるのだ。少なくとも私はいい気持に

なりたくて、『剣客商売』を読むのである。本を読みたくない気分のとき、手にとってみるのが池波さんの小説なのである。これは、作者がいっとき私を秋山小兵衛になったような気分にさせてくれるからではないかと思う。

めったに本を読まない人が池波正太郎だけは読む。『鬼平犯科帳』の第一巻をなにげなく読みはじめたら、やめられなくなったという人たちがいる。『剣客商売』もそのようなシリーズであって、いわば後を引くのである。

シリーズを読みおえたら、それで終りかというと、そうではない。またはじめから『剣客商売』を読みはじめる。物語がたんに面白いだけだったら、一度読めば、それでおしまいである。

『剣客商売』をもう一度読んでみるのは、一体なんだろうと考えてみれば、一つは秋山小兵衛の特徴であるダンディズムである。金ばなれのよさ、心づけのはずみ方に私などはうっとりする。

洲崎で鰻の辻売りをしている又六は「こんなにいただいたら困るですよ」と恐縮するほどの「ごほうび」をもらうし(「大江戸ゆばり組」)、「越後屋騒ぎ」では四谷の弥七と上野の文蔵の二人の御用聞きにそれぞれ金二十両をあたえて、探索を頼んでいる。小兵衛が弥七や又六や茶店の老爺などに金をわたすシーンを読むのが、私は好きである。

心づけをはずむというのはダンディズムの一つだろう。小兵衛はこのダンディズムを随所で発揮している。『剣客商売』が豊かな印象をあたえるのは、小兵衛の気前のよさ

万年筆』や『男のリズム』などのエッセー集でも死に触れている。うろおぼえだけれども、人は生れたときから死に向って歩んでいるといった意味のことを書いておられて、それを読んだとき、私は不吉なものを感じた。その後も死について書かれたエッセーをいくつも読んだ。『剣客商売』にも『鬼平犯科帳』にもそれが見られるようになった。こんど『銀座日記』を読みかえしたのも、そのためである。

『隠れ簑』には死の影はなく、はじめに書いたように春風駘蕩としていて、そこから自然なユーモアが生れている。それを私たちは楽しめばよい。

それに、本書では江戸の町が美しく描かれている。小兵衛がおはるを連れて出かけた深川について、「江戸であって、江戸ではない……」一種の別天地だったと讃え、「深川は江戸湾の海にのぞみ、町々を堀川が縦横にめぐり、舟と人と、道と川とが一体になった明け暮れが、期せずして詩情を生むことになる」と書いている。

『剣客商売』には「詩情」がある。物語にどんな血なまぐさい「こと」があっても、各編にそれがみなぎっている。秋山小兵衛は弥七や又六や為七を愛したように、江戸の町をこよなく愛したのだ。作者が江戸を愛していたのである。

池波さんは東京がどんどん怪物になっていくことを嘆かれた。池波さんの数少ない現代小説である『原っぱ』は東京への別れの言葉でもあった。

『剣客商売』を書くことによって、池波さんは江戸に生きたのである。池波さんの葬儀のとき、山口瞳氏は弔辞のなかで、池波さんは「江戸に長逗留」されたと言われた。名言であって、私などはとても思いつかない。

小兵衛が作者その人ではないかと思ったシーンが「越後屋騒ぎ」にある。「なんの、日ざかりの道を歩むのもよいものじゃ。汗をたらたらとながしながら、な……」

夏の日ざかりの上野山内を歩く小兵衛は汗をぬぐいながら、(むかしは、いかに暑くとも汗なぞ出なかったものじゃが……)と思う。こういうなにげないシーンにも私は共感する。年齢をとってみないと、理解できないシーンであり、それ故に、『剣客商売』はおとなの小説なのである。

(平成三年八月、作家)

この作品は昭和五十一年十月新潮社より刊行された。

池波正太郎著　剣客商売

白髪頭の粋な小男・秋山小兵衛と巌のように逞しい息子・大治郎の名コンビが、剣に命を賭けて江戸の悪事を斬る。シリーズ第一作。

池波正太郎著　剣客商売　辻斬り

闇の幕が裂け、鋭い太刀風が秋山小兵衛に襲いかかる。正体は何者か？　辻斬りを追跡する表題作など全7編収録のシリーズ第二作。

池波正太郎著　剣客商売③　陽炎の男

隠された三百両をめぐる事件のさなか、男装の武芸者・佐々木三冬に芽ばえた秋山大治郎へのほのかな思い。大好評のシリーズ第三作。

池波正太郎著　剣客商売④　天魔

「秋山先生に勝つために」江戸に帰ってきたとうそぶく魔性の天才剣士と秋山父子との死闘を描く表題作など全8編。シリーズ第4作。

池波正太郎著　剣客商売⑤　白い鬼

若き日の愛弟子を斬り殺された秋山小兵衛が、復讐の念に燃えて異常な殺人鬼の正体を追及する表題作など、大好評シリーズの第五作。

池波正太郎著　剣客商売⑥　新妻

密貿易の一味に監禁された佐々木三冬を秋山大治郎が救い出すと、三冬の父・田沼意次は嫁にもらってくれと頼む。シリーズ第6作。

池波正太郎著

黒白（上・下）—剣客商売番外編—

若き日の秋山小兵衛に真剣勝負を挑んだ小野派一刀流の剣客・波切八郎。対照的な二人の剣客の切り結びを描くファン必読の番外編。

池波正太郎著

真田太平記（一）—天魔の夏—

天下分け目の決戦を、父・弟と兄とが豊臣方と徳川方とに別れて戦った信州・真田家の波瀾にとんだ歴史をたどる大河小説。全12巻。

池波正太郎著

真田太平記（二）—秘密—

武田家滅亡後、上・信二州に孤立した真田昌幸は、天下の帰趨を見さだめるべく真田忍びを四方に飛ばせて、必死で延命の道をさぐる。

池波正太郎著

真田太平記（三）—上田攻め—

信州・上田におのれの命運を賭して城を築いた真田昌幸は、徳川・北条連合軍と戦端を開き、捨身の決戦で数倍にのぼる敵を退ける。

池波正太郎著

真田太平記（四）—甲賀問答—

豊臣秀吉の天下統一が成ると同時に、徳川家康の天下取りを陰でおし進める甲賀忍びと、真田の草の者との凄絶な戦いが開始される。

池波正太郎著

真田太平記（五）—秀頼誕生—

豊臣秀吉歿後の去就をめぐって、世継ぎ秀頼に賭ける真田昌幸・幸村と、徳川方から嫁をもらった信幸との間に次第に溝ができてゆく。

池波正太郎著

真田太平記（六）—家康東下—

会津出陣中の真田親子は一夜会談し、信幸はそのまま徳川軍に留まるが、昌幸と幸村は徳川軍団を離れて上田城に帰り徳川を迎え撃つ。

池波正太郎著

真田太平記（七）—関ヶ原—

徳川秀忠軍四万を上田城に迎えうった真田父子は様々な謀略を使ってこれを釘づけとし、ついに関ヶ原の決戦に間に合わせなかった。

池波正太郎著

真田太平記（八）—紀州九度山—

真田信幸と舅・本多忠勝の助命嘆願によって紀州九度山に蟄居させられた真田父子は、再び決戦の来る日を夢みて孤独な日々をおくる。

池波正太郎著

真田太平記（九）—二条城—

家康の豊臣家取潰し策により東西手切れに向かって情勢が緊迫化する中、その日を見ることなく真田昌幸は九度山で寂しく永眠する。

池波正太郎著

真田太平記（十）—大坂入城—

ひそかに大坂城に入城した真田幸村は、外堀の外に真田丸と名づけた小さな砦を築き、これに拠って徳川軍をさんざんに打ちすえる。

池波正太郎著

真田太平記（十一）—大坂夏の陣—

裸城にされてしまった大坂城を打って出た真田幸村は、元和元年五月七日、若き日の予感どおりに向井佐平次とともに戦場に倒れる。

池波正太郎著
真田太平記（十二）
―雲の峰―

家康の死後、秀忠は信之の真田藩取り潰しを策すが、ただ一人生き残ったお江の活躍により、信之は難をまぬがれる。全十二巻完結。

池波正太郎著
忍者丹波大介

関ケ原の合戦で徳川方が勝利し時代の波の中で失われていく忍者の世界の信義……一匹狼となり暗躍する丹波大介の凄絶な死闘を描く。

池波正太郎著
編笠十兵衛（上・下）

幕府の命を受け、諸大名監視の任にある月森十兵衛は、赤穂浪士の吉良邸討入りに加勢。公儀の歪みを正す熱血漢を描く忠臣蔵外伝。

池波正太郎著
男（おとこぶり）振

主君の嗣子に奇病を侮蔑された源太郎は乱暴を働くが、別人の小太郎として生きることを許される。数奇な運命をユーモラスに描く。

池波正太郎著
俠客

「お若えの、お待ちなせえやし」の幡随院長兵衛とはどんな人物だったのか――旗本水野十郎左衛門との宿命的な対決を通して描く。

池波正太郎著
剣の天地

戦国乱世に、剣禅一如の境地をひらいて新陰流の創始者となり、剣聖とあおがれた上州の武将・上泉伊勢守の生涯を描く長編時代小説。

池波正太郎著
闇の狩人（全二冊）

記憶喪失の若侍が、仕掛人となって江戸の闇夜に暗躍する。魑魅魍魎とび交う江戸暗黒街に名もない人々の生きざまを描く時代長編。

池波正太郎著
闇は知っている

金で殺しを請け負う男が情にほだされて失敗した時、その頭に残忍な悪魔が棲みつく。江戸の暗黒街にうごめく男たちの凄絶な世界。

池波正太郎著
雲霧仁左衛門（全二冊）

神出鬼没、変幻自在の怪盗・雲霧。政争渦巻く八代将軍・吉宗の時代、狙いをつけた金蔵をめざして、西へ東へ盗賊一味の影が走る。

池波正太郎著
さむらい劇場

八代将軍吉宗の頃、旗本の三男に生れながら、妾腹の子ゆえに父親にも疎まれて育った榎平八郎。意地と度胸で一人前に成長していく姿。

池波正太郎著
おとこの秘図（全三冊）

江戸中期、変転する時代を若き血をたぎらせて生きぬいた旗本・徳山五兵衛――逆境をはねのけ、したたかに歩んだ男の波瀾の絵巻。

池波正太郎著
忍びの旗

亡父の敵とは知らず、その娘を愛した甲賀忍者・上田源五郎。人間の熱い血と忍びの苛酷な使命とを溶け合わせた男の流転の生涯。

池波正太郎著
まんぞくまんぞく

十六歳の時、浪人者に犯されそうになり家来を殺されて、敵討ちを誓った女剣士の心の成長の様を、絶妙の筋立てで描く長編時代小説。

池波正太郎著
秘伝の声（上・下）

師の臨終にあたって、秘伝書を土中に埋めることを命じられた二人の青年剣士の対照的な運命を描きつつ、著者最後の人生観を伝える。

池波正太郎著
上意討ち

殿様の尻拭いのため敵討ちを命じられ、何度も相手に出会いながら斬ることができない武士の姿を描いた表題作など、十一人の人生。

池波正太郎著
真田騒動
—恩田木工—

信州松代藩の財政改革に尽力した恩田木工の生き方を描く表題作など、大河小説『真田太平記』の先駆を成す〝真田もの〟5編。

池波正太郎著
あほうがらす

人間のふしぎさ、運命のおそろしさ……市井もの、剣豪もの、武士道ものなど、著者の多彩な小説世界の枠を精選した11編収録。

池波正太郎著
おせん

あくまでも男が中心の江戸の街。その陰にあって欲望に翻弄される女たちの哀歓を見事にとらえた短編全13編を収める。

池波正太郎著
あばれ狼

不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる渡世人たちの男と男の友情を描く連作3編と、『真田太平記』の脇役たちを描いた4編。

池波正太郎著
谷中・首ふり坂

初めて連れていかれた茶屋の女に魅せられて武士の身分を捨てる男を描く表題作など、本書初収録の3編を含む文庫オリジナル短編集。

池波正太郎著
黒幕

徳川家康の謀略を担って働き抜き、六十歳を越えて二度も十代の嫁を娶った男を描く『黒幕』など、本書初収録の4編を含む11編。

池波正太郎著
食卓の情景

鮨をにぎるあるじの眼の輝き、どんどん焼屋に弟子入りしようとした少年時代の想い出など、食べ物に託して人生感を語るエッセイ。

池波正太郎著
散歩のとき何か食べたくなって

映画の試写を観終えて銀座の〔資生堂〕に寄り、はじめて洋食を口にした四十年前を憶い出す。今、失われつつある店の味を克明に書留める。

池波正太郎著
日曜日の万年筆

時代小説の名作を生み続ける著者が、さりげない話題の中に自己を語り、人の世を語る。手練の切れ味をみせる〟とっておきの51話〟。

池波正太郎著
男の作法
これだけ知っていれば、どこに出ても恥ずかしくない！ てんぷらの食べ方からネクタイの選び方まで、〝男をみがく〟ための常識百科。

池波正太郎著
男の系譜
戦国・江戸・幕末維新を代表する十六人の武士をとりあげ、現代日本人と対比させながらその生き方を際立たせた語り下ろしの雄編。

池波正太郎著
味と映画の歳時記
半生を彩り育んださまざまな〝味と映画〟の思い出にのせて、現代生活から失われてしまった四季の風趣と楽しみを存分に綴る。

池波正太郎著
映画を見ると得をする
なぜ映画を見ると人間が灰汁(あく)ぬけてくるのか……。シネマディクト（映画狂）の著者が、映画の選び方から楽しみ方、効用を縦横に語る。

池波正太郎著
フランス映画旅行
50年間映画で見つづけてきた地を初めて訪れた感動を、名優ジャン・ギャバンの思い出とからめ、自筆の絵・写真とともに語り下ろす。

池波正太郎著
むかしの味
人生の折々に出会った「忘れられない味」。それを今も伝える店を改めて全国に訪ね、初めて食べた時の感動を語り、心づかいを讃える。

池波正太郎著
ドンレミイの雨
パリの古き良き居酒屋「B・O・F」の老主人ジャンとの心のかよい合いを描いた短編「ドンレミイの雨」に、三つの海外紀行を収録する。

池波正太郎著
池波正太郎の銀座日記〔全〕
週に何度も出かけた街・銀座。そこで出会った味と映画と人びとを芯に、ごく簡潔な記述で、作家の日常と死生観を浮彫りにする。

伊藤桂一著
病みたる秘剣
御用聞をお役御免になった浜吉親分。今は風車など売っているが、昔鳴らした腕の冴え、捕物の虫はおさまらぬ……。連作捕物12編。

伊藤桂一著
秘剣・飛蝶斬り
飛び交う蝶を目隠しのまま斬る秘剣の持主が美貌の人妻と脱藩。夫は手裏剣の修行をして跡を追った——。剣の醍醐味あふれる10編。

小松重男著
ずっこけ侍
主君の逆鱗に触れ「永の暇」を頂戴してしまった三毛蘭次郎。だが人生ずっこけてからが面白い。激笑仕掛人の艶福ひょうきん行状記。

小松重男著
でんぐり侍
侍、岡っ引、豪商、隠密、女……、さまざまな生きざまを艶やかに、そしてせつなくも滑稽に描いた9編を収録する侍シリーズ番外編。

藤沢周平著　用心棒日月抄

故あって人を斬り脱藩、刺客に追われながらの用心棒稼業。が、巷間を騒がす赤穂浪人の動きが又八郎の請負う仕事にも深い影を……。

藤沢周平著　孤剣　用心棒日月抄

お家の大事と密命を帯び、再び藩を出奔――用心棒稼業で身を養い、江戸の町を駆ける青江又八郎を次々襲う怪事件。シリーズ第二弾。

藤沢周平著　刺客　用心棒日月抄

藩士の非違をさぐる陰の組織を抹殺するために放たれた刺客たちと対決する好漢青江又八郎。著者の代表作《用心棒シリーズ》最新編。

多岐川恭著　用心棒

過去は捨てた、未来も捨てた。色と欲の泥沼の中で、明日をも知れぬ用心棒――骨の髄まで腐った奴らを南無三宝と捨て身斬り。

多岐川恭著　色仕掛　闇の絵草紙

巽屋孫兵衛が率いる、ひと癖もふた癖もある面々が色欲に呆けた悪党どもを、あの手この手で引っ掛ける。江戸のピカレスク・ロマン。

多岐川恭著　色仕掛　深川あぶな絵地獄

巽屋孫兵衛一党が、色欲に狂った男どもを鮮やかな手口で欺き、身代残らず巻き上げる。痛快無比の8編を収めたシリーズ第二弾！

新潮文庫最新刊

星新一著　どんぐり民話館

民話、神話、SF、ミステリー等の語り口で、さまざまな人生の喜怒哀楽をみせてくれる31編。ショートショート1001編記念の作品集。

池波正太郎著　賊将

幕末には〈人斬り半次郎〉と恐れられ、西郷隆盛をかついで西南戦争に散った桐野利秋を描く表題作など、直木賞受賞直前の力作6編。

佐藤愛子著　こんなふうに死にたい

ある日偶然出会った不思議な霊体験をきっかけに、死後の世界や自らの死へと思いを深めていく様子をあるがままに綴ったエッセイ。

北杜夫著　怪盗ジバコの復活

巨大組織を解散した謎だらけの心優しい大怪盗ジバコが愛しいルネ嬢のために今、世界の名探偵相手にたった一人で奇抜な挑戦をする。

泉麻人・いとうせいこう著　コンビニエンス物語

深夜の食料庫、都会のオアシス、そして僕らの社交場。徒歩五分のワンダーランド、コンビニの謎にスルドク迫る現代風俗研究書。

井沢元彦著　忠臣蔵　元禄十五年の反逆

『忠臣蔵』は吉良殺しの劇ではない。討ち入りのプロットに巧妙に仕組まれた綱吉誅伐の符牒を、当代随一の歴史推理の俊英が見抜く。

新潮文庫最新刊

中上健次著

重力の都

〈重力＝物語〉に引き寄せられる男と女。その愉楽の世界を豊麗な言葉によって語り、著者自ら谷崎潤一郎に捧げると誌した連作短編集。

花輪莞爾著

海が呑む
—悪夢小劇場2—

大津波に呑みこまれた無数の亡霊たちが、私に語りかける……。表題作など悪夢十二夜。TV化等の大好評に応えるシリーズ第二巻！

原田宗典著

十九、二十

僕は今十九歳で、あと数週間で二十になる。彼女にはフラれ、父が借金を作った。大学生・山崎の宙ぶらりんで曖昧な時を描く青春小説。

南原幹雄著

付き馬屋おえん
吉原御法度

花の吉原の焦げついた勘定を取りたてる付き馬屋。悪質な遊客に対しては手段を選ばずに、美しきヒロインが活躍する痛快連作短編集。

鈴木健二著

男が10代にやっておくこと

「ぼくはどこに行けばいいのだろう。何をすればいいのだろう」激しく目覚め、孤独と束縛感に襲われる10代の君へ指針とエールを贈る。

川島四郎著

もっとカルシウム もっと青野菜

丈夫な大人になるために、健康な大人でいるために、何を食べればよいのか、91歳で老眼も入れ歯もなしという著者がお教えします。

新潮文庫最新刊

M・ディブディン
真野明裕訳

ラット・キング

イタリア有数の富豪誘拐事件をめぐる、一族の陰湿な足の引っ張りあいのさなか、弁護士が殺された。皮肉で苦味のきいた犯罪小説。

S・L・トンプスン
高見浩訳

上空からの脅迫

イスラエルから盗まれた核兵器がホワイトハウス上空へ！ 最先端の迎撃システムを駆使して立向うマックス・モス。シリーズ第四弾。

R・コールマン
林田ひめじ訳

ビートルズをつくった男
ブライアン・エプスタイン

ユダヤ人、ホモセクシュアル、元俳優志望、誠実かつ有能な実業家。さまざまな顔を持つ世界でもっとも偉大なマネージャーの伝記。

チャップリン
中野好夫訳

チャップリン自伝(下)
—栄光の日々—

お馴染みの浮浪者姿で笑いと涙を振りまき、人々の心の奥に深い感動を呼び起して、常に大衆の味方、支配者の敵だった喜劇王の生涯。

W・ウォートン
雨沢泰訳

クリスマスを贈ります

誰かが遠い所で始めた戦争、前線で敵を殺すのは僕たち、そして殺されるのも僕たち……。なぜ僕たちは戦わなくちゃいけないんだろう。

J・キャメロン
P・J・クリストマン
高橋良平訳

風と共に去りぬ 写真集

今なお読みつがれる名作『風と共に去りぬ』の映画作りの舞台裏を、スカーレット役探しのエピソードや幻のフィルムなどで紹介する。

剣客商売 隠れ蓑

新潮文庫 い-16-61



平成三年九月二十五日 発行
平成四年十二月二十日 七刷

著者 池波正太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 営業部(〇三)三二六六—五一一一
編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替 東京四—八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Toyoko Ikenami 1976 Printed in Japan

ISBN4-10-115661-1 C0193